Z32-B88

金の星

七月号

第七號

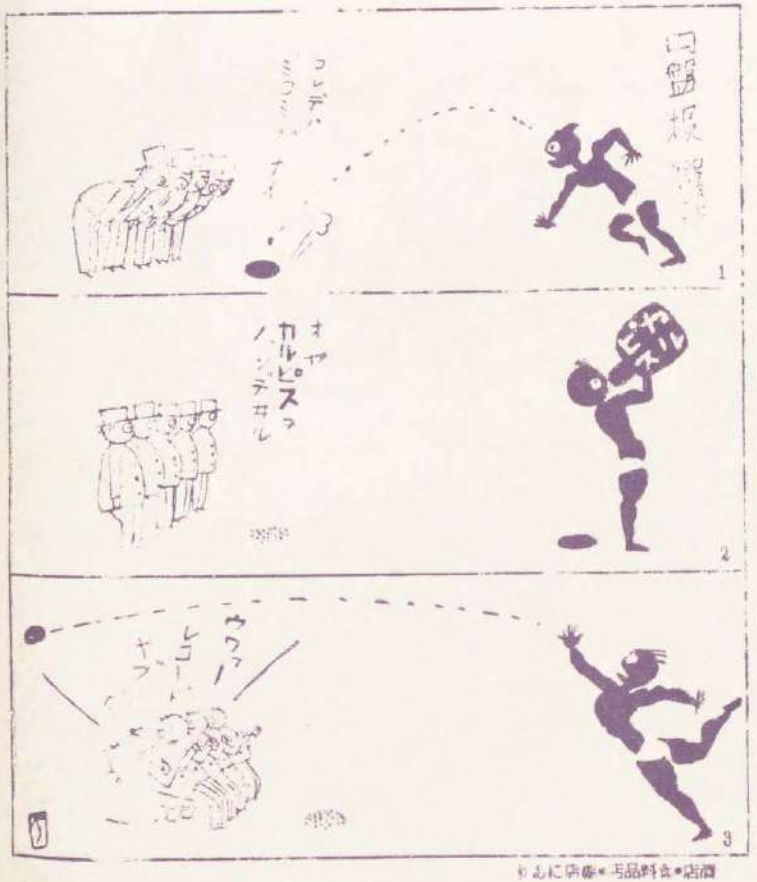
国立国会
8. 3. 26
図書館

行發日一月七年四十正大　本創刊日九月六年四十正大　（行發日一回一月毎）

漫畫家の見たる滋強飲料

スピルカ

宍戸左行畫伯揮毫



酒店・食料品・雜貨・ものに店藥

日本一の畫噺

お子様たちのお相手なしに、面白いお噺が次々と畫と一緒に躍りだす。それはうれしいお本です。

巖谷小波著（文部省認定通俗圖書）

オトギウタエ

第一卷より第三卷まで　四六倍判全三册
定價各一册金八錢
送料各金八錢

巖谷小波著（四野榮、小林鶴吉、沙羅井水畫）

四六半截全册五册　定價各金廿五錢　送料各四錢

ひらがな文（桃太郎　浦島　舌切雀　猿蟹合戰　文福茶釜　腰々山　花咲爺　一寸法師　瘤取）カタカナ文（牛若丸　曾我兄弟　浦公　清正　爲朝　天神樣　龍宮メグリ　山メグリ　車ト舟　オ馬ノ稽古　水アソビ　輕業　猿　熊　鼠　牛　象ノ遊ビ　鳥メグリ　ボチノ藝ヅクシ　家鴨ト鶏　猫ノ世界　鬼ノ世界　蟲ノ世界　動物園　兵隊ゴッコ　海軍）の二通あります。

オハナシ

このオハナシは都下有數の私立小學校の補助教科書として採用されて居ります。

鹿島鳴秋著（文部省認定圖書）

四六倍判全五册　定價各金壹圓　送料各八錢

第一卷　俠忠助　クリ〳〵坊主　熊猫　蛙合戰　外二十課まで
第二卷　森ノ芝居　遠足　オ花ノ洗濯　夜汽車の太郎外二十課まで
第三卷　泳ギノ名人　ニタマレ島　留守ノ家　裏メフリ四太郎外二十課まで
第四卷　鼠引かるた會　蛙六　夢の鷲　外二十課まで
第五卷　鳥と太郎　父ノ顔　トンダ恐人　妙な獲物　外二十課まで

巖谷小波著

第一卷　花咲爺　カチカチ山　お月さま　猫と鼠
第二卷　桃太郎　坊のお家　お馬づくし　曾我兄弟
第三卷　牛若丸　ひよつ子　運動會　舌切雀

お伽の小父さん、巖谷小波先生が皆さんのためにいろ〳〵のお噺を唱へるやうに書いて下すつたもので、それに添へた美しい畫はお芝居を見ると同じく、お噺がはつきり判る、これ程親切な爲になる本は少ないと思ひます。

東京日本橋通
丸善株式會社
東京一神田・三田・丸ビル
大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

主人公パリンヌの涙の一生は如何に大きな感激を與へるでせう。

家なき娘

マーロー作
三井信衛譯

四六判箱入美本・本文三六〇頁・定價金壹圓九拾錢・送料十二錢

忽再版

原著は佛國文豪マーローの作であつて、歐米諸國の家庭に姉妹篇「家なき子」と共にこれ程廣く讀まれた本はないと云はれてゐる世界的傑作であります。我が國にも早くからその名は知られてをりましたが、原著が手に入らない爲めに、遂に紹介される機會がなかつたものです。幸にして三井信衛先生の手によつて、本書は完全に飜譯され、わが社より出版の運びとなりました。是非圖書館並びに家庭に本書を備へて、この世界的名著を遍く我が國の少年少女に紹介したいと存じます。『金の星』の愛讀者の皆樣！　是非本書を一度お讀み下さいまし。あはれな主人公パリンヌが、如何にして自分の運命に泣き、また運命に戰つたか、本篇は涙なしには讀めないと共に、この主人公の雄々しい決心は、必ずや皆樣に深い／＼感激を與へる事でせう。尚製本の美しさは、日本にも珍しいものと誇つてゐます。

東京市本郷區 動坂五三九
金の星社
振替口座東京番 五九六五

青い眼の人形

野口雨情先生著・裝幀 蕗谷虹兒 寺内萬治郎 武井武雄 挿畫 藤伯

組表紙箱入美本・定價金壹圓八拾錢

内容 二三〇頁・送料 拾貳錢

雨情先生の童謡集で目下發行中のものは本書あるのみ。先生の最も圓熟せる時代の傑作のみを集めた本書こそ、童謡研究家の座右に無くてならぬ名著である。好評忽ち五版！

童謡曲譜 あの町この町

金の星童謡曲譜第九輯

中山晋平先生作曲　野口雨情先生作謡　竹久夢二先生裝畫

（曲目）あの町・この町・木の葉のお舟・高野山・鼠のおばさん・狸ばやし・雀なとり

『あの町この町』は中山先生の作曲中で最大の傑作と稱せられてゐるばかりでなく、又日本童謡作曲中での一二を爭ふ名曲であります。尚、他の五曲も寶玉の如き作であつて、大好評を受けてゐるものばかりです。愛好家に捧げて御批評を待つ。

東京市本郷區 動坂五三九
金の星社
振替口座東京番 五九六五

日本童謡作曲界を代表する大好評の金の星童謡曲譜集

一輯二輯各金六十錢◇三輯以下各金八十錢◇送料金六錢

第一輯 人買船（曲）
本居長世作曲・野口雨情作謠
人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、踊る燕、十五夜お月さん

第二輯 一つお星さん（曲）
本居長世作曲・野口雨情作謠
一つお星さん、七つの子、鶴と雀、鳥さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯 青い空（曲）
本居長世作曲・野口雨情作謠
青い空、燕、雨夜の傘、でんでん蟲、雀の酒盛り、浮子鳥

第四輯 赤い靴（曲）
本居長世作曲・野口雨情作謠
赤い靴、山雀、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り蟲の子

第五輯 夢とり（曲）
小松耕輔作曲・野口雨情作謠
夢とり、おしやれ格、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

第六輯 子守唄（曲）
本居長世作曲・野口雨情作謠
子守唄、機と小鳥、乙姫さま、霜柱、蕨坊主、寝の下道

第七輯 お人形さんの夢（曲）
本居長世作曲・野口雨情作謠
お人形さんの夢、釣鐘草、嘴いた嘴いた雛子、ぜの鐵、お馬のお耳、草遊び、霜柱

第八輯 ぺんぺん鳥（曲）
小松耕輔作曲・蓬萊龍作謠
ぺんぺん鳥、蟻のお使、仔牛、赤い小馬車、紅發朝鈴、さみだれ

東京市外目黒四六八六 白眉大出版部 振替東京四五九五 賣捌

東京市外巣鴨二八 金の星社 振替東京五五九五 電話小石川五三八七 東田端三五一

豐島一二郎編・裝幀挿畫 高坂元三・繁岡慶一 石橋わたる・園田宏

世界童話叢書第二編 印度童話集

四六判 箱入美本 文三〇八頁 挿畫十數枚 定價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

不思議な印度の童話は、恐らく世界中で一番面白いものでありませう。此の集に收められた十二篇の童話は、何れも餘り世間に知られてゐないもので、しかも幾度も讀まずにゐられないものばかりです。例によつて裝幀と挿畫の美しさと安價な事で、他に比較のない獨特のものです。

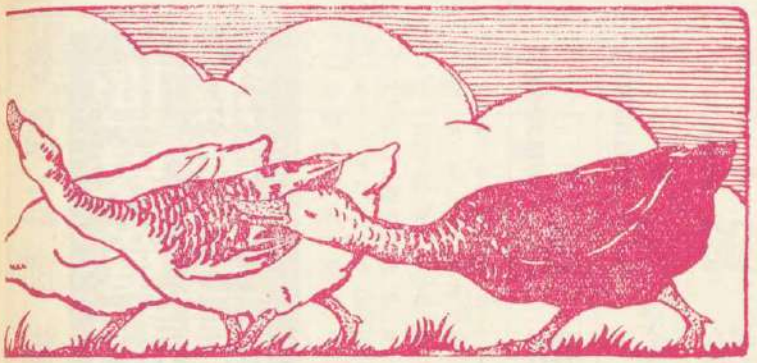
お禮の行列
スリヤ・バイ
詐欺の三十一番目
大欲無欲
次郎珠王子
七寶の雨
海の女王
五つの誡
象の足跡
星姫物語
片輪の切石
銀色の蛇

世界童話叢書 第一編 支那童話集（再版）定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢

世界童話叢書 第三編 ろしあ童話集（六月十五日發賣）定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢

世界童話叢書 第四編 獨逸童話集（近刊）定價金壹圓五拾錢 送料拾貳錢

東京市外巣鴨二八 金蘭社 振替口座東京七一六七 電話淺草六六四七一〇番



目次

夏（表紙・原色版）……寺内萬治郎
波静か（口繪・三色版）……岡本歸一
暴風雨の夜（口繪・一色版）……寺内萬治郎
一本橋……野口雨情
同作曲……本居長世
弟子入り……沖野岩三郎
獅子王……大木雄三
二人兄弟……中島孤島
蚊帳……野口雨情選
朱鼻……澁澤青花
麦の葉のかげ……海達公子
小鳥は空に……加藤武雄
ギリシヤ神話物語オデッセー物語……藤川篤夫譯 寺内萬次郎畫
お月さん……若山牧水選

少年繪師……霜田史光
八大地獄めぐり……西川勉
木兎になつた五兵衛……長谷川好延
ワーシヤの出世……水野光一
西瓜の間違ひ……久米舷一
夕焼とんぼ……野口雨情選
名鳥奇譚『嘆きの薔薇』……三井信衛
化けぎつね……檀上春之助
蟬……若山牧水選
『懸賞募集』各地に傳へられる歴史童話……
僕……山本鼎選
顔（白山詞）……齋藤佐次郎選
お風呂（線方）……
通信……
讀者だより……
出版だより……
（特別附錄）
『般若の面』……鈴木氏亨
挿畫……寺内萬次郎・水島爾保布・岡本歸一・石川寛

波靜か

（金の星發行）

岡木歸一畫

暴風雨の夜

（第八四頁の「ワーシャの出世」を御覧下さい）

寺内萬治郎畫

交蘭社發行書目

西條八十先生著 新らしい **詩の味ひ方** 苟も詩を讀み文學を語る者の机上に無くてはならぬ書である 金一圓六十錢 送料金十八錢

蕗谷虹兒先生著 虹兒畫譜 **睡蓮の夢** 天才獨歩の版畫家として我國に並ぶ者なき著者の第一版畫集 金一圓七十錢 送料金十八錢

野口雨情先生著 童謠 **作方問答** 新らしい童謠を作る人、又はゆる人の必讀書として生る 金一圓二十錢 送料金十五錢

生田春月先生著 小曲集 **春の序曲** 有名なる春月先生が特に若き人々の爲めに本書の上梓を得 金九十錢 送料金十三錢

下田椎直先生著 小曲詩集 **胸より胸に** 少女畫報の主筆として名聲ある著者の第一詩集の哀艶なる書 金一圓三十錢 送料金十五錢

水谷まさる先生著 少女 **詩の作り方** 初めて詩を作り小曲を書かむとする若き人々の爲めに生る 金八十錢 送料金十三錢

西條八十先生著 小曲詩集 **靜かなる眉** 悲々想痕永遠に盡きざる優情典雅なる先生の處女小曲集 金九十錢 送料金十三錢

水谷まさる先生著 小曲詩集 **寶石の夢** 純情無垢なる乙女の眞情を著者が獨特の麗筆にて歌へるもの 金九十錢 送料金十三錢

蕗谷虹兒先生著 虹兒畫譜 **悲しき微笑** 本書は一葉を描くに二日を費したるもの美にして聖なる權化 金一圓九十錢 送料金十八錢

吉屋信子先生著 第一第二 **花物語** 女學生の讀まねば恥と迄評されつゝ有る天下唯一女性文學書 各一圓三十錢 送料金十五錢

竹久夢二先生著 詩畫集 **青い小徑** 小曲數十篇と挿畫三十餘枚を加えたる美しく又愛らしき書 金九十錢 送料金十五錢

蕗谷虹兒先生著 **私の畫集** 百餘點の抒情版畫を選收して一卷となしたる最も美しき書 金一圓二十錢 送料金十三錢

加藤長江先生鑑修 **音樂常識辭典** 萬人の音樂會必携右書 金一圓三十錢 送料金十三錢

西條八十先生編著 現代抒情 **小曲選集** 各新聞雜誌に特選入賞せる名作のみを三百嚴選せる模範書 金一圓三十錢 送料金十五錢

渡邊增三氏著 童謠集 **絲ぐるま** 純情純愛なる若き天才として先輩を凌ぐ擧れ高き書 金一圓三十錢 送料金十五錢

東京市神田區南神保町十六
振替口座東京四〇二七九番

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金十二錢

金の星社の名著大系は少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最も面白く、又最も解りやすく、しかも、クロース製本箱入りの非常に立派な本を、他に例のない安い定價で發賣するので、熱烈な歡迎を受け、增版又增版の有樣です。皆さまの愛讀書として是非お揃へ下さい。

第一編 ロビンソン漂流記

船乘りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程深い讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編 ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤの有名なお話。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ痩馬に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂におはれた死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戰つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金十二錢

第五編 大人國小人國めぐり ガリバァー旅行記

ガリバァーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやり、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさんざんな目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

第六編 ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが惡い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戰を起したり、惡い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかゞわかります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤの詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戰爭に遍々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編 シェークスピヤ物語

有名なシェークスピヤの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御寵のまゝ』『ヴェニスの商人』『がみ〳〵女訓し』『真夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入美本・定價各冊金九十錢送料金十二錢

第十編 グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳說研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかしグリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、少年少女の珍寶として樂しまれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリムの數多くの作の內、最も有名な面白いものばかりである。童話のガ好者及研究家の御一讀を待つ。

第十一編 繪入 イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていたゞきたい。

第十二編 日本神話 古事記物語

「古事記物語」ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實驚驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出來た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

第十三編 子供キリスト傳 新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

第十四編 西遊記

支那から印度へ、はるゝゝお經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がつひて行き、途中で樣々の魔物に出遇ふ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作。この本を讀まない者は不幸である。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入美本・定價各冊金九十錢・送料金十二錢

第十五編 ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心に、ローマ歷史を書いたものですから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロミユラスとレマスの不思議な物語りから、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戰の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語りです。

第十六編 こども舊約聖書物語

「バイブル物語」とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む程有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にあつた『神樣と人間』との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことがわかつて面白味が深いでせう。

第十七編 奴隷トム

自人種のために犬猫同樣にあつかはれてゐた奴隷の涙の物語りです。偉人リンコルンが現れるまで、米國のあはれな奴隷たちの生活を書いたものですから、最初の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。博大、崇高な氣持ちが、この本によつてどんなに發ぼれることでせう。

第十八編 ギリシヤ英雄物語

近刊

第十九編 アンデルセン童話

近刊

世界少年少女名著大系(16) 金の星社編・裝幀 寺内萬治郎畫伯

こども舊約聖書物語

四六判箱入美本
本文一八〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九十錢
送料十二錢

最新刊

本書は、『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女は、誰でも幼いうちから母親に幾度となく話され、又大きくなつて文字の讀めるやうになつてからも、何十度となく繰返し〳〵讀む程に、興味の深い物語りであります。丁度日本の『古事記物語』のやうなお話で、ユダヤの國の古い〳〵お話です。古いお話だけにそれは〳〵面白いのです。信仰深いアブラハム。イサクの嫁えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷。など、神樣と人間とのいろ〳〵の不可思議な出來事を書いたものです。日本の少年少女が、お讀みになつたら、又一層の面白味があることでせう。是非御一讀下さい。

東京本郷動坂町三五九
金の星社
振替東京五九五九六番

世界少年少女名著大系(27) 金の星社編 裝幀・寺内萬治郎畫伯

奴隷トム物語

四六判箱入美本
本文二〇〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九十錢
送料十二錢

最新刊

『奴隷トム物語』を讀んで、清い涙を流さない人があれば、その人は魂のない人です。涙の物語として、世界的名作に擧げられてゐる『奴隷トム物語』は、どういふ譯か日本には、少年少女の讀物としてまだ紹介されてゐませんでした。これ程の立派な物語がどうして紹介されなかつたかと、不思議に思はれる位です。此の物語は、米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたもので、牛馬のやうに賣買された奴隷達が、どんな悲しい生活をしてゐたか、その悲慘な物語りです。

主人公トムは深く神を信じ、如何なる苦しい生活の中でもよく堪え忍んで行きます。トムのけなげな精神は、讀者を泣かせずに惜かないでせう。偉人リンコルンによつて行はれた奴隷廢止運動には、ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人の作になる此の『奴隷トム物語』が最も役立つたといふ事は、この本を讀む上に是非記憶して頂きたい。

東京市本郷區動坂町三五九
金の星社
振替東京五九五九六番

八版發賣

沖野岩三郎先生作 ■ 岡本歸一先生裝幀及挿畫

父戀し

父様の
船は歸らず
今日もまた
濱邊に出たが
何としよう
風和いで
たゞ恨めしい
海の色よ
何故答へない
この聲に
（一讀者寄稿）

沖野岩三郎先生の一大傑作『父戀し』は大震災に原版を焼失し、久しく品切れになつてをりましたが、皆様の熱望止み難く、日々大多數のお申込みがありますので、此處に第八版を發賣する事となりました。長い間熱望されて未だお手に入らなかつた方は、この際大至急にお申込み下さい。部數に限りがありますから、近日中に又も品切れになる恐れがあります。

四六判箱入美本
本文二四〇頁
定價金壹圓
送料十二錢

《本篇の梗概》

紀州の濱邊に伊吹子と明治といふ姉と弟がありました。二人のお父様は漁師でしたが、或日、新しい船を造つて海へ出たまゝ家へ歸つて來ませんでした。後に殘された母と子はどんなに悲しんだ事でせう。併し、近所には親切な漁師達がゐました。その人達と共に、姉弟は雄々しくもあらゆる困難と戰つて、父の行方を尋ねます。そして最後に、滿洲まで行つて父にめぐり合ふといふ、涙と祈りの一大長篇であります。

金の星社

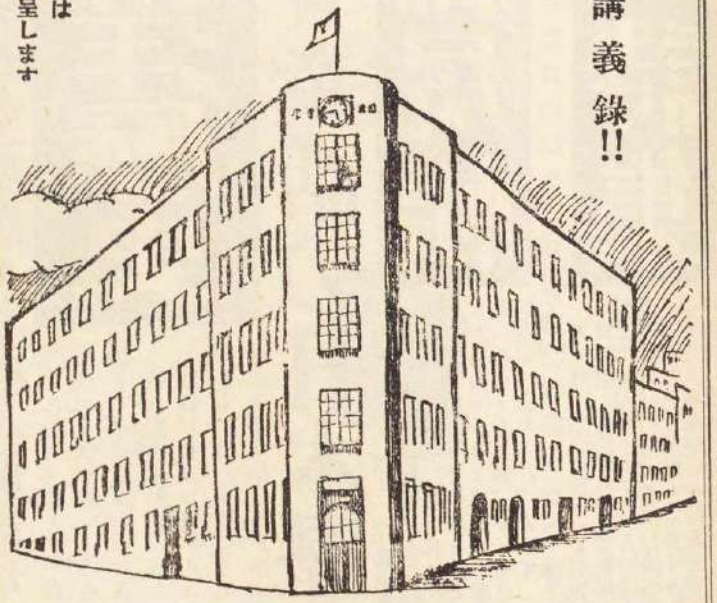
東京市日本橋区三越前一五
電話 小石川五三九八
振替 東京五五三七番

世界一の中學講義錄!!

創立は一番古く内容は一番新しい
大日本國民中學會
會費がヤスク卒業が早い

會員大募集

諸綴錄見本つき規則書は
申込み次第無代で進呈します



東京神田駿河臺
大日本國民中學會
電話大手 五五七七・七〇一〇番 振替東京 四二〇〇番

金の星

七月號

（通卷第六拾八號）

日本童話學院著

童話の西洋歷史

□四六判四百卅頁布裝函入色刷挿繪廿一葉總かな付□

金貳圓五拾錢 送料金拾八錢（最新刊）

世界の始まりと人間が最初に出來た話から筆を起して最近の世界戰爭までを高尚な面白い童話に碎いて書き綴りました、而して一つのお話毎に立派な畫が入れてありますから、面白く讀むうちに西洋歷史の大要を知る事が出來ます。

近刊本書の姉妹編

童話の日本歷史

—（四六判・二百數十頁）金壹圓貳拾錢・稅六錢）—

報知新聞で有名になつたノンキナトウサンが所々方々で失敗を演じた奇拔なる滑稽振りを書き綴つて一冊の美しい本に纏めました其一字一句は悉く噴飯的文字に滿たされてゐます。

◀新刊發賣▶

ノンキナトウサン縮尻帳

現代愛の詩集

東京詩談會著

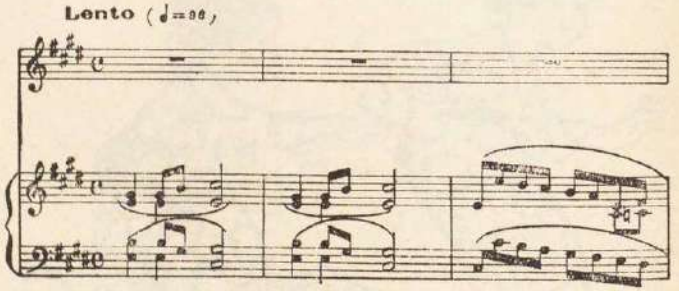
—（四百數十頁・紺裝天金 貳圓八拾錢・稅拾八錢）—

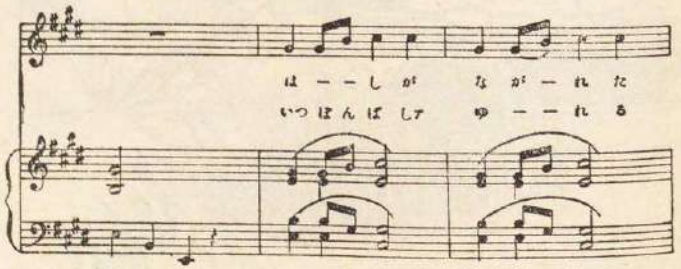
現代の詩人數十名家が人間愛としての至情を歌ひしもの爽かな綠蔭の木かげに珠玉の如き詩編を愛誦するとき豊潤なる詩人の感情は交響樂を奏でて讀者の心琴に觸れしむべし。

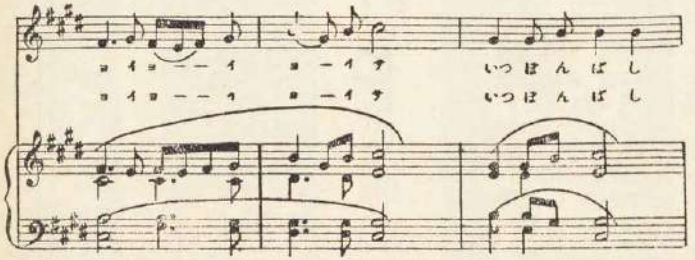
發兌 東京市本郷區三組八拾番 中央出版社 振替東京一二五一 電話淺草七七〇八六番

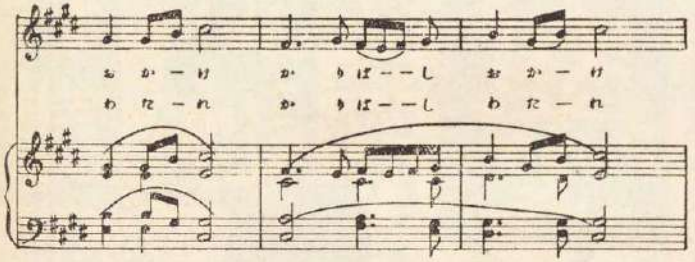
一　本　橋

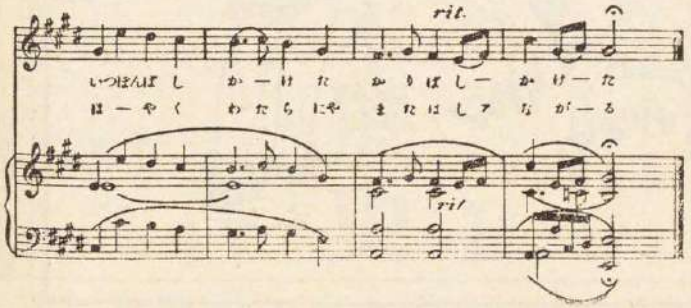
作曲　本居長世
作謠　野口雨情







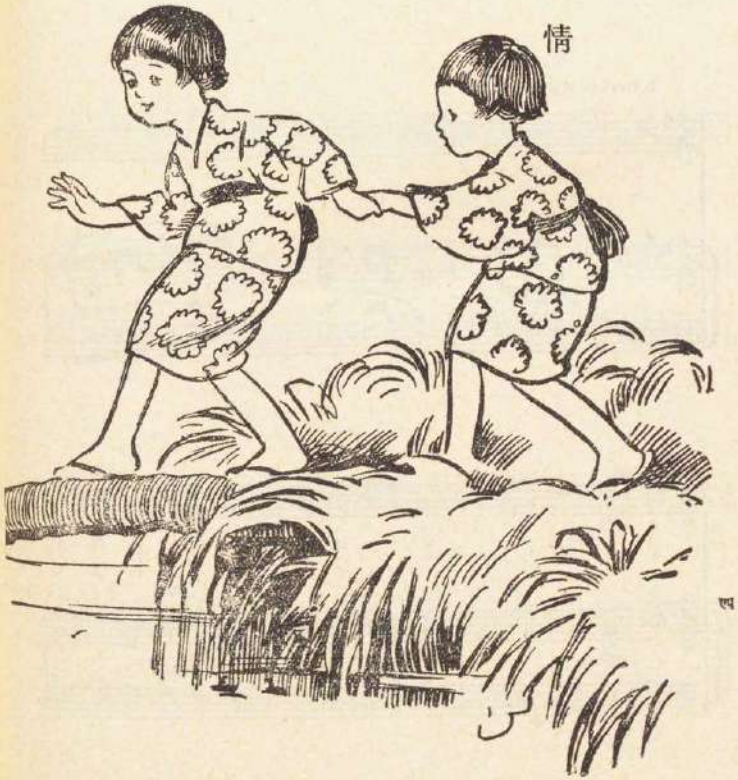




一本橋（遊技唄）

野口雨情

橋が流れた
ヨイ〳〵ヨイサ
一本橋　おかけ
假橋おかけ
一本橋　かけた



假橋かけた
一本橋アゆれる
ヨイ〳〵ヨイサ
一本橋　渡れ
假橋渡れ
早く渡らにや
また橋ア流る

弟子入り

沖野岩三郎

野も山も、もうすつかり翠の衣を着てしまひました。峯の方から一陣の風が音を立てゝ吹きおろしますと、滴るやうな青葉若葉が、一齊にざわ〳〵と裏葉を見せて飜ります。紅い花や白い花が、ほろ〳〵と風に吹かれて、山裾を流れてゐる日高川の早瀬に散ります。

茶畑に新芽を摘んでゐた白い手拭の姉さん達が、聲はりあげて歌ふ歌の聲が、向ふの谷間に響くと、その高い調子だけ山彦が眞似をします。何所かでカン、カン、カンと乾き切つた板をたゝいてゐます。そして、『おひるですよう……』と呼ぶ聲が聞えて來ます。

風が吹き止むと、若葉の山は太古のやうに靜まります。濃い綠の中に紅い花は一段と紅く、白い花は一層白く見えます。鶯の谷渡りが、ちよつぴ、ちよつぴと聞えて來ます。

『あゝ(こッとい駈けたか)が鳴いた。』

鶯の鳴聲を聞いてゐた數也は、空を見上げながら言ひました。

『うん、ほとゝぎすだなァ。』とお父さんの右内は申しました。

『信州の人はあの鳴聲を、(弟戀しや)ッて聞くんださうですネ。』 數也はお父さんの顏を見ながら言ひました。

『さうだ、九州の球磨川べりの人は、(ちよげさの小法師)ときくさうだ。』

ほとゝぎすは、又た續けさまに五聲六聲鳴きました。數也は小い聲で、

『こつとい駈けたか。』『弟戀しや』『ちよげさの小法師』と三いろに言ひわけてみましたが、みんな、ほとゝぎすの方が、自分の口眞似をするやうに思はれました。

『數也、何と、あのつゝじは、うつくしいぢやないか。』

お父さまの右内は、川向ふの方を指ざしながら言ひました。

『ねエ、本當に美しい。』といつた數也は、岩の上に足を投げ出して川向ふを見ました。そこには屏風のやうに切ッ立つた岩壁があつて、其の岩には小さいつゝじが、何十株となく岩にしがみつくやうにして生えてゐます。眞紅な花が水に映つて、深い淵の底まで燃えてゐるやうです。

『あ、あれは何です？』

數也は上半身を前方に屈めながら、耳を傾けました。

『あれか、あれはネ、河鹿だよ。』

右内は岩の端の方へ歩み出して、淵の方をのぞき込みました。數也も腹這ひになつて、頭だけ岩の端から突き出して、水の中を見ました。二人の居る岩は疊の十疊も敷けさうな平たい大きな岩です。大水が出るたびに洗はれるので、岩には苔一つ生えてゐ

ません。磨いたやうに眞白です。

『あしこに居る、あの小さい眞黑い蛙が河鹿だよ。』

右内は太い人さし指で、水の中に居る河鹿を指ざしました。

『あ、居る！　コアユ、コアユ……つて鳴くんだネ。』

『さうだ、あれはネ、コアユ、カワイ、小鮎可愛ッて鳴くんだよ。』

『河鹿と小鮎とは、そんなに仲がいゝのか知ら？』

『仲がいゝんだとも。去年の秋、この日高川の川口で生れた小鮎が、今年の春、もう十分泳げるやうになつてから、一生懸命に此の川を上つて來るんだ。日高川には四十八瀧ある。其うちに五つの大瀧がある。大瀧のうちでも、佐井の鳴瀧、串本の大瀧、山路の檜皮は大變な難所なんだ。』

『そんな瀧を小い小鮎が上つて來るんですか。』

『さうだとも。川口には何億萬といふ小鮎が、吾こそ第一にその難所を越えてやらうと意氣込んでゐるんだ。そして時が來ると群になつて押上つて來る。けれども皆なが、まだ小いもんだから、大きな魚に食はれたり、漁師の細かい〳〵網にかゝつて捕られたりする。けれども小鮎達は勇氣を出してずん〳〵と急流をさかのぼつて來るんだ。小鮎だちが一番最初に驚かされるのは、船津の瀧といふんだ。そこは餘程熟練な筏師でなければ、筏を乘下す事の出來ない瀧だ。筏がすつかり眞白い波の中に埋れてしまつて、筏師の身體が水の中に浸つてしまふ。けれども、がつしり楫棒に縋りついてゐるんだ。だから小い小鮎だちは、此の瀧を上りきるには、どれだけ難儀するか知れない。瀧の底の石の蔭に身體をひそめてゐては、勢よく少しづゝ水上へ上る。けれどもうつかりすると、一尺上つたと思ふと百尺も押流される。しかし辛抱强い小鮎達は倦まず撓まず唯一心に上らうとばかりする。十日十五日かゝつて、やつと其の瀧津瀨一つを上りきつた時、小鮎の身體は五六分大きくなつてゐる。瀧を上りきる時、小鮎達はみんな元氣よくひらり〳〵と波の上まで飛び上るんだ。其時瀧の上流にゐる河鹿は、聲を揃へてコアユ、コアユ、コアユ……と囃し立てる。小鮎たちは河鹿の應援に元氣を得て、又た次の瀧を上る。瀧を上れば又た其所にゐる河鹿が囃し立てる。さうして四十七瀧上つて、最後の四十八瀧目の檜皮の瀧まで來た時は海と川との境の川口を出立した頃、まだ一寸足らずだつた小鮎が、もう三寸から四寸位になつてゐる。子供で言ふなら檜皮の瀧の上りは尋常六年の卒業試驗だ。』

右内はさう言つて、少し首を伸して淵の底をのぞきました。薄黑い底岩の所で、ちら〳〵と白い光りが見えます。

『小鮎だよ、あの白く光るのは。』

『一つしか店ないネ。小鮎は。』

『多分あの小鮎が先登第一かも知れないよ。河鹿の鳴聲があんまり嬉しさうだ。』

『河鹿はやつぱりコアユ、カワイ……つて鳴くんでせう？』

『もつと込み入つた話をしてゐるやうではないか。』

『さうだネ、（河鹿さんどうも有難う）つて言つてゐるよ、あの小鮎が。』

『うん、河鹿が何と言ふか、よく聞いてみろ。』

右内は眼を閉ぢて河鹿の鳴聲に耳を傾けました。數也も眼を閉ぢたまゝ岩の上に寢そべつてゐました。水の底から小鮎の會話が聞えて來ます。

『河鹿さん、本當に有難う。僕はもう最後の瀧でへたばりさうでしたよ。だけど、あなたの呼ぶ聲を聞いて、もう一息だと思つて頑張つたのです。』

『よかつたワネ。だから、あなたが一番よ！』

『さうだ、僕が一番だ。弱い連中は、まだ最初の瀧でまごついてゐるでせう。折角佐井の鳴瀧まで來てそこで休んでゐる連中もあるやうだ。』

『あたし一週間も前から、こゝで小鮎さん小鮎さんて呼んで居たのよ。』

『僕ネ、海を出立する時、檜皮の瀧が大變だと聞いてゐたが、何所でも此所でも河鹿さんに囃し立てられたので、勇氣を出して、たうとう第一番にこゝまで來ましたよ。』

『お目出たう。川口を立つてから、今日まで何日？』

『丁度三月です、九十日です。川口を出立した時、僕はまだ一寸足らずだつたのです。』

『まア、さうでしたか。大へん大きくなりましたのネ。』

『うん大きくなつた。これから秋までに、まだ此の三倍位大きくなつて海へ歸るんです。』

『海へ歸つて、それからどうするの？』

『さア、どうだかネ。多分死んぢやふんだらう？』

『まア！　そんなに骨を折つて、四十八瀧も上つて來て、直ぐ此の秋死んぢやつちや、詰らないぢやないの？』

『なアに詰らない事はないさ。僕はかうして精一杯働いてゐると、唯もう働く事が面白くつてたまらないんだ。死ぬの生きるのつて、そんな事を考へてゐるひまなんかありやしないよ。僕は來年の春、きつと五百にも千にも數多くなつて又たあなたに、お目にかゝりに來ますよ。』

『さう、そんなに澤山になつて？』

『うん、其時もネ。可愛がつてやつて下さいよ。』

『えエ〳〵可愛がつてあげますとも。』と言つた河鹿は一寸默つて考へてゐるらしかつたが、『だつて、あなたは死んぢまふんぢやないでせう？』と問ひました。

『死なないとも、此世の中にネ、死んでしまふものは一つも無いんだよ。死んだやうに見えても、それは生きてゐるんだよ。』

『さうネ。此淵にも鯰魚さんの卵が澤山々々ゐらしたワ。その卵は死んぢやつたやうだけど、卵の中から、小ちやい〳〵子供さんが出て來て、そこいらで面白さうに遊んでゐますワ。』

『死ぬんだか生きるんだか、僕にはわからないが、力一杯泳いで、瀧をずん〳〵上る時は本當に愉快だよ。』と小鮎が言つた時、淵の下の方の早瀬の所から

『おうい、河鹿さん、先登第一は誰だい？』と呼ぶ聲が聞えたと思ひました。

右内も數也も、春の暖い陽氣に、うつら〳〵と眠つてゐたのでした。

『おれは河鹿と小鮎が問答してゐる夢を見たよ。』

右内は眼をしよぼ〳〵させながら言ひました。

『僕も面白い會話をきゝました。』

『數也！　お前は筏師になるのは嫌だと云つてゐたんだが、やつぱり嫌かい？』

『いゝえ、筏師の弟子になります。小鮎でさへ、あアして四十八瀧を上つて來るんですもの。まして人間の私が、其の四十八瀧を筏で乘り下す位、何でもない事だと知りました。』

『さうか、それがわかつたか。ぢやア、俺は一つお祝ひの歌を歌はう。』

右内は岩の上に坐つて、男に似合はない程美しい聲で、節面皆く歌ひました。

河鹿なく〳〵
薄暗や川に
小鮎可愛と鳴かしやんす
小鮎行く〳〵
うすぐりや川に
河鹿の小唄がきゝたさに

歌ひ終つた時、右内はうれしさうに、

『數也、わしは童謠を知らないから、こんな昔の歌を歌つたのだよ。免しておくれ。』と言つて笑ひました。

川の底では河鹿がコアユ、カワイ、コアユ、カワイと鳴いてゐます。小い鮎がたつた今まで一つであつたのが、いつの間にか九つにも十にもなつて、きら〳〵と白い鱗を閃めかしながら泳いでゐます。

風が吹いて來たか、山の方から白い花びらが、ひら〳〵と散つて來ます。水面に浮いた花びらを、大きな鯰魚が、ごぶり！　と口をあけて吸ひ込みました。その波紋が輪になつて淵一ぱいに廣がつて行つた時、どこかで雉子が一聲鳴きました。そしてホロホロと羽をふるふ音が聞えました。

『さア、數也。明日から筏師の弟子だぞ！』

右内は元氣な聲で言ひました。（をはり）

獅子王

（アレキサンダー大王）

大木雄三

（一）

『あゝ、お父様はどうして戰爭にお勝ちになつてばかりいらつしやるのだらう。これでは、私が大きくなつてから、攻め取る國がなゝなりはしないだらうか。たくさん殘しておいて下さればいゝのに……。』

成人してから獅子王といはれたアレキサンダーがかう言つたのは、まだ十四の時だつたといふことです。

それは父フイリップ王が、頻りに隣國を攻め取つてゐる時分、戰地からきた使ひが、味方の大勝利を報告した時のことでした。

これをきいた人たちは、

『何といふ元氣のよいことを仰言る王子様だらう。この方はきつと偉い王様になられて、このマケドニアの國をさかんになさるに違ひない。』

と、言ひ合つたのでした。

アレキサンダーの好きなのは、第一番に馬に乘ることでした。よい大將になるには、馬が上手でなければ駄目だと思つて、毎日一生懸命に練習してゐました。けれども決して學問も嫌ひではなかつたのです。その頃有名なアリストートルといふ學者について、いろいろな學問を敎へて貰つてゐました。

ある日、學問がすんでアリストートル先生は歸つてまひました。アレキサンダーはほつとして、竪琴を出して彈きはじめました。

優しい音が、王宮の廊下に響きわたりました。ふと氣がつくと、どこかで大勢の人の話聲が聞えます。

『おや。賑やかだな。』

アレキサンダーは、竪琴をおいて、庭の方を眺めました。すると、一頭の馬を圍んで大勢の人達が何か話してゐるのです。それは王宮に詰めてゐる位の高い人や偉い軍人ばかりで、父王のフイリップ王の顏も見えました。

アレキサンダーはにつこり笑ひました。猿のやうに身輕に廊下から飛び下りて、大勢のところへまゐりました。

『お父様、その馬をお買ひになるのですか。』

アレキサンダーは言ひました。

『うむ、求めようかと思つたのだがね。』

フイリップ王はかう言つてから、ちよつと眉をしかめて、

『どうもひどい悍馬で、誰にも乘ることが出來ないで困つてゐるところだ。要らない物でも放り出すやうに、人を投げ出してしまうのだよ、あはゝゝゝ。』

と、苦笑するのでした。

『悍馬ですか。それは愉快です。私が乘つてみませう。』

アレキサンダーは、馬の側へ寄つて行きました。家來たちはびつくりして、

『王子樣、とんでもないことです。お危うございます。』

と、止めやうとしました。

『大丈夫だ。たかのしれた馬ではないか。默つてみてゐてごらん。』

さう言つて、ひらりと飛び乘つてしまひました。馬はいきなり、『ヒーン』と嘶いて、躍り上るやうに、二本の前脚を空高く持ち上げて突上ち上つたのでした。

『えいつ。』

鋭い掛聲。アレキサンダーは馬が脚を下すのといつしよに、氣合ひを掛けて横腹を強く蹴りつけました。馬は狂つたやうに走り出したのです。

誰も物を言ふ者がありません。心の中で、アレキサンダーの亂暴なのに驚いてしまつたからです。そして、落ちなければよいが、と思ひながら、だんだん遠く走つて行く後姿を眺めてをりました。

かつば かつば かつば……。

砂埃を立てゝ走り去つた馬は、まもなくまた砂埃を立てゝ戻つてきました。アレキサンダーは、蝗のやうにぴよんと飛び下りました。

『おとなしいよい馬です。お父樣。』

笑つて、馬の首を撫でながら言ひました。馬は水から出たばかりのやうに汗で濡れて、お腹に波をうたせてをりました。

獅子王子といはれたのは、この時がはじまりだつたのです。間もなく父フイリップ王が逝くなられて位をついでからは、獅子王と怖がられるやうになりました。

(二)

獅子王アレキサンダー！

マケドニアに近い國々は、その名をきいたばかりで恐ろしがるやうになりました。無理もなかつたのです。アレキサンダーの軍隊に押し寄せられては、どんな強い國も忽ち敗けてひどい目に會はされるのでした。

ところが、たゞ一人だけ、アレキサンダーの名をきいても怖がらない王がありました。それはペルシヤ王ダリアスです。

ダリアスはアレキサンダーの噂をきいても「ふむ」と鼻の先で笑ひました。敗けてたまるものか、いつでも戰爭をしかけて來い。といふ氣があつたのです。

方々の國が降參するのに、ペルシヤだけは知らん顏をしてゐます。勝氣なアレキサンダーは、すつかり怒つてしまひました。

『よし、ダリアスは戰はうといふのだな。それならば勝負をしよう。』

かう覺悟をきめました。

命令は下りました。アレキサンダーの軍隊は天にも昇る元氣です。一息で蹴散らしてやらうといふ勢ひで、ペルシヤの國に攻め寄せたのでした。

長い長い軍隊の列が續きました。兜は太陽の光をうけてキラ〳〵輝きました。進め進めと鳴る大鼓の音は、風に吹かれて遠いところまで、響き渡りました。

ピロナス河の岸まで來た時に、向ふから進んで來たペルシヤの軍隊と、河を隔てゝばつたりと出會ひました。

わあッ、わあッ。

兩軍はすばらしい鯨波の聲を擧げました。兵士たちは勇ましく劍を鳴らし楯を叩きました。軍馬は一齊に嘶きました。

アレキサンダーは全軍に命令を下しました。

——戰ひは明日だ、今晩はゆつくりと休むがよい。

そして二三人の部下を連れて、こつそりと敵の樣子を見るために、河岸まで出てまゐりました。ちやうど夕方だつたのです。明日の戰爭を思はせるやう

な血の色をした西陽は、河の面を紅染めてをりました。水はどうどうと逆巻いて流れます。何となく物凄い景色でした。

『陛下、敵軍が見えます。』

『うむ、あれも明日になれば木つ葉微塵だ。』

『しかし陛下。敵は六十萬の大軍だといふことでございますから……。』

『はゝゝゝゝ。油斷するなといふのか。』

アレキサンダーは氣持よげに笑つたのでした。そして、

『六十萬が何だ。たかゞペルシャのへろ〳〵兵士ぢやないか。私が怖れるほどのものではあるまい。』

と、言ひ放つたのでした。

『はつ。』

部下の者は頭を下げました。いつに變らない王の勇氣をおそろしいとさへ思つたのです。けれども、部下の者が頭を上げて、大王を見た時に、大王の顏は大へん苦しさうになつて、齒を食ひしばつてゐるやうすでした。

『陛下。陛下。』

部下の者はおどろいて、倒れかけた王の身體を支へました。王はもう口も訊けなくなつて、ぐつたり

と部下の者の手に抱かれました。

（三）

陣營にゐる軍醫は、王を診察してから、困つた顏で首を傾けて言ひました。

『陛下の御病氣は、とても私に藥をさし上げることは出來ません。』

『何故だ？』

部下の將軍たちが叱りつけました。

『お恥かしいことですが、私には御病氣がわからないのです。』

軍醫は言ひました。

獅子といはれるアレキサンダーも病氣には勝てなかつたのです。ひどい熱のために、眞赤な顏をしてたゞ唸るばかりでした。將軍たちの心配といつたらありません。誰でもよいから王の病氣を癒した者は重く取り立てると大勢に言ひ渡しました。すると一人の老人が、

『私に王を診させて下さい。自分の命に換へても、御全快おさせ申します。』

と、言ひ出しました。それは、フイリッポといつて、若い時に醫者をしたといふ者だつたのです。

『よろしい、ではお藥をさし上げてくれ。』
『かしこまりました。』
フイリッポスは藥を調合しました。部下の者は銀のコップに入れて恭々しく王に捧げたのです。
いま王がそのコップを唇に觸れようとした時！
『陛下、お待ち下さい。』
あはてゝ走つて來た一人の部下が言ひました。
『陛下、バルメニオン將軍の仰言るには、この男を御信用になつてはいけないとのことです。こゝにお手紙もございます。』
王は默つたまゝで、その手紙に目を通しました。が、たちまちビリッと破いてしまひました。につこり笑つた王は、すつと、コップを取つて、ぐいと一息に呑んでしまひました。
『あつ。』
と、家來たちは思はず叫びました。そして、どやどや立ち上つて、びつくりしてゐるフイリッポスの周圍を取り卷いてしまひました。劍に手をかけた者もあります。
『お前たちは何をするのだ。』
低いけれども、力のある王の聲でした。
『陛下、これは信用のできない奴です。』
『いや、持てッ。フイリッポスは私の命を助けに來てくれたのだ。ほかの醫者にわからない病氣だといふではないか。私はこの男を信用するより道がないのだ。この藥が毒でもしかたがない。もし助かることができたら命の恩人だぞ。よくわかるまで大切にせい。』
王はかう言つたのでした。
フイリッポスの目から、熱い涙がぽろぽろ流れました。
『私に惡い心のないことは、ぢきにわかります。お情け深ひ大王樣、あなたのお爲ならば、いつ命を召されても喜んでさし上げます。』

フイリッポスは言ひました。側にゐた者は、誰もみんな、この老人の言葉に贊成しました。そして、心のうちで言つたのです。
——さうだとも、私だつて……と。

（四）

病氣は間もなく、すつかり癒りました。さうなると獅子王は獅子王らしくなつて、もうぢつとしてゐることはできません。前よりも、いつさうの元氣で駿馬に跨がるアレキサンダーの勇ましい姿が、マケドニア軍の中央に現はれたのでした。
河風は、この英雄の髮をさつと吹き散らしました。
進め進め！
太鼓は空に響いて鳴り渡りました。
ペルシャ軍の方でも負けてはをりません。
激しい戰ひが起りました。が、たうとう、またアレキサンダーの勝になつたのです。ペルシャ王ダリアスは旗を卷いて、逃げてしまつたのでした。けれどダリアスも立派な王です。その儘引込んでゐるような卑怯なことはしません。新しい強い兵を大勢集めた、ペルシャ軍はその年の九月はじめ、秋の星の美しい下で、最後の決戰を開くために、勢を盛り返してきたのでした。
この知らせをきいたアレキサンダーは愉快さうに
『よし、こんどこそ、ペルシャを二度と立ち上れないまで打つてやらう。』
と、胸を叩いて言ひました。
再び戰爭がはじまりました。暑い頃ですから、兩軍の兵士は、ずゐぶん苦しい目に會ひましたが、水のないのにはどちらも閉口してしまひました。
水を水を、と兵士たちは言ひつゞけます。その時一人の兵士が、水晶のやうに、澄んだ水を兜にいつぱい汲んできて、アレキサンダーに捧げました。アレキサンダーは、その兵士の親切を喜んで飲まうと

しましたが、何を思つたのか、ザブリとみんな棄てしまつたのでした。

部下の者はびつくりして、

『陛下、せつかくの水を……』

と、惜しさうな目で、土に泌みた水を眺めました。

『さうだ、せつかくの水だ。けれども考へてみるがいゝ。水を飲みたいのは私ばかりではあるまい。みんな咽喉が渇いてゐるのだ。私ばかりが飲んでは兵士たちにすまない、不自由するならみんなで不自由しよう。』

アレキサンダーはかう答へました。何といふ情深い王だらう。兵士たちはみんな感激しました。力の限り根限り、兵士たちは命を忘れて戦ひましたからこんどの戦争も、アレキサンダーの勝ちになつたのです。

夕方でした。アレキサンダーは部下を引きつれて、戦場の跡をめぐつて歩いてをりました。そこにもこゝにも、轉つてゐる兵士たちは、みんな息がとまつてゐる者ばかりです。中には息はあるのだけれど、手も動かせない負傷者などもあるのでした。

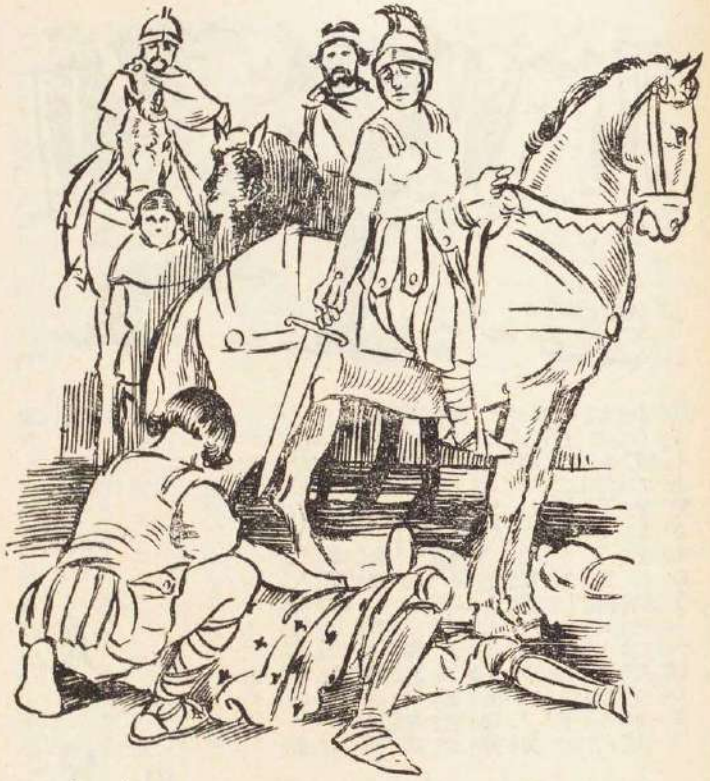
一人の立派な大將が倒れてゐました。よく見ればペルシャ王ダリアスです。

『み、水を、水を。』

ダリアスは、僅か目を開いて、微風のやうに小さい聲で言ひます。一人の部下は、手で水を掬つてきて飲ませました。

『有難う、親切な兵士君。私はもう君にお禮をすることはできないけれど、君の王アレキサンダーが賞を與へてくれるだらう、有難う！』

ダリアスはさう言つて死んでしまひました。アレキサンダーも悲しげに、目ばたきをして言ふのでした。



『ダリアス、たうとうあなたは死んだか。私はあなたをずゐぶん苦しめた。けれどもお互ひに運命だと思つて下さい。』

アレキサンダーは、自分の上衣を脱いで、ダリアスの屍の上にのせたのでした。部下の者も、靜かにダリアスの魂を祈るやうな心になりました。

『運命だ。運命だ。』

かう呟くアレキサンダーの目にも、いつか涙が溜つてをりました。

――獅子王といはれた人にも、優しい人情はあつたのです。

（をはり）

二人兄弟

中島孤島

（一）

むかし〳〵二人の兄弟がありました。ひとりは金持で、ひとりは貧乏でした。金持の方は鍛冶屋で腹のわるい男でした。貧乏の方は籌をこしらへてその日〳〵を送つてゐましたが、まことに正直な善い人間でした。貧乏な男には、男の子が二人ありました。この子どもはふた子で、二滴の水のやうによく似てをりました。二人の子供はよく小父さんのうちへ行つて、小父さんの食べあましを拾つて食べました。

ある日、貧乏な男が薪木をとりに林へ行くと、いままで見たこともない、きれいな金の鳥が飛び出したので、石をひろつて投げつけると、うまく鳥にあたりましたが、鳥は金の羽を一枚おとして飛んで行つてしまひました。男はそれをひろつて兄のところへ持つて行くと、兄はそれを見て『これはほんとうの金だ！』といつて、お金をどつさりくれました。

翌日、男はまた林へ行つて、枝を伐らうと思つて樺の木へ登つて行くと、枝の中から昨日の鳥が飛び出したので、その邊を見まはすと、鳥の巣があつて、その中には金の卵が一つはひつてゐるのが見えました。男はその卵をとつて、前のやうに兄のところへ持つて行くと、兄はそれを見て『これはほんとうの金だ！』といつて、それだけのお金をくれて、その後で、かういひました。『今度はその鳥を持つて來なさい。』

そこで貧乏な男は三度目に林へ行くと、金の鳥は今日も木の枝にとまつてゐたので、石をひろつて投げつけると、鳥が落ちて來たので、すぐに兄のところへ持つて行きました。すると兄は金貨を一つかみくれたので、貧乏な男は『さア、これでどうかかうか、暮して行けるぞ。』といひながら喜んで、うちへかへりました。

けれども鍛冶屋は惡智慧にたけた男で、この鳥がどういふ鳥だといふことをよく知つてゐたので、すぐにおかみさんを呼んで、かういひつけました。『この鳥を燒いておくれ。だがよく氣をつけて、一かけでも落さないやうにしろよ。おれが自分でみんな食はなけりやアいけないんだから。これはなみの鳥とはちがふんだ。この鳥の心臟と肝臟を食べた者は、朝起きて見ると、いつでも、枕の下に、金貨が一つ宛おいてあるといふ不思議な代物なんだから。』

おかみさんは鳥の毛をむしると串へとほして、火の上へのせました。けれども炙つてゐる間に、ほかの用事が出來たので、おかみさんは臺所を出て行きました。する

と、そのあとへあの貧乏な箒造りの子供がはひつて來て、串の兩方をもつて、面白半分に、二三度ひつくらかへしました。すると二つの小さな肉のかけらが、燒鍋の上へ落ちたので、一人の子供がういひました。『こんな小さな、かけらを食べたつて、誰れにも分りやしまい。お腹がへつてるから、二人で食べようよ。』そして大急ぎで二人して食べてしまひました。

そこへおかみさんが、かへつて來て、二人がなにか食べてゐるのを見つけて、かうたづねました。『お前たちはなにを食てるの？』『烏の中からちつぽけな、かけらが二つおつこつたから、それを食べたんです。』と子供が答へました

すると、おかみさんが、びつくりしたやうな聲を出してかう言ひました。『それぢやア、お前たちは心臟と肝臟をたべちやつたんだね』

そしてこれが夫に知れたら大變だと思つたので、大急ぎで雛鷄を殺して、その心臟と肝臟をとつて金の烏へくつつけておきました。そして料理が出來ると、すぐに鍛冶屋のところへ持つて行つたので鍛冶屋は自分ひとりで平げて、皿の上へはかけらも殘しませんでした。けれども翌朝になつて、枕の下をさぐつて見ても、あてにした金貨は影も見えませんでした。

二人の子供はいゝ運が自分たちの頭の上へ落ちかゝつてゐることなぞは夢にも知らずにゐたのですが、翌朝起きるときに、なにかチリンといつて、土間へ落ちたものがあるので、屈んで拾ひあげて見ると、それは二枚の金貨でした。二人がそれをお父さんのところへ持つて行くと、お父さんは大變びつくりして、どこから出たのかと不思議に思ひましたが、その次の朝もやつぱりさうだつたので、いよ〳〵不思議でたまりませんでした。それからは毎日、毎日、同じことが續くので、とうとうしまひに箒屋は兄さんのところへ行つてその話をしました。

鍛冶屋はすぐに子供たちが自分の烏の心臟と肝臟を食つたのだと悟つたので、その仕返しをするつもりで、元來ひがみの強い、無慈

悲な男でしたから、子供の父親に向つてかういひました。『あの二人は惡魔の仲間へ引込まれたに違ひない。そんな金に手をつけたら大變だぞ。子供たちも早くたゝき出してしまふがよい。家へおけばなにをするか分らないから。』

貧乏な弟は惡魔が怖ろしいばかりに、かはいさうだとは思ひながらも、子供を林へ連れて行つて、泣く泣く棄てゝ來ました。

（二）

棄てられた子供たちは、林の中を駈けまはつて、家へかへる道を搜して歩きましたが、どうしても道が分らないで、だん〳〵奥の方へ迷ひこんで行きました。そのうちにひとりの獵夫にあつて、誰れの子だときかれたので、二人はかう答へました。『僕らは貧乏な箒屋の子どもなんです。』そして毎朝起きて見ると、枕の下に金貨がころがつてゐるので、お父さんがもう家へおくわけに行かないといつてこゝへ棄てられたといふ話をしました。それをきくと獵夫はかういひました。『うむ、それはどうしてうまい仕事ぢやないか。いつまでもそれが續いて、そしてお前たちが、なまけさへしなかつたら。』

さいはひ、この獵夫には自分の子がなかつたので、『ぢやア、けふからおれの子にして育てゝやらう。』といつて、二人を自分の家へ連れて行きました。

兄弟はこの獵夫から獵をすることを教へこまれました。そして毎朝枕の下にころがつてゐる金貨は兄弟が生長して、金の入用な時に

いつでもつかへるやうに、積んでおいてくれました。

二人が立派な若者になつた時に養父はある日、兄弟に向つてかういひました。『今日は一つお前たちの腕をためして見よう。もう一本立の獵夫になれるかどうか。』そこで兄弟は、おとうさんと一しよに獵場へ行つて、永い間待つてゐましたが、生憎、一疋の野獸も出て來ませんでした。獵夫は方々を見まはしてゐるうちに、眞白な鵞鳥の群が、三角形にならんで飛んで來るのが見えたので、兄弟のうちのひとりに向つて、かういひました。『角にゐるのを、どれでも一つ射つてごらん。』子供はいはれたとほりにして、まんまと試驗に及第しました。すると間もなく、また一群の鵞鳥が二といふ數字の形になつて飛んで來るのを見て、獵夫はまたほかの子に向つて、あの角にゐる奴を、どれでも一つ、射つて見ろといひました。今度もまた首尾よく及第したので、養父は兄弟に向つてかういひました。『これでもう、おれの手をはなれてもいい、二人とも立派な腕が出來たのだから。』

そこで兄弟は二人で林の奥へ行つて、いろ〳〵と相談しました。そして夕方食事のときに、二人は養父に向つて、かういひ出しました。『おとうさんがわたくしどもの願ひをきいて下さるまでは、なんにものどへはとほりません。』

『なんだい、その願ひといふのは？』と養父が尋ねました。

『一通りのことはもうすつかり敎へていたゞきましたから、この上は少し出かけて行つて、世の中を見て來たいと思ひます。おとうさんどうぞ行かせて下さい。』と子供たちが答へました。

『うむ〳〵それでこそ立派な獵夫だ。』と老人は大喜びで、いひました。『お前たちの望みは、わしの思つてるとほりだ。いつでも出かけるがいゝ。お前たちにはいゝ運がついてゐるに違ひない。』

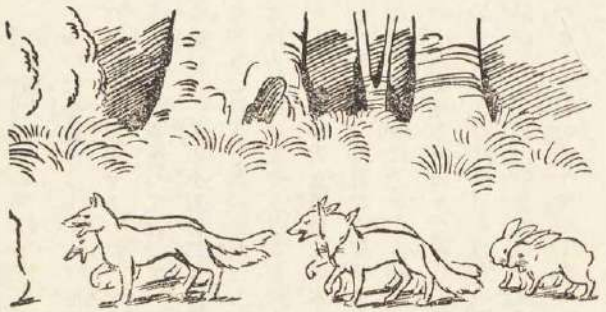
それから三人は、いつしよに飲んだり、食べたりして、上機嫌で食事をすませました。いよ〳〵出立の日が來ると、老人の獵夫は、

二人の若者に、めい〳〵一挺の銃と一匹の獵犬をやり、その上、ためておいた金貨のうちから、持てるだけ持つて行かせました。それから途中まで見送つて行つて、別れる時に、一本の小刀を二人に渡してかういひました。『お前たちがはなれ〴〵になるやうなことがあつたら、この小刀を道ばたの木へさしておいて、お互ひの安否を知りたいと思ふ時に、そこへ行つてこの小刀を見るがいゝ。若しどちらかゞ死んでゐれば、その方の側が錆びてゐるが、生きてゐる間はいつまでもぴか〳〵光つてゐるから。』

（三）

二人の兄弟はずん〳〵歩いて行くうちに、一つの大きな林へ來ました。その林は長くつて、長くつて、一日では通り抜けられないくらゐだつたので、二人は袋へ入れてもつて來た食物を食べて、林の中で夜をあかしました。翌日も一日歩きましたが、まだ林のそとへは出られませんでした。するともう食べるものは、なんにもなくなつてしまつたので、ひとりがかういひました。『なにか射つて食べなければ、ひぼしになつてしまふだらう。』

かういひながら、鐵砲へ玉をこめて、方々を見まはしてゐました。そこへ丁度年寄つた兎が跳び出して來たので、射たうとすると兎はかういひました。『獵人さんどうぞわたしを助けて下さい。子どもを二匹上げますから。』かういつて藪の中へ跳びこんで行つたか



と思ふうちに、二匹の子兎を連れてかへつて來ました。

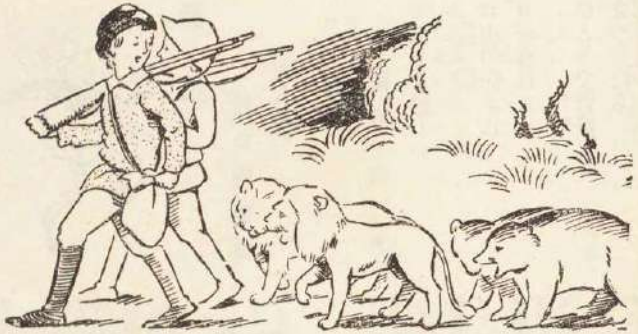
けれども子兎がかはいらしい樣子をして、ぴよん〳〵と跳びまはつてゐるのを見ると、兄弟はどうしても射つ氣にはなれなかつたので、一しよに連れて出かけました。

兎は兄弟のあとへついて跳んで行くと、ぢきに一匹の狐にあひました。で、兄弟が射たうとすると狐はかういひました。『獵人さん、どうぞわたしを助けて下さい、子どもを二匹上げますから。』かういつて二匹の子狐を連れて來ました兄弟はまたかはいさうになつて、これをも殺さずに、兎と一しよに連れて行きました。

少し行くと、藪の中から狼が出て來ました。そして兄弟が射たうとすると、またかういひました。『獵人さん、どうぞわたしを助けて下さい。子どもを二匹上げますから。』そこでまた二匹の恐ろしい狼が仲間にはひりました。

その次には、熊に逢ひました。すると熊もやつぱり命を助けてもらひたいといつて、二匹の子熊をつれて來ました。そこでまた二匹の子熊が仲間へはひつて、みんなで八匹になりました。

すると今度は、なにが來たと思ひますか？　一匹の獅子が、たてがみを振り立てゝやつて來たのです。けれども兄弟はこはがりもせずに、すぐ鐵砲を向けました。すると獅子も同じやうに、『獵人さん



どうぞわたしを助けて下さい。子どもを二匹上げますから。』といつて二匹の子獅子を連て來ました。

そこで獵夫は二匹の獅子と二匹の熊と二匹の狼と二匹の狐と二匹の兎をお伴につれて行きました。けれどもそれではお腹が一ぱいにならなかつたので、兄弟は狐に向つてかういひました。『これ、おするさんや、なにか食べものをとつて來ないか。お前たちはわるさにかけては拔目のない連中だから。』

それをきいて狐はかう答へました。『この先に村がありますが、そこへ行けば、鷄が澤山ありますからそこまで御案内いたしませう。』

そこで兄弟は村へ行つて、自分たちや獸たちの食べるものを買つて、また先へ進みました。二匹の狐はよくその邊の百姓家の樣子を知つてゐたので、先へ立つて案内して行きました。かうして兄弟はしばらく旅を續けましたが、併し二人一しよでは、どこへ行つても使つてくれる人が見つからなかつたのでかういひました。『もう仕方がないから別々になりませう。』

そこで兄弟は獸物を二つに分けて、めい〳〵に一匹の獅子と一匹の熊と一匹の狼と一匹の狐と一匹の兎を連れてゆくことになりました。二人は互に別れを惜んで、養父からもらつて來た小刀を道ばたの木へさしておいて、一人は東へ一人は西へ、別れて行きました。

（つづく）

童謡

野口雨情選

（大人篇）

藪蚊

阪野　潤（大阪）

お母さん戀しい
ふるさとの
お山の向ふに
日が暮れる
ひとりで背戸に
立つてたら
藪蚊が　ぎようさん
とんできた

朝鮮から來た叔父さん

松岡　城峰（山口縣）

朝鮮から來た
叔父さん
知らん叔父さん
丈の高い叔父さん
ヒゲの多い叔父さん
朝鮮から來た
叔父さん
知らん叔父さん
風呂からあがつて
手拭かたにかけて歩く
叔父さん。

烏追ひ

若井ひろし（廣島縣）

お母さん戀しい
今日の日も
お山の向うに
暮れてつた。

薄荷畑で
薄荷の芽を
さがす
烏追う
烏追う
烏追う
烏追う
烏追ふ。

ホーイ
ホイ
ホーイ
ホイ

栗鼠

鹿島源二郎（新潟縣）

一の坂の栗鼠は
ちよいと出て
ちよいともぐつて
ちよいと出る
二の坂の栗鼠は
おしやべりさん
目白のおしやべりと
しやべつてる
三の坂の栗鼠は
だまつてる
だまつてもぐつて
出てこない。

月夜の雁

岡村　勝（長崎市）

かりがれ
がりがれ
綿を着れ
月夜の
森の
潮に
きら〳〵
冷い
月の色
かりがれ
かりが沒
綿を着れ
月夜にや
ほんとに
さむかろな。

ほたる

與田　準一（福岡縣）

こつちのこの水
あまいぞ　あまいぞ
ほたるこい
ささの葉ぬらして
ほら〳〵　飲ますぞ
ほたるこい
ひしやくでのますぞ
手桶でのますぞ
ほたるこい。

魚つり

鶴谷　隆起（清水市）

お堀の土手にこしかけて
魚つりさんが釣してる
魚つりさんの後には
蜘蛛がぢつと垂れてゐる
魚つりさんの糸は動かない
蜘蛛の糸も動かない
春の日永にぼんやりと
ぢつと垂れてる糸と糸。

日和

和泉幸一郎（青森縣）

今日の日和は
カラ　カラ
カラ
繪日傘　まはして
カラ　カラ
カラ

あをじ

加滋　喬雄（兵庫縣）

やぶの細道
野ゆうの木
きりがそこらに
ながれてる
あをじ山から
來てなくに
ゆうがほしうて
なくのだろ
細〻畝小畝にや
ふきのとう
ぽつかり　ぽつかり
のぞいてる。

小鳥がないた

内藤　昇（岡山縣）

あの山　藤で
この藪　藤で
小鳥が鳴いた
ピーチロ　ピーチロ
ピーチロ　ピー

お春戸にア一人
親なし子供
なき〳〵立つてた。

石切山

北野　牧夫（東京）

あこの　あの山
石切山だ
山の藤つぼで
コツンコツンコツン
あこの　あの山
夕暮れでした
細い　お月さん
指のよに細く
コツンコツンと
聞こひてこない。

朱爛鼻

澁澤青花

一

支那の浙江省の秀水縣といふところに、朱爛鼻といふ人がゐました。大へんむづかしい名ですが、これをやさしく日本の名になほすと、「赤鼻さん」とか「赤鼻先生」とかいふのです。ずゐぶん可笑しな名ですが、これは本當の名ではなく、あだ名なのです。本當の名はなんとか他にあるのでせうが、みんな人が「朱爛鼻〳〵」とばかり云つてゐるので、よく分りません。

この「朱爛鼻」といふ名がついたについても、おもしろい話があるのです。といふのは、或る時のこと、この朱爛鼻さんの隣りの家へ、泥棒が入りました。むろん何かだいじな物をぬすまれたにちがひありません。やがてそれと知つた隣りの人は、びつくりして朱爛鼻のところへかけこんで來ました。

『先生！　先生！　たた大へんな事になりました。家へ泥棒が入りましてね、だ、だ、大事なものを持つて行つてしまつたのです。どうぞ後生ですから、先生の力でなんとかもどるやうにして下さい。このとほりお願ひいたします。』

といつて、手をくんで、おがみました。といふのは、朱爛鼻が不思議な術を心得てゐるといふことを知つてゐるので、その術でなんとかしてもらはうと思つたのです。

『よし〳〵、そんな事はわけのない事だ。すぐにわしが取りかへしてやるから、心配しなさんな。』

朱爛鼻は机のうへから筆をとつて、自分の掌に何かさら〳〵と、おまじないのやうなものを書きました。

『さあ何處においた物がなくなつたのか、そのとられた場所へ、わしを案内しなさい。』

そこで隣りの人が案内しますと、朱爛鼻はそのとられた物のおいてあつた場所へ、おまじなひを書いた方の手で指さしました。そして、

『さあ、これで好い。もうすぐ返へるよ。』といつて、すた〳〵家へかへつてしまひました。

そのうちに夜が明けました。するとどうでせう。そこへ泥棒がかへつて來たのです。

泥棒は、なんでこんな處へかへつて來たのか、自分では分らないのです。たゞひとりでに足がそつちの方へむいて、いつの間にかそこへ來てしまつたのです。

『誠に惡いことをいたしまして、申しわけありません。どうぞ御かんべん願ひます。』

泥棒はこんな事をいつて、門の前にひざまづいてあやまりました。

隣りの人は大よろこびで、とられた物を取りかへし、そのまゝ泥棒をゆるしてやりました。

泥棒は後で氣がついてみますと、なんで自分はあんな馬鹿なことをしたのか、さつぱりわけがわかりません。妙なこともあるもんだなと、だん〳〵さぐ

つて見ると、全く朱爛鼻のおまじないのためだといふことがわかりました。

さあ、泥棒はくやしくてたまらません。なんとかして、この意趣がへしをしてやりたいものだと思ひまして、ある時朱爛鼻が外へ出るところを待ちうけて、刀できりつけました。ところが、好いぐあひにか、惡いぐあひにか、まづ命には別狀がなかつた代りに、ちやうどその刀が鼻のあたまを刺して、傷をつけました。それがもとでとう〳〵朱爛鼻の鼻は、朱く爛れてしまひました。

そこで人がみな彼のことを、「朱爛鼻〳〵」と呼ぶやうになつたのです。

二

それから暫くたつて、後のことです。今度は朱爛鼻の家へ泥棒が二人入りました。よりによつてわざわざ朱爛鼻の家に入るなんて、馬鹿な泥棒もあつたもんですが、全くこの泥棒は、朱爛鼻がそんな不思議な術を心得てゐるといふことを、知らなかつたのです。

泥棒たちは二人して、大きな長持をかつぎ出しました。

『オイ、うまく行つたな。中にはしつかりつめこんであると見えて、なか〳〵重いぞ。』

『ほんとに肩がめりこみさうだ。これだけあれば、當分樂が出來るよ。』

二人は悅に入つて、えつさ〳〵長持をかついで道をいそぎました。

『オヤ〳〵、これは變だな。どうも不思議だぞ。』

先きに立つた泥棒が、ふいに立ちどまつて叫びました。

『オイ〳〵、急にそんなところへ立ちどまつて、どうしたんだい。なにがそんなに變なんだい。』

『變だとも〳〵、大へん變なんだ。それ見ろ、こゝの家は、さつき長持をぬすんだあの家ぢやないか。』

『ウーン、なるほど、さういへばさうだな。あの家にちがひない。』

『どうも變ぢやないか。さつきたしかに、あの家の前をまつすぐやつて來たと思ふに、またあの家の前へ出てしまつたんだ。』

『してみると、知らないまに道をまちがへて、また引きかへして來ちやつたと見えるね。』

『そんなことかも知れないね。馬鹿々々しい。さあいそがう。』

二人はえつさ〳〵、また道をいそいで行きました。

『オヤ〳〵〳〵、これは變だ。またもとのところへ出ちやつたぞ！』

先きにたつた泥棒は、また頓狂な聲をたてゝ立ちどまりました。

『ヤア、ほんとだ！　これは一體どうしたといふのだらう。まるで狐につまゝれたやうだ！』

泥棒たちは目をこすり〳〵、また歩きだしました。そして何べんも何べんも、朱爛鼻の家のまはりをまはつてゐるのでした。

こんなことをしてゐるうちに、とう〳〵夜が明けてしまひました。

『オイ〳〵、お前たちは家へ歸りたいのか。それなら早く長持をおいて行けば好いんだよ！　馬鹿だなハ、、、、、。』

だしぬけに門の戸をあけて、かう云つて笑つたのを見ると、それは朱爛鼻でした。

泥棒たちはびつくりして、あはてゝ長持を下におきました。すると急に夢からさめたやうに、正氣になりました。

『どうだな、それなら家へ歸れるだらう。』

泥棒たちは、もう一言もなく恐れ入つてしまつて、そこにひざまづいてあやまりました。

『ハ、、、、、。まあ好い〳〵。お前たちもせつかく物をとりに來たんだ。無手でかへすのも氣の毒だ。まあ、これでも持つてつたらいゝだらう。』

朱爛鼻は、家から三升のお米を持つて來て、泥棒にやりました。

『どうも恐れ入りました。ありがたうぞんじます。』

泥棒たちは、地面に額をすりつけて、いく度もいく度もお禮をいつて歸つてゆきました。

これからといふもの、朱爛鼻の村には、全く泥棒が跡をたつやうになりました。

三

朱爛鼻について、もう一つこんな話があります。

ある年のお正月の十五日の晩のことでしたが、村

の青年が二人、朱爛鼻のところへやつて來まして、
『先生、今日はお正月の晩で、楊州の市は大したにぎはひださうぢやありませんか。どうかして行つて見たいものですが、どうですね、先生の力で、急に道を近くちゞめるといふわけには行きませんかね。』
と、とはふもない難題を持ちかけました。
いつたい支那では、お正月の十五日の晩が大さうにぎやかで、軒なみに提灯をつけてかざりますが、わけても楊州といふところではそれが盛んで、大じかけに提灯のまつりをするのださうです。それでこの青年たちは、その楊州のおまつりを見たいといふのでしたが、なにしろ秀水からは百里の餘もある遠いところですから、その晩のうちに行かうといふのはむりの話です。それを青年たちは、朱爛鼻に見せろとせがむのでした。
『出來んことはないが、わしはいやぢや。』
朱爛鼻はかう云つて承知しませんでした。
『まあ、そんなこと云はないで、なんとかして見せて下さいよ。ね、先生。』
けれど朱爛鼻はかぶりをふりました。
『なんだ、いやだなんて、その實出來ないんでせう。いくら不思議の術を知つてゐるからつて、それぱかりは出來まい。』
果ては青年たちは、こんなことを云つて朱爛鼻を馬鹿にしました。
朱爛鼻はその言葉が、ぐつと癪にさはりましたので、
『よし、それでは案内してやらう。だがその代り、なんでもかんでも、わしの云ふとほりにならなきやいかんぞ。』
と、念をおしました。
『えゝ、それはもう承知しました。先生のおつしやることは、なんでも聽きます。』
そこで朱爛鼻は、楊州へ出かける支度にとりかゝりました。その支度とはどんな事をするかといふに、まづそこへ一つの長い腰掛けをとりだしました。
『さあ、お前さんたち、この椅子に腰をかけなさい。まづお前さんはこつちの右の端へ、そしてお前さんはこつちの左の端へ。それからわしがそのまんなかぢや。』
朱爛鼻は、二人を腰掛けの兩端へまたがらせ、自分はその間に入つて、兩手に二人を引つつかんで、二人に目をつぶらせると、
『行け！』
と叫びました。
すると忽ち腰掛けが動きだして、まるで飛行機にでも乘つたやうに、ひとりでに空中を飛行してゆきます。
暫くして腰掛けは、地上におりてとまりました。目を開いて見ると、そこはもう楊州の市のなかです。
『ヤア、もう楊州へ着いたんですね。』
見ると市ぢゆう、いろ〳〵な形をした燈籠が家ごとにとぼつて、まるで晝間のやうです。そしてそれを見物の人たちが、ぞろ〳〵と歩いてゐます。五色にいろどつた燈籠の色も美しいが、若い娘さんたちが着かざつて通る姿も、實にきれいです。
青年たちは、すつかりよろこんでしまつて、キヨロ〳〵市を見物して歩いてゐました。
『さあ、もう好いかげんにして歸らうよ。あんまりおそくなるから。』
朱爛鼻がいく度か注意したのも、二人の耳へは入りません。
『まあ、好いですよ。もう少し見て行きませう。』
とばかりで、歸るのを忘れてあそびあるいてゐました。
そのうちに夜があけかゝつたので、二人がひよいとうしろをふりかへつて見ますと、朱爛鼻が居りません。

『オヤ、先生がゐないぞ！どこへ行つたんだらう。』

びつくりして、あつちこつち血まなこになつてさがし歩きましたが、ゐようはずがありません。朱爛鼻は、青年たちが自分のいふことをきかないので、おこつて歸つてしまつたのです。

『困つたな！　どうしよう！』

『お金といつては、一錢も持つて來なかつたんだからなあ、弱つたねえ！』

二人は悲しくなつて、ボロ〳〵涙をこぼしました。歩いてかへるといつても、百里もある遠いところです。まして昔のことで鐵道はなし、一文なしと來てゐるのですから、どうにも出來ません。しかたがなしに二人は、みち〳〵乞食をしながら、一月以上もかゝつて、やつと國へかへつて來ました。

『先生、あなたはなんていふひどい人なんです。人をだまして、おいてきぼりにするなんて、けしからんちやありませんか。』

二人は朱爛鼻の家へどなりこんで、拳固をふりあげてなぐらうとしました。

すると朱爛鼻は、たちまち柱のなかへ姿をかくしてしまつて、キャツキャツと云つて笑ひました。

『まあ〳〵、さうおこんなさんな。わしの術ではな、さう長くとまつてはゐられなかつたんだよ。だからわしがあんなに歸らう〳〵と云つたぢやないか。それをお前さんたちがきかないで、いつまでも、ぐづぐづしてゐたから、あんな事になつたのだ。それだのに、自分の惡いことは棚にあげて、人をせめるなんて法があるもんかな。』

かう云はれて見ると、二人も、今さらなんともせめる言葉がありません。それでたゞ口のなかで、ブツブツ云ひながら歸つてゆきました。

（をはり）

《幼年詩》

麥の葉のかげ（推薦）

海達公子

つばめ
うちへきた
つばめ
すを
つくり出した

すず
ひきだし
あけた
すずがちりちり
ころげてきた

ばら
ばらのはが
ゆれてゐる
ゆうらゆうら
ゆれてゐる

ぬくいひる
學校で
はおりをぬいだ
かへつて
れんげさう
つみにいかう

麥のはのかげ
麥のはのかげが
つぎのはに
うつつてゐる

ざう
ざゝにのつた
はなを
あたまに
持つてきた
からいもやつたら
口へ持つていつた
たべよるかと
おもつたら
又あたまへ
もつてきた

（註）熊本共通せにて象にのつたのであります。

つる
つるが
羽ひろげた
お日さんの方を向いて
羽ひろげた

（註）熊本水前寺にて作りました。

小鳥は空に

（長篇）

加藤武雄

七

丘の上に、白い煉瓦と大理石と赤い瓦の宮殿のやうな洋館がある。町の人々が澁谷御殿と呼んでゐる岩村伯爵の邸宅であつた。其の邸宅の崖下は日の目さへ拜めない裏町の貧民窟で、獷い亂暴な子供達がうよ〳〵と暮して居た。裏町の子供達は、澁谷御殿の屋敷内の明るい美しい芝原が羨しくてしようがなかつた。だから、春の光に誘はれて、つい分別もなく伯爵邸の門を潜つては、その芝生に來て餘念もなく戯れるのであつた。それが傲慢な伯爵の怒にふれた。伯爵は、追つても追つても集つて來る子供達にある日のこと猛犬タマルをけしかけたのであつた。遂々、裏町の子供の一人はタマルの牙に咬まれて大怪我をした。

それから、裏町の子供達は、唯一つの樂園であつた伯爵邸の芝生には近寄らぬ。そして日の光さへ拜

めない濕つぽい露地の中で惡い遊びにふけるやうになつた。

裏町の人々が伯爵一家を怨むのもそのためであつた。みんなは、崖の下から、丘の上の澁谷御殿を睨んでは口々に罵つてゐた。

ある日のこと、露地の中でメンコ遊びをしてゐた子供の一人が、丘の上の家に、ついぞ見たことのない美しい少年が、ぢつとこちらの方を眺めてゐるのを發見した。

『みんな見てみな。變な奴が居やがるぜ。』

『あいつ御殿の子供だろ。』

『だつて御殿には子供なんかゐやしないよ。』

『女の子みたいに髪の毛をのばしてるぜ。をかしな奴ぢやないか。紫色の洋服なんか着込んで、いやにぢろ〳〵眺めやがるぜ。』

『何でもいゝや、なぶつてやらうじやないか。』

それから、その中の一人が兩手で喇叭の形を造つて口に當てがつて呶鳴つた。

『お邸の坊ちやん、降りて來ないかい。』

お邸の坊ちやんと呼ばれた義雄は、人懐かしげに莞爾と笑つた。下の子供達が聲を揃へて二度も三度も呼んだので、義雄は遂々崖を傳つて降りて來た。高い嶮しい崖ではあつたが、義雄はすばしつこく降りて來た。そこには十人ほども見知らぬ子供がゐたが、京都に居た頃、鹿ケ谷の村の子供達と共に育つた義雄は別に恐ろしさうにもしなかつた。

子供達の中でも特別に意地わるさうな一人が義雄に話しかけた。

『お前、あの御殿の子供なの？』

『さうだよ、今度京都から來たの。あのうちの孫なんだよ。』

それを聞くと、對手の子供はいきなり命令した。

『やつつけてしまへ！』

義雄は思ひがけない襲撃に度を失つて倒れた。そ

の上へ裏町の子供達が幾重にも幾重にも押し重なつた。元氣な義雄ではあつたが、多勢に無勢では何うすることも出來なかつた。力まかせに起き上らうとしたが、どつからか泥まみれの下駄が飛んで來て、いやといふほど義雄の脾腹を蹴つた。

そのとき丘の上から轉がるやうに、土煙をあげて馳けて來たのはタマルであつた。忠犬タマルは義雄の危急を知つたので、まるで大砲彈のやうに飛び掛つた。タマルには、裏町の子供達は懲々してゐたので、今まであんなに勢を得て居たものが悲鳴をあげて蜘蛛の子のやうに逃げ散つた。タマルは別に逃げる敵を追はうともしなかつた。そして小さな主人の足許に悠然と立つて、四邊に眼を配つてゐるのであつた。

義雄は起き上つて、服についた土を拂ひ落した。そしてタマルの頸を抱いて感謝した。

『何だつてだしぬけに掛つて來たのかしらん。』

と義雄はそれを考へた。

そのとき、物蔭からこつそり覗いてゐる子供の頭が、タマルの眼に映つた。タマルは猛然と飛び掛らうとしたが、義雄はグッと頸輪を引いて放さなかつた。そして、子供達に對つて叫んだ。

『恐怖がらなくつてもタマルは大丈夫だよ。タマルは僕が命令しなければ動きはしないのだから。それよりか、なぜ君達は僕にかゝつて來たのだい？　僕は君達に今日はじめて逢ふんぢやないか。』

『お前が御殿の兒だからだよ。お前のお祖父つたら意地惡で、しみつたれなんだ。』

『だつて、僕は今日はじめて會ふんだから惡い子供か良い子供か解らないぢやないか。それに、いきなり掛つてくるなんて卑怯だよ。腕づくなら、斷つてから來ることにしようやね。』

『何だい、生意氣いふな。』

子供達は遠方から罵るばかりで、敢て近寄つて來

るものはなかつた。それはタマルが怖いからであつた。

『だれか繩を投げてくれたまへ。タマルを縛るから。』

義雄が云つたので、子供の一人が丈夫さうな繩を投げてくれた。義雄はタマルを傍の電柱に縛りつけて、そして上衣を脱いだ。

『さッ、腕づくなら來てみたまへ。』

『生意氣なッ。』

さつきの意地惡坊子が飛び掛つて來たが、わけもなく義雄の爲めに、ねぢ倒された。それを見て、續いて掛つて來るものはなかつた。

その事があつてから、義雄は毎日のやうに崖を降つては此の裏町へ遊びに來た

裏町の長屋の一軒に、線路工夫の定吉は住んでゐた。定吉は、正直な男で酒も煙草ものまず、もちろん惡い事などはせず、朝早くから夜おそくまで根限りに働いた。働いても働いても定吉は貧乏であつた。定吉のおかみさんも良い女房であつた。定吉のおかみさんは亭主の留守の間も、決して近所隣を話し歩いたりはしないで、一生懸命に内職の封筒貼を勵んだ。それだのに、なぜ貧乏かと云へば、それは定吉に餘り澤山の子供があつたのと、そして病人の母親があつた爲めであつた。子供は十三歳の娘を頭に、女が三人と男が三人と都合六人もあつた。年寄の母親は中風と云ふ病氣で、もう三年も足腰が立たぬのであつたが、定吉夫婦は醫者を迎へたり藥を買つたり御馳走をしたりして一生懸命に孝行を盡すのであつた。そんなわけで、正直者の定吉と貞女の女房とは貧乏してゐた。

ところが、困つたことが出來た。

或る日、電車が子供を轢き殺した。そのときの運轉手は、不意に子供が線路へ飛び込んだので、轢いた電車には罪がないのだ、といひ張つたが、その實、子供は線路で夢中になつて遊んでゐたのを、電車が鈴もならさずに轢き殺したのであつた。そのことをほんたうに知つて居たのは、丁度、そのとき線路の修繕工事をしてゐた正直者の定吉であつた。

警察へ呼び出された時、定吉はそのことを眞直に申し立てたので、運轉手は牢屋へ入れられ、電車會社は罰金や損害賠償金を申しつけられた。それで、定吉は、會社の雇人でありながら、會社の不利益な申立をしたといふので、その日かぎり解雇されてしまつた。何といふ氣の毒な話であらう。

裏町の子供達からその話を聞いた義雄は、

『まつたく氣の毒な話だね。』

ばかにませた口調ではあつたが、心から同情したのであつた。

『僕のお祖父樣が電車會社の株主なんだから、そのことを話して定吉さんを許して貰はうよ。』

『さうだねえ。それが出來るといゝんだが、君のお祖父さんには同情なんかありはしないよ。』

仲間の子供が絶望的に答へた。

義雄は其の夜、祖父と共に晩餐の卓子についたとき、その事を話して、定吉を許してくれと賴んだのだが、

『正直に話した事はよい事だ。だが、自分の會社の利益を考へない雇人には用がないからな。ゆるす事は出來ん。』

老伯は冷かにさう答へた。その言葉の意味は義雄にはわかる筈がなかつた。

義雄はその夜ぢう考へた。そして正直な定吉を助ける爲めには、やつぱりお母樣に相談するより他に道はないと思つた。

『明朝になつたら、ゴロオ(仔馬の名)に乗つてお母樣のお邸をお訪ねしよう。お母樣は、きつと喜んで定吉さんの爲めに何とかして下さるだらう。』

さう考へると、何だか心が爽快になつた。そしてあの元氣のよいゴロオの馬蹄の音や朝露に濡れた綠の丘や、慈愛に滿ちた母の笑顏を考へながら、いつとも知らず深い眠りに陷つたのであつた。

十日ほどすぎた或る朝のこと、老伯はひどく不機嫌になつて、葉卷の煙をやけにぷかぷか吹き散しながら呟いてゐるのであつた。

老伯を不機嫌にさせたのは、伯爵の手に摑まれて居る新聞の記事である。

その新聞の記事をその儘こゝに掲載したいのだがそれでは餘り長すぎるので、記事の要領を記すことにしよう。

初號活字の大きな標題には「貧民窟の聖母」とあつた。

正直者の線路工夫定吉が、正直に警察で證言したのが原因で會社を解雇され、六人の子供と病氣の母親を抱へて困つて居たのを、岩村伯爵家の若夫人が知つて、自分の邸へ引き取つて世話をすることにした。

と、事件の詳細を報告し、更に、若夫人は目下、その愛兒である伯爵世嗣とは、別居をよぎなくされてゐる。

それといふのも老伯の頑迷に依るのであると、大體伯爵家の內情まで書かれてゐるのであつた。

これを讀んだ伯爵が機嫌を惡くするのも全く無理がなかつた。

『何といふ出過ぎた女だ。今後は義雄とも絕對に會はせぬ事にしなければならぬ。そして伯爵家の不名譽になるやうな行爲は嚴重に愼むやう警告しなければならぬ。不埒な女だ！』

持病で痛む脚を引きづりながら、怒に破れさうな老伯は長い廊下を仙石執事の室へと急ぐのであつた。

仙石執事に逢つて、そして信子夫人に抗議しようと考へたからだ。

だが、老伯は仙石執事の室內に思ひがけない女の聲をきいて、扉の外に躊躇した。そして耳を澄まして內部の聲を聞いたのであつた。

『御前樣は御病氣で到底お目にはかゝれません。御用向は私から御傳へ申しませう。』

仙石氏がなだめるやうにをだやかに云つた。

『馬鹿におしでないよ。女だと思つて馬鹿にするとあとで悔むやうな事が出來ますよ。斯う見えたつて岩村伯爵家の若奧樣なんだよ。お前さんなんか雇人ぢやないか生意氣な。さあ、私のお父樣に會はしておくれ。後になつて泣き面かくのがいやなら、伯爵の御前に會はしておくれ。』

痛高い聲、下卑た言葉、女は果して何者であらう。

老伯は拳を握りしめ、今にも扉を開かうとしたときふと、義雄が此の邸に引き取られた最初の夜、窓近くうかゞひ寄つたといふ怪しい女の姿と、そして放蕩の揚句、自働車の衝突で變死した長男義明の面影が、どうしたものか、思ひ浮べられた。その刹那よろよろとして老伯は廊下に倒れようとした。

（つゞく）

盆の十六日

長崎五六

『盆の十六日に、お閻魔さまへさゐろとしたら、珠數の緒がきれた鼻緒がきれた、足でおがむ手でおがむ。』

十四五の女の子を頭に、七八つの男の子や女の子が、大勢手を引き合つて、節も面白く聲を揃へて、往來を唄ひ連れて行く後から、乳母や子守が、ちいさい子供を、おぶつたり抱いたりして唄ひながらついて行きました。

これは、昔江戸の町の風俗で、今日は盆の十六日で、ある町の寺の閻魔堂の境内を、この盆唄の群れが通りました。その時に、お閻魔さまへお詣りをしてゐた、一人の乳母に抱かれてゐた、五つばかりの男の子が、盆唄の群れの後を追ひますのを、乳母は、『もう日が暮れますからはやくお家へ歸りませう、あれ〳〵盆唄もあんなに、遠くになつてしまひました』と、言ひましていろ〳〵になだめ、すかしても、ワア〳〵泣いてきいませんので、乳母もホト〳〵困つてしまひました。そこで乳母はおどかしに『そんなにダヤをこれると

ギリシヤ神話繪物語　オデッセーの航海

藤川篤夫譯
寺内萬治郎畫

サーセの魔術

オデッセーと家來達の乘つた船は、間もなく、一つの島に着きました。この島には、エーオーラスと云ふ風の神が棲んで居りました。

風の神は、オデッセーが來た事を大變喜こんで、色々の御馳走をして、もてなしました。そして、愈々一同が故郷へ向つて歸ると云ふ時に、一つの大きな袋を持つて來て、オデッセーに與へました。

この袋には、東と南と北の風が、一杯入つてゐたのです。風の神は、西風に向つて、靜かに吹いて、オデッセー達の船を、無事に故郷イサカの島へ着けるやうに云ひ附けました。

九日九夜の間、船は靜かに吹く西風に追はれて、イサカの島の近くまで來ました。

オデッセーは、檣に凭れて、四方の景色を眺めてゐましたが、もう直き懷かしい我家へ歸る事が出來ると思ふと、つひ安心して、ウト〳〵と居睡りをしてしまひました。

その間に家來達は集まつて、惡い相談を始めました。

『オデッセー王は、風の神から、大きな袋を貰つて來たが、その中にはきつと、寶物が這入つてゐるに違ひない。どうだ、一つ開けて見ようぢやないか。』

『さうだ、それがいい。開けて見よう。』と云ふので、家來達は大勢して、袋の口を解きました。

すると忽ち、恐ろしい唸り聲とともに、袋の中から、北風、南風、東風が飛出して參りました。

おゐんさまさまに、食べさせてしまひますよ』と言つて、お閻魔さまに向ひ、『どうぞおゐんさまさま、ダヤッ子の坊チャンを、食べて下さい』といつて、子供を置き去りにして、お堂の外へ出て行きました。

ところが、門の所で知り合ひの人に出逢ひ話しに實が入つて、思はずおそくなりましたが、子供のことが氣になるので、話しもソコ〳〵にお堂の方へ歸つてきました。

お堂の中には、もう子供の泣き聲も聞えません。すこし心配になつて、お堂の内へ入つて見ますと、子供の姿が見へませんので、お堂の廻りを、ぐる〳〵まわつて、探しましたが、何所へ行つたか、かいくれ行方が、わかりませんでした。乳母は眞蒼になりまして、『ア、とんだことになつた、坊チャンは人さらひに連れて行かれたか。大切な御主人の預り子を失くして、何んとお詫びの仕樣もない。坊チャンの行衛をおゐんさまさまへお願ひしやう』と、またお堂へ入つて來ました。

その時は、もう日が暮れかゝつて、お堂の中は、うす暗くなつてゐました。

乳母はお閻魔さまの前に膝をついて『どう

船は暴れ狂ふ大風の爲に、木の葉のやうに揉れて、沖へ沖へと吹流されてしまひました。忽ちの間に、故郷イサカの島の、樹も家も見えなくなつて、あたりは元通りの大海原となりました。物音に眼を覺して、それと知つた時のオデッセーの驚きは、どんなだつたでせう。オデッセーは落膽のあまり、海へ身を投て死んで了ほうかとさへ思つた程でした。

船は六日の間波にもまれて、苦しみ辿した揚句、七日目にやつと巨人島と云ふ島へ着きました。この島には一つの灣があつて、その中は少しの波もなく、油の樣に靜かでした。一同は此處へ船を繫い置いて、上陸しました。

オデッセーは島の樣子を見る爲に、高い岩山へ上つて行きました。すると、つひ足元から二條の白い煙が立昇つてゐるのが目に入りました。家來の三人がその方へ下りて行つて見ると、途中で一人の美しい娘に出遇ひました。娘は、この島の王樣のお姫樣でした。

ぞ、お爺んまさま、お爺チャンの行衛をお敎へ下さいまし。私の大事の御主人のお子さんです』と一心に、お願ひをして、お閻魔さまのお顏を見上げますと、闇の中から、浮き出したやうな、お閻魔さまの口から、子供の赤いつけ紐が、ブラリと下つてゐました。

乳母は、ハッとして、よく見ると、それは見ちがいもない、坊チャンの衣物のつけ紐なのでした。『サテハ私がおどかしに願つた、嘘が眞になつて、お爺んまさまが食べてしまつたのか。人さらひなれば、さがし出すことも出來るが、命がなくなつては、もう取り返しがつかない。御主人へ死んでお詫びをするより仕方もない。それにつけてもあんまりなお爺んまさま』と、お閻魔さまを恨んで、半狂亂になつて、お堂の中を狂ひ廻りました。

ところへ、底力のある太い聲で『閻魔さまの黨現を今知つたのか』と言ひながら、お閻魔さまの後から出て來たのは、この お寺の住職で、白い髯のフサ〳〵と生へてゐる坊さんでした。

『コラ乳母、閻魔さまへ食べて下さいと願つておきながら、閻魔さまを恨むとは何ごとだ。そんな嘘をつく奴は、舌を抜かれてしまふぞ』と言ひますと、乳母は『舌を抜かれるぐらゐはおるかのことです、もう私の命は投げ出してゐます』

『ムヽ、命を投げ出すほど大切な子供と氣がついたのなら、こつちへ來い』と、坊さんは、乳母をつれて、奥の本堂へ上りました。

本堂の正面の阿彌陀さまの前にある燈明の灯し、ボンヤリと四邊を照らしてゐます。住職は、本堂の次ぎの自分の居間を指さして『乳母あれを見ろ』と言ひました。

乳母は不審に思ひながら、ソツト覗いて見て、アツト聲を上げました。

それは泣きつかれて、スヤ〳〵眠つてゐる可愛らしい子供の寢姿でした。

乳母は子供を抱き上げて嬉し泣きに、泣きながら、手を合せて坊さんを拜みました。

お姫樣は、三人の家來を、自分の御殿へ案内しました。三人はそこで、王妃樣に御目にかゝりましたが、まるで山のやうに肥つた方だつたので、吃驚して、氣絶しさうになりました。

ところが、そこへ王樣が出ていらつしやいました。王樣は三人の姿を見ると、いきなりその中の一人を、ひよいとつまみ上げて、獅子が肉を食ふやうに、むしや〳〵と食べてしまひました。

殘つた二人は、一生懸命、オデッセーの所へ逃げて來て、その話をしました。一同の者は驚いて、大急ぎで船に乘つて出發しようとしましたが、もう其時は王樣の命令で、多くの大男達が海岸へ走り出て來ました。大男達は船に向つて、どん〳〵大岩を投げ附けました。船はまるで、卵の樣に碎け、水の底に沈みました。船の碎ける音と、死んで行く人の叫び聲が、もの凄く水の上に響き渡りました。大男達は、死體となつて水の上に浮ぶオデッセーの家來を、まるで漁師が魚を掴むやうに掴んで、家へ持つて歸りました。

夢斷判

長崎五六

昔、江戸の神田のある町に、太日作と云ふ正直者がゐました。毎日朝から晩まで

オデッセーの乗つた船たけは、やつとこの危い所を逃れて、沖へ出る事が出來ました。多くの親しい家來を失つたオデッセーは、どんなに悲しんだ事でせう。問もなく船は、また一つの島へ着きました。この島には、サーセと云ふ女の魔法使が住んで居りました。オデッセーは、先づ家來のユーリローカスに、二十二人の部下を將ゐさせて、樣子を見せにやりました。

魔法使のサーセは、美しい女でした。そして、一同の姿を見ると、早く家の中に這入つて、おいしい酒を飲むやうにと勧めました。

家來達は喜こんで家の中へ這入りましたが、ユーリローカスだけは、騙されるといけないと思つて、外に待つて居りました。サーセは家來達を、立派な客間に案内して、蜂蜜のやうに甘い酒を飲ませました。家來達がその酒を飲むと、うつとりとしてしまつて、今迄の事をすつかり忘れてしまひました。

サーセは、醉ひつぶれてゐる家來達を、一つづつ魔法の杖で打ちました。と、一同は忽ち豚になつてしまひました。

セッセと働いて、大層評判のいい、男でしたその隣りに住んでゐるのは、五郎介と云ふ怠惰者で、平常ゴロ〳〵寢てばかりゐる、心掛けの惡い男でした。

太目作は、毎日稼いだ錢の中から、少しづゝ貯めた金が、一兩ばかりになりました。

『サア此の金は何んに遣つたらよからうか』と老へてゐました。ところが、鯨湯でフト耳に入つたのは、(トミ)の興行が、谷中の天王寺にあると云ふことでした。

この(トミ)といふのは、當籤と云つて、その頃の金の二分で札を買つて、一番の籤に當ると、百兩取れる仕組で、お上の許しを得てやるので、隨分流行つたものでした。

太目作は、一番(トミ)の札を買つて、運よく當てゝ、早く出たので、早速買ひに行かうゝしましたが、サア何番を買つていゝか、當りがつきませんので、その晩は、そのことばかり氣になつて寢られませんでしたがトロ〳〵とすると、枕元に、太目作〳〵と呼ぶ聲がするので、頭を上げて見ると、日頃信心をする觀音さまが立つておいでになるので驚いて飛び起きると、一枚の畫を下さいました。見ると長い階子の上に鶴がとまつてゐる畫なので、それを頂く途端に目が覺めました。

『サテは夢に觀音さまが、當籤の札の番をお敎へ下さつたに違ひない』と喜びましたが、鶴にはしごの畫では、何番の札を買つていゝかわからない、これは新道の占ひ者の卜金先生に御相談をしやうと夜の明けるのを待ちかねて、卜金先生の家へ出掛けて、夢判斷を頼みました。

卜金先生は、勿體らしく咳ばらひをして『エッヘン、先づ鶴は千年の壽を保つと云ふから、千、はしごは八四五で、八百四十五、そこで千八百四十五番となる、見料はいくらでもいゝが、もし當つたら、タンマリとお禮をおくれ、千八百四十五番だよ、い、か間違へてはいけないよ』と云はれたので、太目作は喜んで、札を買ひに出掛けました。

太目作が卜金先生の所を出ると、物蔭からノッソリと出て來たのは五郎介です、太目作の後姿を見て、『〳〵たゝ〳〵子のうさぎだ、先廻りをしてあの札を買つてしまはう』と、尻からげで駆け出しました。

外にゐて、この有樣を見たユーリローカスは、吃驚して、大急ぎでオデッセーの所へ逃げ戻つて來ました。

オデッセーは、直ぐ、家來達の敵討ちに行く決心をしました。

銀の鈑を打つた立派な刀を腰に差し、大きな弓を肩にして、森の中へ這入つて行きますと、一人の美しい少年に會ひました。少年の名は、ハーミーズと云つて、神々のお使ひでした。ハーミーズは、オデッセーに、白い花が咲いてゐる、一本の不思議な草を渡して云ひました。

『貴方がこの花さへ持つてゐれば、決してサーセの魔術にはかゝりません。サーセが杖で貴方を打たうとしたら、貴方は直ぐ刀を抜いて、サーセに打つてかゝりなさい。さうすれば必ず勝つ事が出來ます。』

オデッセーは感謝して、この花を受取りました。

魔法使のサーセは、オデッセーが來たのを見ると、大喜びで、早速、奥の部屋に案内して、例の恐ろしい酒を飲ませました。

オデッセーは、わざと眸つたやうな振りをしてゐました。サーセは傍へ近寄つて、魔法の杖で強くオデッセーの肩を打つて、

『豚になれ！』と叫びました。併し、一向に魔法がかゝりません。サーセは慌てゝ、もう一度打たうとすると、オデッセーは言も云はずに、いきなり劍を引拔いて、あべこべに斬り附けました。

サーセはどんなに驚いた事でせう。オデッセーの足下にひれ伏して、哀れな聲で助命をこひながら、

『貴方はなんと云ふ强いお方でせう。貴方はきつと、ギリシヤのオデッセー王に違ひありません。神の使のハーミーズがさう云ひました。私の魔術のか、らない者は、世界中にオデッセーと云ふ方より他にないと。……どうぞ刀を納にお納めになつて、失禮の段をお赦し下さいませ。』と頼みました。

やがてサーセは、召使共に命じて、オデッセーを立派な室に案内させ、世界中から集めた珍らしい食物や、色とりゞの美しい酒飯をその前に並べました。

太目作は、札賣り場へ來て、千八百四十五番の札を買はうとしましたら、世話人は帳面を見て、『アヽお氣の毒ですが、その札はタツタ今、一足違ひで賣れてしまひました』と云はれ、太目作はアツト尻もちをついたまゝ、暫く聲も出ませんでした。『觀音さまのお告げを受けた札が、賣り切れとは情ない、自分の運もこれ限りか』と、ガツカリして、立ち上る力も拔けてしまひました。

世話人も、氣の毒に思ひまして、『お前さんのお望みの札が無いのは、今更何んと仕樣もない、どうですタツタ一枚殘つてゐる札があるが、殘りものには福がある、と云ひますから運だめしにお持ちなさい』と勸められ、折角思ひ立つたもの買はぬも殘念と、その札を買つて家へ歸りました。

サテ富籤興行の當日になりますと、谷中の天王寺へは奉行所から役人が出張つて物々しい有樣です。本堂の内外には、何千人の人が、ギッシリ詰めかけてゐます。いよ／＼籤になりますと、大勢の世話人が立ち會ひまして、一人の坊さんが、衣の袖から、捲り上げ、大きな鉢を持つて、札の入つた鞄の穴から、中の札を一枚づゝ、突き刺しては出しますと、世話人はその札の番を讀み上げます。それを聞いて大勢が手をたゝき、聲を揚げて、それは〳〵大變な騒ぎです。

翌日になりまして、町内の大勢の人につれられて、當り籤の金を取りに來たのは太目作です。思ひがけなく、好運の當り籤が一番の五百四十八番、それは太目作が買つた札でした。太目作は、まるで夢のやうな心持ちで金を貰つて家へ歸りますと卜金先生が來ました

『ヤア太目作さんお目出たう、正直ノ頭に金宿るとはお前さんのことだ、今夢判斷のやり直しをしたが、ほしごは下から上るものだから、八四五が下から讀んで五百四十八番。はしごを上つて鰍を捕へると云ふことになる鰍は千年と云ふから、今に千刷分限になるでせう』と云ひましたが、その通り太目作は間もなく、商賣が當つて大金持ちになりました。

五郎介は前祝ひだと云つて、大勢の酒呑み友達を集めて、毎日遊んでゐましたが、富籤の日からゐなくなつて、トウ〳〵行方が知れずになりました。（ゐはり）

併しオデッセーは、自分の前に置かれた、色々の御馳走を目ても、少しも手を附けやうとはしませんでした。

『どうして貴方は召上つて下さらないのですか。』と、サーセが心配さうに訊れました。

『私の大事な家來達が、豚小屋に入れられてゐるのに、どうして、私一人が、愉快に飲み食ひする事が出來よう！』と、オデッセーが答へました。そこでサーセは、豚小屋へ行つて例の杖で豚の身體を撫でますと、忽ち、もとの家來達の姿に變りました。

改めて、盛大な宴會が開かれました。一行は島々の人々の、心からの歡迎を受けて、來る日も來る日も面白可笑しく、たゞもう夢のやうにうか〳〵と送つてしまひました。

一年目に、やつと一同は故郷へ歸る事になりました。サーセに厚く禮の言葉を述べてから、一同は船に乘り込みました。

船はだん〳〵と遠ざかりました。サーセは海岸に出て、美しい金色の髪の毛を、海風になびかせながら、いつまでも〳〵見送つて居りました。（つゞく）

幼年詩

若山牧水選

お月さん（賞）

京城若草町百六　河野正三郎（十三）

お月さんお月さん
となりでないてる
あかちやんを
そつとねかして
下さいな

評、優しい心よ、優しい言葉よ。（牧水）

すいた電車（賞）

水戸高女一學年　久米　百代

すいた電車は
うれしいな
赤い腰かけが
いつぱい見えてる電車は
うれしいな

評、歌も慕しさでいつぱい。（牧水）

新らしい停車場（賞）

千葉縣平岡校高　石木リヤウ

新らしい停車場
驛長さんも
新らしい

評、なるほど、なるほど。（牧水）

馬と子供

甲府市佐度町十三　豊島　泰

町の道を
田舍の子供が
馬をひいてつた
ひかれる馬も
おとなしそうだ

評、靜かな景色、靜かな歌。（牧水）

金魚屋

新潟縣味方村七穂校尋六　鹿島三武郎

夏がきた
金魚屋さんも
もうくるぞ

夏が來た

同　人

夏がきた
峠を越えて
夏がきた
水泳が出來るし
うれしいな

評、二つともその心持がよく出てゐて氣持がいい。（牧水）

あり

長野縣鮒川校尋四　石坂　律夫

こつぱにのせて
ながしたありは
いまごろどこへ
行つただろ
ほんとにすまねい
ことをしたなあ

評、大丈夫、ちやんと何處かへ上つてゐます。（牧水）

お玉じやくし

東京市外大井町　柿沼　喜一（十四）

お玉じやくしが
蛙になつたら
お玉じやくしの
時分を
おぼえてゐるかしら

評、もの覺えのよさそうな顏でもありませんね。（牧水）

帽子

山形縣櫃澤校尋六　金子　長吉

新聞に
書いてある帽子
買ひたいようだ

夕方

千葉縣平岡校高二　仲村　きよ

夕方庭はいてたら
思はず姉さんがきた
私は
はくのをやめた

でんき

山梨縣增穂校尋六　矢崎　長三

でんき　でんきの
いぢわるさん
ローソク消したら
また消えた

雨

山口縣櫨田校高一　末廣　朝人

ポチヤン〳〵と
雨だれの音を聞いてると
本がよみたくなつた

小川

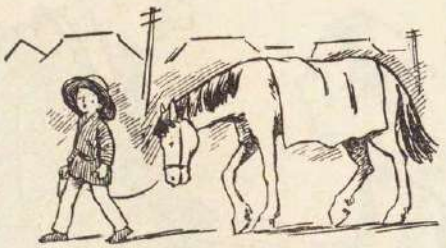
靜岡城内東校尋二　吉田しげ子

ちよろちよろながれる
小川の水に
くさのあをばが
うつつてる
めだかがそろつて
およいでゐたが
水といつしよに
ながれていつた

女の子ども

山形縣櫃澤校尋三　須藤よしえ

すすきに　かくれた
女の子ども
さむくて　さむくて
ちぢまつた



吹雪

山形縣櫃澤校尋六　伊藤　タケ

ばらばら障子に
あたる吹雪の音
障子をすき通して
中まではいつてくる

竹やぶ

山形縣櫃澤校尋六　長岡　源助

竹やぶの中に
子どもが
一りはとぼつぼを
うたてゐる

花びら

福岡縣下妻校尋四　森田　實美

花と花と
ゆれあつて
さくらの
花びら
ちら〳〵
ちつた

少年繪師

霜田史光

谷文晁と云へば名高い繪師です。德川時代も終りに近づいた頃、この人は當時日本一の繪師として世にもてはやされてゐました。

『先生、繪を見せて下さい。』

と云つて來たのは近所の柴田五平と云ふ宮師の伜で、今年十二になる龜太郎と云ふ少年です。

『あゝ龜さんか、よし〳〵見せてやる、こつちへお上り。』

年とつた文晁は大へん子供が好きな上に、この龜太郎は殊の外繪が好きでしたから、大層可愛がつてゐました。

『近頃描いた繪が二枚ある。さア御覽。』

龜太郎は眼の前に展げられた二枚の繪をちつと見てゐましたが、ぢきに一枚を手で壓しやつて、殘りの一枚の繪に、魂を打ち込んだかのやうに惚れ惚れと見入つてゐます。

『龜さん、その繪が氣に入つたかい。』

『はい。この遠山の姿は何んと云ふ立派でせう。それに白い雲が見てゐるうちに、何んとなく動き出して來るやうです。先生、これは近頃の傑作ですね。』

名人の文晁をつかまへて、十二の少年がこんな生意氣なことを云ふのですが、文晁はにこ〳〵笑つてゐました。

『わしもその繪は近頃での上出來だと思つてゐる。して今一方の夕暮の川を描いた方はどうだね。』

『失禮ですが、この繪はこちらの遠山の繪から比べると、ずつと劣るやうに思はれます。』

『えらい！』文晁ははたと膝を打つて、

『いつもながら龜さんの眼の利くには恐れ入るよ。實際わし自身もその方はいゝ出來だとは思つてゐない。その繪を描いた時は、少々氣分が惡かつたのだ。』

『道理で先生、いつものやうな生々とした筆先が見えません。』

流石の文晁もこの少年の言葉には舌を卷いて驚きました。今の世にこの少年ほど文晁の繪をよく批評した言葉を、文晁は聞いたことがなかつたのです。

また或日、こんなこともありました。

『どうだね、龜さんこんな繪を昨日書いたよ。』
出されたのを龜太郎が見ると、それは墨の色も鮮やかに富士山が書いてあります。富士は文晁得意のもの。如何にも大きな立派な姿が狹い紙の上に現はれて居ります。然しその上の晴れて長閑な空には一條の糸に索かれて一つの凧が上つてゐて、それには筆太に『虎』と書いてあります。
『先生、これはどう云ふ譯ですか。』
『實はね、昨日さる大名のお屋敷に招かれて行つて席上揮毫と云ふのをやらされてね。然も「富士越の虎」と云ふ題を出されたのだよ。「富士越の龍」と云ふのなら世間にもよくある題で、さう困りもしないけれど、この題にはわしもつく〴〵弱つたね。それたうとう思ひ付いて、このやうな圖柄を書いたのだが、わしの思ひ付を皆讃めて呉れたよ。』
『なるほど。』
譯を聞いても、龜太郎は一向感心しない樣子でした。文晁は龜太郎が屹度喜んで感心もし、讃めもするだらうと思つてゐた所、すつかり當てがはづれてしまつたので、きよとんとした顏をしてしまひました。
『龜さんは、その繪が氣に入らないのかね。』
『えゝ。』
『どうして?。』
『だつて先生、これでは富士越の虎ぢやないではありませんか。富士の上の虎です。』
『成程ね。』
文晁は一本參つてしまひました。
『それぢや、若し龜さんが描くとしたら、どんな圖を書くね。』
文晁も、今度は龜さんを困らしてやらうと思ひました。所が龜さんは少しも考へるやうな樣子もなく、にこ〳〵しながら次のやうに云ひました。
『靜かに晴れた空に上つてゐる凧では富士山を越える道理がありません。私なら大風が起つて、ふつゝりと凧の糸が切れた所を書きます。』
『うゝむ。』
文晁は呻り聲を上げました。そして矢庭に龜さんの膝の上にきちんと置いてあつた手を取つて、
『龜さん、お前は屹度いまに名人と云はれるほどの者になるだらう。』と云ひました。
文晁の云つた言葉ははづれてゐませんでした。この少年龜太郎は後に德川時代から明治へかけて、蒔繪師として世にその名を讃かした柴田是眞であります。
文晁が亡くなつてから、龜太郎は鈴木南嶺と云ふ人のお弟子になつて勉强してゐました。
十七八の頃にはもう立派な腕前になつてゐましたが、まだ世間では認めて呉れませんので、その日の暮しに困る所から、お父さんと二人で兩國吉川町に扇屋の店を、出し自分で扇に繪を描いてそれを賣つてゐました。
或日のこと、お父さんの五平が店番をしてゐますと、立派な服裝をした人が店先を通り掛りましたが、ふと並べてある扇の繪を見てぢつと立止まりました。その人はまるで扇に吸ひ付けられたやうな眼をして見入つてゐました。そしてほつと溜息をつきました。
『少々お尋ねいたしますが、この扇の繪は一體誰方がお描きになつたのですか。』
『へえ、それは何アに、うちの伜が書いたのですよ。』
『あなたのお伜さんが……そして、お幾つですか。』
『まだ乳くさい子供で、今年やつと十七でございますよ。』
『ほゝう、十七……あゝ、このやうな美事な繪を描く人が世に隱れてゐるとは今迄知らなかつた。どうぞ私に一眼そのお伜さんに逢はして下さいません

か。申しおくれましたが、私も矢張繪を畫く國芳と云ふ者です。』

『えッ、國芳先生……』

五平は吃驚してしまひました。國芳と云へばその

頃、武者繪や役者繪で名高い繪師でした。

龜太郎の是眞は、奥で扇の繪を描いてゐましたが、國芳先生と聞いて飛んで出て頭を下げました。

『はい、私がお尋ねを受けました是眞と云ふ者でございます。』

國芳は、また是眞の前に丁寧に頭を下げました。

そして、

『私はこの年になつて、あなたの繪を見てつくづく自分が恥しくなりました。折入つてお願ひがございますが、聞届けて下さいませんでせうか。どうか私をあなたのお弟子にして頂きたいのです。』

この言葉に、是眞もお父さんの五平も、二度吃驚してしまひました。

『先生、お揶揄になつてはいけません。先生のやうな名高い方が、どうしてこんな名も知られてゐない子供に……』

『いや〳〵さうではありません。是眞さんこそ私の

御師匠樣として敬ふべき方です。』

是眞もあまりのことに、いくら斷つても肯き入れませんので、

『それでは先生のやうなお方をお弟子になぞと云ふ譯にはゆきませんから、御一緒に勉强することをお約束申しませう。』

と遂に云ひました。國芳は大層喜んで翌る日からは種々な土產物を持つて來て、是眞について繪を習ふことになりました。そして是眞が恥しがるのも平氣で、年とつた國芳がまだ少年と云ひたい程の是眞を『先生、先生』とよびました。

是眞にとつては生れて始めてのお弟子で、然も當時江戸市中は勿論、國々にまでその名を知られた國芳でしたから、このことが世間に知れ渡ると、柴田是眞の名が一時にぱつと高くなりました。お弟子も次第に多くなりました。

扇屋は急に忙しくなりました。是眞の描いた扇はいくら高い値をつけて置いても、飛ぶやうに賣れて行きました。

或日一人のお客が來て、三千本の扇に朝顔の繪を描いて貰ひたいと頼みました。然も配り物にするので、是非共明後日の午までに仕上げて下さいと云ふ眉に火のつくやうな急な注文です。

『宜しうございます。必ず明後日の午までには仕上げて置きます。』

是眞がさう云つて、お客を歸した後で、

『お前あんな安受合をして、こんなに澤山の扇がほんとに仕上がるかね。』

お父さんは心配さうに云ひましたが、是眞は平氣なもので、笑ひながらお勝手の方へ立つてゆきました。そして太い大根を持つて來て、それを眞中からスパリと二つに切ると、その切口をしきりに小刀の先であちこちと突いてゐます。

何を妙なことをしてゐるのかなと、お父さんやお弟子達が見てゐる中に、是眞はやがてその切口に繪具を塗り、其處にあつた紙の上に捺して見て、また

『あはゝゝ。』と笑ひました。

皆なは首をつき出してその紙の面を見て吃驚してしまひました。紙の上には立派に朝顔の繪が現はれてゐます。然も生々とした葉もあれば、紅や紫の花もあり、蕾もあり、花の中には芯まで美事に描かれてゐました。

この驚くべき思ひ付と、その腕前のすぐれたことには、國芳始めお父さんや外のお弟子まで、舌を卷いて感心しました。

大勢が手傳つてその大根の切口でぼか〳〵捺しましたので、約束の日の午までには、三千本と云ふ澤山の扇に殘らず朝顔の繪が出來上りました。

さきに注文して歸つた、お客はあゝまで約束してもよもや出來はしまいと思つて取りに來て見ると、美事に出來上つてゐましたので、驚き呆れてしまつたと云ふことです。（をはり）

八大地獄めぐり

西川勉

一

赤いネクタイをちよんと締めてすらりとした脊廣服の、素的に勇敢な少年がありました。この少年は晨太郎と云つて、世の中の物事は何に依らず一々知り盡してしまはうといふ大願を立てゝ、先づ第一に地獄探險に出かけました。けれども、何處へ行つても地獄の入口が見付かりませんでした。

『一體、地獄の入口は何處にあるのでせう？』

かう云つてたづね廻つて、日本國中は歩き盡して、朝鮮へまでも出かけて行つたが、誰も教へて呉れる者がなかつたので、遂々支那の天台山へ登りました。晨太郎はくたびれ果てゝ道端のとある石に腰掛けてゐると、向ふからまつしぐらに大きな獅子が駈けて來るぢやありませんか。これには流石の晨太郎も度膽を抜かれてしまひましたが、もと〳〵勇敢な少年でしたから、ぢつと氣を落付けて、素早く道端の大木に攀ぢ登り、眼を据えて、大獅子の方を見詰めてゐました。すると、どうでせう？獅子の脊中に眼の鋭い利巧さうな少年が一人乘つてるぢやありませんか。

『こいつはてつきり、文珠ぼさつにちがひはない。』

この人にたづねなくつちや、世界中歩き廻つたところで、地獄の入口を知つてる者がないかも知れ

ない、と、さう思つたので晨太郎は、大獅子が大木の根元へ近付いた時に大聲でたづねました。

『地獄の入口は、一體、何處にあるんでせう？』

『雪山の一番高い峯の南側、須彌壇の門番にたづねるが好い。支那天台山を守る騎獅寒山と名乘つて行け。』

獅子の脊中の少年がかう答へたのが聞えたと思つた刹那、晨太郎が摑へてゐた大木の枝がぽきつと折れてしまつて、眞逆樣に落つこちました。

二

『あゝ、寒いな。それに大變烈しい風が吹いてるやうだ。』

晨太郎はぶる〳〵つと身震ひして、かつと眼を見開くと、自分が獅子に跨がつて、雪山の眞白い雪の傾斜を、月の光に照されて、暴風のやうな早さでまつしぐらに駈けつてゐるぢやありませんか。天上へ登つて太陽と共に世界をめぐることとるも、地の底を潛つて火山の憤火口の中から飛び出すことも、これより愉快なことぢやないでせう。見る見る中に、廣坂野原も、山角も、谷間も、峯も、背後の方へ飛んで行つてしまふのでした。

『雪山と云へば、支那と印度の境に横はるこのヒマラヤ山脈のことだが、一番高い峯とは一體どの峯だらう？』

晨太郎は、片手で獅子の首筋の毛を摑み、片手を額に翳してのび上つて眺めると、向ふから雪の小山が搖いで來るかと見まがふばかりの眞白い大象に跨がつて、華やかな王子さまかと思はれるやうな上品な人がまゐりました。その白象には鼻の兩側に三本ずゝ、都合六本の牙が生えて居りました。これは普賢ぼさつでした。いつも六牙白象に跨がつてこの須彌山の附近を歩き廻つてゐる佛さまです。支那天台山で晨太郎が獅子に乘つた少年から敎へられた須彌壇の有る峯のことを須彌山と云つて、世界で一番高い山なんです。

『やあ寒山どの、文殊どの、獅子に跨がつて何處へお出かけになります。大變お急ぎの樣子ですな。』

白い六本牙の大象に乘つた上品な王子さまのやうな人が挨拶しました。この時の晨太郎は最早赤いネクタイを締めた、すらりとした脊廣服の少年ではありませんでした。文殊ぼさつの知慧ですつかり姿を隱してしまつて、本當の文殊ぼさつその儘といふ姿になつてゐたのでした。象に乘つた普賢ぼさつが、『寒山どの、文殊どの。』と、名前を二つ並べて呼んだのはつまり、寒山は文殊ぼさつの化身なので、本名と渾名と一緒に呼んだやうなものなんです。本地のぼさつの名前と化身の別名と一緒くたに呼んだ譯です。晨太郎の文殊ぼさつ、又の名の寒山は、普賢ぼさつの挨拶を聞くと、とつさに思はず、から〳〵と高笑ひをいたしました。

『いやこれは普賢ぼさつどの、象に乘つて御散歩ですな。なか〳〵お久し振りでございました。』

晨太郎はかう云つて挨拶を返して一禮すると、すれ違つて、風のやうに駈け出してしまひました。

雪山の一番高い峯の須彌壇は、すつかり氷で出來たお寺の中にありました。この寺の柱などは大理石の圓柱よりも白くて冷めたい天然の氷のまゝでした。こゝの門番の拾得が箒を持つて氷の庭をはき清めてゐると、兄弟分の寒山になつて獅子に乘つた晨太郎が駈け付けて來ました。

『おい、拾得、閻魔大王に面會したい。』

『駄目だ、駄目だ、今日は須彌壇の下の拔穴ははなれないぞ。』

『そりや又どうした譯なんだ？』

『婆婆にとんだ醉狂な少年がゐてね、世界中のことを知り盡したいといふので先づ第一に地獄探險を思ひ付いたんだとよ。だからうつかり人を通すと地獄の秘密が開かれてね、この後人間が地獄を恐がらなくなるかも知れないし、死ぬ時にだつて固い石の衣でも着せて地獄へ行つて燒かれても熱くない工夫を考へ出すかも知れないといふので、大分澤山番人が入口に集まつてるよ。』

『さうかそりや大變なことだな。だが、俺だと判つてゐれば、まさか通さないこともあるまい。』

『さうさな。兄貴のことだから仔細はあるまいね。どれ一緒に行つて俺も口を利いてやらうよ。だがやはり獅子に乘つたまゝで行くのか。』

『さうさ須彌壇の下の拔穴からはひつて、晝とも夜ともつかない薄暗い道が八萬四千里もあるといふぢやないか。まさかとぼ〳〵歩いても行けないだらう。』

『さうだな。』

『それはそうと、閻魔大王には何時頃會ふのが一番好いかな？』

『夜中の十二時から午前二時までは流石の大王も眠つてゐるし、晝の十二時から三十分、晝寢をするといふから、丁度その前が好だらう。なんでも眠つてゐて起きた時には、暫く機嫌が惡いさうだから

な。』

『いや、弟ありがたう。』

晨太郎は文珠ぼさつの化身の寒山の姿をしてゐて、聲までそつくりそのまゝだつたから、みろくぼさつの化身の拾得まで、すつかり欺れてしまつて、易々と地獄街道の拔穴へはひることが出來たのでした。

三

拔穴の道にはひつて見ると、丁度日が落ちて月がまだ出ない前の闇でした。そして人間の聲とも、獸の聲とも判らない唸り聲が聞えました。あたりはしつとりと濕つてゐて、羽蟲か蝙蝠のやうなものが始終、飛び交してゐるやうでした。それは地獄へ行く亡者の群れでした。晨太郎はかうした拔穴道を獅子に乘つて一目散に駈けつて行きました。するとやがていくらか明るい處へ出ました。三途の川原に差かゝつたのです。晨太郎はこの川も獅子の脊中に跨がつたまゝ一氣に乘り切りました。

閻魔法王廳の前に達すると一人の巨人が見張りをしてゐました。この男は色が眞黑で、醜くて齒が曲つてゐて、額のまん中に眼が一つあるだけで、からだの周圍には厚い鐵の輪をはめてゐました。そして、がらんがらんと鐵の棒を引きずつてゐました。

『文珠ぼさつ、閻魔大王に面會。』

晨太郎がかう云つて怒鳴るとかの一目巨人は鐵の棒を投げ棄てゝとんで來て扉を開けて、そこで最敬禮をいたしました。この時、何處かで時計が十二時を打つのが聞えました。閻魔大王が寢室へ退いて晝寢する時間です。そして家來どもゝ御飯を食に行く時間です。かういふ譯で、晨太郎の文珠ぼさつが大王の役所の中へはひつて來た時には、誰もゐませんでした。

『占めたッ。こんなうまい具合に行かうとは自分ながら不思議な位だ。』

晨太郎はうれしくなつて、ちよつと閻魔大王の椅子に腰掛けて見ました。すると、眞正面の大きな鏡の面に赤いネクタイをきりつと締めた、すらりとした脊廣姿の少

年が映つてるぢやありませんか。晨太郎は吃驚して自分の姿を見直しました。紛ふ方もない文珠ぼさつの姿をしてゐます。それだのに、正面の鏡には赤いネクタイと脊廣姿が映つたのでした。

『あゝ、これが淨玻璃鏡といふ鏡だな。閻魔大王がこゝに腰掛けてゐると、亡者がこの前に來て立つて、大王の方に向つて嘘を吐くのだ。すると、それが嘘だといふことが直ぐ背後の淨玻璃鏡に映つてるといふ仕組みなんだ。亡者どもは背後に眼がないから鏡に何が映つてるかさつぱり知らないで、すましてゐるんだ。ところが、閻魔大王はこゝに腰掛けてゐて、亡者どもの云ふことを聞いたり樣子を見たりしながら、向ふの鏡に映つた姿と比べてゐるんだ。だから、大王を誤魔化すことなんか、とても思ひも寄らないことだ。あゝ、恐しい。』

晨太郎は閻魔法王廳の設備が餘りうまゝ出來てゐるので恐しくなつてしまひました。こんな處にまご〳〵してゐて、誰かに淨玻璃鏡の面の赤いネクタイと脊廣服を見

付けられて、こいつは文珠ぼさつの化物だといふことになつたらどうしよう？　直ぐさま大地獄へ投り込まれてしまふかも知れない。

――地獄へ投り込まれることはかまはない。もと〳〵探險に來た位だから、却つて望むところだけれど、このまゝ投り込まれたのでは、普通の亡者どもと同じやうに地獄の火で燒かれてしまふにちがひない。さうなつてしまつちや婆婆へ歸つて地獄の有樣を知せることが出來ないから、折角の苦心も水の泡となつちまふし、困つたことだと思つて、ひよいと机の上を見ると、小判が一枚ありました。掌に取り上げてよく眺めると、その面には次のやうな文句が彫り付けてありました。

地獄に行つて火に燒けず
突棒、刺叉、劍に傷付かず
鬼どもを自由に使へる割符！

『さあ、これだ。これさへ持つて行けばちつとも恐いことはない。』

晨太郎はかう思つて、この小判型の割符をふところに入れて、閻

魔大王の椅子を離れて、地獄の一丁目さして、どん〳〵駈け出しました。

四

晨太郎が一番初めに探險したのは等活地獄といふところでした。これは地獄の中でも、一番樂な處で、割合に罪の輕い罪人が行くところなんです。地獄は、百三十二あつて、その中でも大地獄は八つしかありません。この八つの大地獄にはそれ〳〵十六づゝ別所の小地獄があるのです。だから、八大地獄と、別所の小地獄百二十八と合せて、都合百三十二となるわけです。等活地獄は八大地獄の中でも、一番樂な地獄です。

晨太郎は最初にこの地獄へはひつて行つて見ると驚きました。片片の方では、罪人と罪人とが摑み合ひをしてゐます。互に爪を磨ぎ立てゝ相手の顏を引掻いたり、眼玉を突つ付き合つたりしてゐます犬と猿とは仲が惡いものだといふけれど、こゝの罪人同志ほど仲が惡いことはないでせう。まるで獵師と鹿の仲のやうです。かうして罪人同志はお互にからだの肉が裂けて、血が流れて、骨ばかりになるまでも爭つてゐます。獄卒は鐵の棒を持つて罪人の頭のてつぺんから足の爪先まで打ちのめして小砂のやうに打ち碎いてゐます。また非常によく切れる庖丁で罪人を切り刻んでお刺身のやうにしてゐる獄卒もあります。ところが、一たび涼しい風が吹いて來ると、喧嘩して骨ばかりになつたからだも小砂のやうに、打ち碎かれたからだも、お刺身のやうに切り刻まれたからだも、すつかりもとの通りに癒るのです。が、癒つたかと思ふと、また罪人同志が喧嘩を始めて骨ばかりになつても止めないし、獄卒は獄卒で、罪人のからだを小砂のやうに打ち碎いたり、お刺身のやうに切り刻んだりするのです。そして涼しい風が吹いて來ると、またもとのからだに歸つて同じことを繰返すのです。鳥を無暗に殺したり、犬猫その他の獸を殺したりして無用の殺生を行つた者は、この地獄に落ちて一兆五千

六百〇三億一千二百五十萬年の間苦しまなければならないのです。なぜこんなに長い年月苦しまなければならないかといふと「人間の五十年を四天王天の一日一夜として、その壽命五百年、四天王天の壽命をこの地獄の一日一夜として五百年間」苦しまなければならないといふのだから、これを人間世界の年數に計へ直すと、潤を省いても、一兆五千六百〇三億一千二百五十萬年間になるのです。なんと恐しいことぢやありませんか。

それからこの地獄には四方の門の外に、十六の別所の小地獄があります。その一つは屎泥所と云つて、非常に熱い糞と泥とが一杯あつて、その中に銅鐵の嘴の有る蟲がかゝ限りなく住んでゐるんです。罪人どもはこの中にゐて、この熱い糞を食べてゐます。ところが、銅鐵の嘴を持つた蟲どもが集まつて來て、一時にこの罪人の肉も骨も食つてしまふのです。ここへは鹿を殺したり、鳥を殺した者が落ちるのです。こゝに落ちた罪人は何萬億兆年經つても救はれることはないのです。

晨太郎が例の小判型の「地獄に行つても火に燒けず、突棒、刺又劍に傷付かず、鬼どもを自由に使へる割符」を持つて、等活本地獄から、この別所の屎泥所へ來て見ると、そこで一人の獵師に會ひました。かれは生きてゐた時、ある山奥で九色の鹿を見付けた、といふよりはその鹿のために生命を救はれたにも拘らず、そして九色の鹿が自分のゐるところを誰にも云つて呉れるなと賴んだにも拘らず、國王に訴へてこの鹿を討ち取りに行つたので、その罪のためにこの地獄へ落ちたのでした。

『まつたく私は谷川に溺れて殆んど死にかかつてゐたところをその鹿に救はれたのでした。だから、いくら王さまが褒美を呉れるといふお觸れを出したからと云つて、私が訴へて出て、その上討ち取りに向ふなどゝいふことは、出來なかつた筈です。かういふ地獄の苦しみを受けることも、身から出た錆で仕方がないことです。』

彼は晨太郎に向つてかう云つて悔ゐてゐました。（つゞく）

木兎になつた五兵衛

（推薦）

長谷川好延

ある村に、別にきまつた姓もなく、昔から五兵衛ドンと呼ばれてゐる家がありました。それでも五兵衛ドンと云へば、村中はおろか、どこへ行つても知らないものはありませんでした。

この家は代々、餌差しと云つて、長い〳〵竿の先に鵠をつけて、眞夜中、小鳥どもが巣の中や、こんもり茂つた葉かげなどで、ぐつすり寝込んで居る時不意に鵠竿で差して捕へ、そして町へ賣りに行くことを稼業として居りました。

五兵衛は、女房には二三年前に死に別れて、今では同じ名前の息子の五兵衛と、たつた二人で淋しく暮らして居りました。

ところが不思議なことには、代々の五兵衛は、みんな、畫は一寸も眼が見えませんが、夜になると、猫のやうに眼が利いて、暗闇でも針穴に糸を通す位のことは何んでもありませんでした。ですから、暗闇で鳥を差すには、極く好都合でありました。

五兵衛の家は、畫間と夜と取りかへて、畫間村の人たちが働いてゐる間は、家中ぐつすり寝込んで居ました。その爲に五兵衛の家には、よく明るい畫間泥棒が入りました。

寺の暮れ六つが鳴ると、五兵衛の家では皆んな起き出します。そして五兵衛は毎日のやうに、長い鵠竿を肩にして、森の方へ出かけました。

こんな日ぐれ方、野良から、仕事を終つて歸つて來る百姓たちに會ふと、きつと、五兵衛は『お早やう！』と挨拶いたしました。でも、五兵衛の事を知つて居る人は、別に不思議とも思はなければ、笑ひもしませんでした。毎朝明け方近かくなると、五兵衛は、何十羽ともなく、いろ〳〵な鳥を網に入れてそれを背負つて森から出て來ました。そして町へ行つて、澤山のお金とその鳥をとり換へました。

ところが、生れつき、氣質のやさしい息子の五兵衛はお父さんのやうに、眠つて居る鳥を捕つて殺すことは、可哀さうで〳〵、たうてい出來ませんでした。併し、親父の五兵衛は、息子をやつぱり、自分のやうな餌差にしようと思つて、叱り付けては、無理矢理に森へやりました。

子息の五兵衛は一日中かゝつても、たゞの一羽どころか、羽一枚持つて歸ることは出來ませんでした。その度ごとに父親の五兵衛は、火のやうになつて叱りとばしました。それでも子息の五兵衛は、どうしても小鳥一羽差す氣にはなれませんでした。

今日も亦森に來た息子の五兵衛は、鵠竿を投げ出して、大きな木の根方に腰をおろして、死んだやさしいお母さんのことを思ひ出して、こつそり泣いて居ました。

すると、『五兵衛さん〳〵。』と木の後から呼ぶものがあります。びつくりしてふり返つて見ると、みすぼらしい、長い鬚の茫々生えた乞食の老人が、につこり笑つて、五兵衛に申しました。

『私は、すつかりお腹が空いて、もう、どうにも歩るけないのです。誠にすみませんが、あなたのお腰の辨當をわけては下さるまいか？』

すると、五兵衛は『上げますとも〳〵。』と云つて、腰の辨當を乞食の老人にやりました。乞食は、うまさうに、もらつた辨當をたべ終つて、

『おかげさまで、生き返つた思ひがします。ところで一體あなたは、何を考へて泣いて居なさる。はゝあ、亡くなつたお母さんのことを思つて居なさるのぢやな。うむ、では、お辨當のお禮に、この鈴蘭の種子を上げませう。これを庭に蒔いて、朝夕水をやると美しい花が咲きます。そして不思議なことにはこの鈴蘭は、美しい聲で唄をうたふのです。』と云ひました。

五兵衛は吃驚して、『えッ。唄をうたふ！　一體、なんの歌ですか。』と尋ねました。

『それは、お前のお母さんの聲で、やさしい、お前が赤ん坊のとき、お母さんが唄つて下つた子守唄ぢや。』

『ほんとうですか？』

かう云つて五兵衛は暫らく、ぼーとして居りました。すると老人は、

『本當だとも、〳〵。さあ早く家に歸つて蒔きなさい。』と云つて、どん〳〵森の奥の方へ行つてしまひました。

息子の五兵衛は、狐にでもつまゝれたやうな氣がいたしました。が、手には銀色の鈴蘭の種子が握られて居ました。五兵衛は喜びのあまり、麟竿も忘れて、家に飛んで歸り、そつとお庭の片隅に蒔いて、朝夕水をやりました。

父親の五兵衛は、息子の怠け者には、つく〳〵愛想をつかして、別に叱りもいたしませんでした。

空が明るく澄み渡る頃になりました。息子の五兵衛が、丹誠して育てた鈴蘭は、美しい花をつけました。お山の上の星が、キラキラと光ると、この美しい鈴蘭は、銀の鈴を振るやうな、なつかしい五兵衛のお母さんの聲で、面白い子守唄をうたひ始めました。息子の五兵衛は、どんなに喜んだことでせう。

毎晩、お山の上の星がキラキラと輝くと、銀色の美しい鈴蘭の花は、やさしい子守唄をうたひました。

唄をうたふ鈴蘭の評判は、國中に擴まりました。そして立派な、ある殿さまの耳にまで入りました。

父親の五兵衛は、鈴蘭の唄を聞くたびに、『うるさい〳〵。』と口癖のやうに云ひました。

ある晩のこと父親の五兵衛は、息子の五兵衛を、また、森へ餌差しにやりました。

どうかして、唄をうたふ鈴蘭を手に入れ度いと思つた殿樣は、とう〳〵使者を五兵衛の家にお遣はしになりました。

父親の五兵衛は、息子の留守を幸ひに、唄をうた

ふ鈴蘭を高い値段で、殿様の使者に賣つてしまひました。

無理矢理、やつと森へ出かけて來た息子の五兵衛は、お山の上にキラキラと輝く星を見たとき、『もう鈴蘭が唄ふ頃だ』と考へました。

息子の五兵衛は、又こつそり森から家の庭先にかへつて來ました。見れば鈴蘭の影も形もありません。どんなに五兵衛は驚いたことでせう。もう鈴蘭の唄も聞く事が出來ません。

息子の五兵衛は、悲しみのあまり、どこを的ともなく、フラ〳〵森の方へ、泣きながら出て行きました。

森の奥には大きな、銀色をした美しい池がありました。息子の五兵衛が、この池の邊りまで來た時、水の面から銀色の美しい道が、今落ちやうとして居る月の世界へ延びて居ました。そして小さい二羽の金絲鳥に引かれた、七寶の美しい車が、息子の五兵衛をおむかひに來て居りました。

どこかで美しい、なつかしい鈴蘭の聲で、

『早くお車を召せ。お母さまの居らしやる御殿へご案内申します。さあ、早く、お車を召せ！』と云つて居りました。

息子の五兵衛は、美しい唄の聲に引かれて、銀色をした池の中へ歩いて行きました。池は段々深くなつて來ました。やがて五兵衛の首まで水が浸つてしまひました。併し、五兵衛はなほも美しい唄の聲に引かれて、池の中へ進んで行きました。

もう月は落ちて、森はまつ暗になつてしまひました。幾日たつても息子の五兵衛は、家には戻りませんでした。

ひとりぼつちで淋しくなつた父親の五兵衛は、息子を探すために、森中を駈けめぐりました。

しかし影も形もありません。時折、

『ここッ、ここッ』と云ふものがありますから、聲のする方へ行つて見ると、今度は後の方で、

『ここッ、こッつ』と呼んでゐます。また聲のする方へ行つて見ると、今度は何處かで、

『阿呆！　阿呆！』と云つて居ります。

すると、其處へ一人の乞食が出て參りました。

『あなたは何を探してゐらつしやる。』乞食はかう申しました。

『うるさい、乞食爺奴！』父親の五兵衛は叱りつけました。

『わしは、そなたの息子の居るところを、知つて居るのぢや。若しそなたが、わしのするとほりにするなら、教へて上げよう。』乞食はかう云ひました。

『いゝとも、するよ。だから教へて呉れ。』

『ぢや教へてやる』

かう云つて乞食は『ケ、ッ』と咽喉の奥で聲を出しました。父親の五兵衛も『ケ、ッ』とその通りに咽喉の奥から聲を出して眞似をしました。

次ぎには、兩手を右左に上げて、二度ばかり風を切つて、ぴよん〳〵跳ね出しました。すると不思議、不思議、乞食と五兵衛の二人は、見る〳〵鳥になつてしまひました。

そして鳥になつた乞食は『阿呆！』と云つて、どこかへ飛んで行つてしまひました。

可哀想に、親父の五兵衛は鳥になつたまゝ、暗い晩、方々の森や林を、

『五兵衛々々』と云つて、息子の五兵衛を探し歩かねばなりませんでした。

× × ×

皆さんは暗い晩、田舎の杜で、『ゴヘイー、ゴヘイー』と啼く、木兎の聲をお聞きになつたことはありませんか。（をはり）

（作者住所　東京市本郷區動坂町五七）

ワーシャの出世

水野光一

一

ロシヤのずつと北の方に小さな町があります。こゝでは日の暮れるのが早くて、町の人たちは、ながい夜を送るのに骨が折れました。

で、町の人たちは、晩になると、樂器を鳴らしたりダンスをしたりして、すこしでも夜長の退屈をまぎらさうとするのです。

ワーシャは、この町の、ある靴屋の子供だつたのです。

ある晩、ワーシャの家では、お父さんとお母さんとワーシャと親子仲よく、晩の御飯を食べてをりました。するとテーブルの上にかかつてゐる籠の夜鶯が啼きだしました。けれどもいつもとはちがつて、それはそれは悲しい聲で啼くのです。

お父さんは眉をよせて、

『あゝ、何ていやな啼き方をするんだらう。私はこんな悲しい聲をはじめてきいた。この夜鶯が、何といつて啼いてゐるのか敎へてくれる人があれば、私は大切にしてゐるものをみんなやつてしまつてもいゝ。』

と、言ひました。

夜鶯はまた啼きつゞけるのです。

ワーシャは、お父さんの言葉をきくと、大へん悲しさうに、下を向いてしまひました。

『ワーシャ、お前わかつてるのかい。』

不思議に思つて、お父さんがたづねました。

『えゝ、私にはよくわかります。』

『ぢや言つてごらん。』

『でも……』

と、ワーシャはなか〳〵言ひません。

『ワーシャ！　知つてゐることを隱すものではありません。お父さんがあゝ仰言るのだから、言つておしまひなさい。』

こんどは、優しいお母さんのすすめです。しかたがあトません、ワーシャは泣きながら言ふのでした。

『鶯はかう言つてゐるのです。いまに私が偉くなつて、お父さんやお母さんが家來になつて仕へる時が來るつて……お父さんが水を汲んでくると、お母さんが手拭で私の足を拭かなければなるまいなんて……』

これを聞いた兩親はびつくりして、いろ〳〵相談いたしました。

『この子には惡魔がついてゐるにちがひない。だから、可哀想だけれど家を追ひ出してしまはう。』

お父さんはかう言ひ出しました。お母さんは、大へん悲しんで、それだけは許してやつて下さい。と

頼みましたが、お父さんはきゝ入れないのでした。

お父さんは、小さい舟を作りました。そして人の寝静つたある晩よく眠つてゐたワーシャを乗せて、廣い川へ流してやりました。

お父さんもお母さんも、涙ぐんだ目で、いつまでも舟の流れる方を見つめました。どこかの家で、バラライカを彈く歌聲が聞えてまゐりました。

お父さんとお母さんは、さびしさうに家へ歸つて行きました。が家へ入つて驚いたことは、さつきまでゐた籠の鶯がどうして脱けたのかゐなかつたことです。

『妙なことだ。』

お父さんは首を傾げて考へ込みました。

その頃、鶯は闇の中をとんで、ワーシャの乗せられた舟を追つて行くところでした。星一つない眞暗な晩でしたけれど、鶯には、舟の行方がちやんとわかつてゐたのです。

舟がひろい海へ出た時に、鶯はやうやく追ひついて、すや〳〵眠つてゐるワーシャの肩にとまりました。

一晩中舟は波に搖られてをりましたが、そのうちに東の空がぼうつと明るくなつてきました。夜明けです。太陽がきらきらと波の上に金の紛をふりまきました。白い雲のふわりふわりと流れるやうすは、勢のいゝ馬が、朝になつたのを喜んで走つてゐるやうでした。

ワーシャはぽつかり目をさまして、あたりを眺めました。昨夜寝るときに着た柔い布團は、いつの間にか板に代つてゐたのです。大きなお家はせまい舟に代つてをりました。

『お父さんやお母さんが、何かお考へがあつてなされたのだ。』

賢いワーシャは、お父さんお母さんを恨まうとはしません。

『ワーシャさん、私がついてますよ。安心してらつしやい。』

肩にとまつてゐた鶯が、かう言つて慰めました。

『あゝ、鶯よく來てくれたね。有難う。』

ワーシャはにつこり笑ました。

鶯は歌を歌ひはじめました。その聲が美しかつたので、騒ぎやの波もおとなしく聞き惚れました。あちらこちらに飛んでゐた鴎もいつか集つて、舟をぐるつと取り卷きました。そして羽音をゆるやかにして歌と調子を合せて遊ぶのでした。

まもなく、向ふから、大きな帆を張つた船が一艘、まつすぐに走つてきて、もすこしでワーシャの舟にぶつからうとしましたが、船頭は小舟の中にゐるワーシャを見つけました。

『おや、子供がゐる！』

船頭はこれはをかしいと思ひました。そこでワーシャゐ自分の舟に乗せてから、

『どうしたのだ。』

と、わけをたづねたのでした。ワーシャは昨夜からのことを詳しく話しました。

『よし〳〵、ぢや、これから私がお父さんになつて可愛がつて上げよう。』

と船頭は言ひました。

『さう。』

ワーシャは賢さうな目をくるつとして、

『お父さん！』

と呼びました。

『あいよ、何だい。』

船頭が答へました。そして新らしいお父さんとワーシャは、一緒ににつこり笑ひました。

二

次の日のことです。

ワーシャは、船頭……いゝえ、新らしいお父さんに、

『暴風雨が來るさうです。帆も帆柱も折れたり破れたりすると鶯が言つてをりますよ。どこかで船を停めませう。』

と、言ひました。

『何あに、そんなことはない。』

と、お父さんは空を見上げながら返事をするのでした。

『それどころぢやない、早く向ふへ着かなくちや……』

で、船をとめるどころか、いつさう早く走らせてをりました。ところが晩になつてみるとどうでせう。

空には眞黑い雲がもく〳〵と頭を持ち上げたかとみるまに、ずうつといつぱい擴がつてしまつたのです。どつどつと物凄い風が吹きまくつて、雷が鳴りだしました。大粒な雨が激しい音をたてゝ、海の上へ叩きつけました。だから、海は怒つて荒れ狂ひはじめたのです。山のやうな波のうねりが、風の後を追ひかけました。

ワーシャの乘つた船は、小さい木の葉よりもみぢめにゆられます。帆は破れて飛んでしまひ、帆柱はポキンと折れて、どちらもう役には立ちません。

ワーシャと新らしいお父さんとは、しつかり抱き合つて、船の底でごろんごろんと轉つてをりました。

暴風雨は、翌朝になつてすつかりやんでしまひました。そして、空も風も波も仲直りして、小さい

聲で話し合ふのでした昨夜のまゝなのは破れた船ばかりでしたけれど、それも、新らしいお父さんが一生懸命につくろつたので、どうやら航海をつゞけることだけはできるやうになりました。

その日、ワーシャはきふに、

『お父さん、いま鶯が言ひましたよ。海賊船が十二艘おしよせてくるそうです。』

と言ひました。

こんどは、お父さんも、ワーシャの言葉を嘘だとは言ひません。

『それは大へんだ。』

と、すぐさま島影へ船を隱して樣子を見ることにしました。まもなくやつてきた十二艘の海賊船は、船の隱れてゐるのを知らずにどん〳〵走つて行つてしまひました。

『なるほど、お前は偉い子だ。』

新らしいお父さんはすつかり感心しました。

『いゝえ。鶯が教へてくれたのだから、ほんとは鶯が偉いのです。』

と、ワーシャは答へました。

それから都へつくまで、暴風雨もなかつたし、海賊船も姿を見せない、いゝ日和ばかりがつゞきました。

三

都には王樣のお住みになる立派な宮殿があります。屋根は金、柱は珊瑚、床は眞珠でそれはそれは目の眩むほど美しいものです。

ところが、この宮殿にはいやなことがありました。それは氣味の惡い聲で、晝も夜も啼きたてる烏が二羽、いつも窓の側を離れないことでした。

王樣は、この烏が何よりお嫌ひで、どうかして追ひ拂ひたいと、いろ〳〵な手段をなさいましたが、とても駄目でした。そこで町中へ次のやうなお布令を出しました。

御殿の窓を離れない二羽の烏を追ひ拂ふものには次の褒美をやらう。

一、領地を半分

二、お金を欲しいだけ。

但し、失敗した者は町へ返さない。

さあ、これを見た國中の人たち、中でも腕自慢の獵師たちは、大喜びです。

『いよ〳〵運が向いてきたぞ。私こそその烏を追ひ拂つて、どつさり褒美を貰はう。』

かう考へて、宮殿へ申出る者が、毎日三人も五人もありました。けれども一度宮殿へ行くとそれきり二度と町へ歸つてくる者はありません。可哀相に、町の噂ではみんな首を斬られてしまつたのだらうといふことでした。

ワーシャはこの話をきくと、

『どうぞ私を宮殿へやつて下さい きつと惡い烏を追ひ拂つてまゐります。』

と、新らしいお父さんに賴みました。

お父さんは首を横に振つて、

『可愛いワーシャ！ おやめ。馴れた獵師でさへ出來ないのだからね。お前のやうな子供にはとてもやれる筈はない。もし出來なかつたらお前、首を斬られてしまふつていふぢやないか。そんな危いことはやめてくれ。』

心配さうに引きとめるのでした。けれどもワーシャは言ひました。

『お父さん、私には鷲がついてゐます。どんなことがあつても、きつとよい智慧をかしてくれますよ。』

しまひには、お父さんも根氣負けがして、

『ぢや、行くさ。けれどどんな不幸があつてもお父さんは知らないよ。』

と、しかたなく願ひを許しました。

ワーシャはさつそく宮殿へ出かけて行きました。そして烏のとんでゐる窓を開けて貰つて、ぢつと見つめてをりました。

やがて、ワーシャはにつこりして、王樣に申上げるのでした。

『王樣、ごらん下さい。あの烏は雄烏と雌烏です。そして子烏は父のものか母のものかといつて爭つてゐるところです。ですから、王樣が一言仰言つてやればよろしいのです。烏は安心してどこかへ行つてしまひませう。』

そこで、王樣が、

『それは父のものだ。』

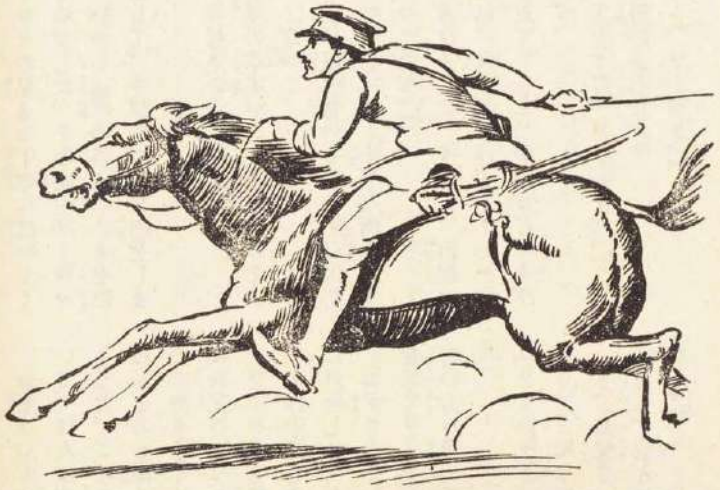
と、大きな聲で仰言いました。
その聲が終るか終らないうちに、一羽の鳥は右の方へ、一羽は左の方へ、後を見ずに飛んで行つてしまひました。かうして王樣が何よりお嫌ひになつた鳥は、もう宮殿にゐなくなつたのです。
美しい宮殿の窓には、氣味のわるい鳥の代りに、暖い日がさしてカナリヤが囀り出しました。

四

王樣はひどく御滿足でした。そしてワーシャを養子にしたいと仰言つて、船頭の新らしいお父さんに相談なさいました。新らしいお父さんは、ワーシャの出世を喜んで、

『この子の出世です。よろしくお願ひいたします。』
と申上げたのでした。
それからはワーシャはもう王子です。毎日夢のやうに幸福な日を送つてゐましたが、あるとき王樣に向つて、
『國々の人民のやうすを見たいと思ひますから、私を旅にやつて下さい。』
と、お願ひしました。
『行つておいで、途中を氣をつけるために、兵士をつけてやらう。』
王樣が仰言いました。
『いゝえ、私は一人でまゐりたいのです。どうぞさうして下さい。』
ワーシャはかう言ひました。そしてたゞ一人だけで、宮殿の裏門からそつと脫け出したのでありました。
旅の日が幾日か續きました。ある夕方、田舍の小さい町についた王子は、みすぼらしい宿屋へ入つて行きました。
宿屋では、王子の美しい服裝を見てびつくりしましたが、これはきつと偉い方に違ひない、と思つて大切にもてなしました。
王子はそんなことに氣がつきません。大きな聲で、
『顏を洗ひたいから水を吳れ。』
と言ひました。
『はい、はい。』
宿屋の亭主がおどおどしながら水を運ぶその後から、お上さんがうやうやしく手拭を捧げてきて、

ワーシャの足まで丁寧に拭いてくれるのでした。その時、ワーシャは、むかし鶯の言つたことを思ひ出して、さびしさうな顏をしました。
『どうなさいました。』
宿屋の亭主がかう訊ねたので、王子は答へて、
『亭主、私は昔のことを思ひ出したのだ。私はもと小さな商人の子供だつたので。』
と言ひました。すると、宿屋の亭主は、穴の明くほどワーシャの顏を見てゐましたがいきなりとびついて、
『ワーシャだ。ワーシャだ。』
と叫びました。
『あゝ、ワーシャ。』
お上さんも、ワーシャにとびついて、ぼろぼろ泣き出してしまひました。この二人は、ワーシャのほんとのお母さんお父さんだつたのであります。
『お父さん、お母さん。』
ワーシャも泣きました。
それからしばらく經つて、宿屋は戸をしめてしまひました。
お父さんとお母さんは旅の仕度をしてワーシャをまん中にして、都の方へ急いで行くのでありました。
『ワーシャといつしよにゐられるなら、どんなに使はれてもいゝ。』
と、お父さんは言ひました。
『私も、喜んで足を拭いてやりませう。』
と、お母さんは言ひました。
『いゝえ。』
と、ワーシャが言ひました。
『私はそんなことをして頂かなくてよろしいのです。たゞ御一緒に暮して行ければ、こんな嬉しいことはありません。』
ワーシャとお父さんお母さんが歸つたとき王樣は大へんお喜びでした。
そして宮殿の金色の屋根はいつそう輝きました。珊瑚の柱も光りました。
けれどもたゞ一つ不思議なことは、鶯の籠が空つぽになつてゐたことです。どこへ飛んで行つてしまつたのでせう。それきり姿を現さないのでありました。（をはり）



西瓜の間違ひ

久米紘一

一

日露戰爭當時のお話です。歩兵第×聯隊、第×中隊に、田中と云ふ少尉が居ました。少尉は七月十四日、命を受けて、朱家堡子東方高地の砲兵陣地偵察に出かけました。

出發に際して少尉は、道案内として十二三歳の支那少年を雇ひ入れました。少年の名は李逵と云つて、見るからに怜悧さうな顔つきをしてゐました。

少尉と李逵とは、其日の夕方、疲れ切つて一つの村に辿り着きました。見ると、村はづれに、一軒の見窶らしい百姓屋があつたので、其處へ行つて一晩泊めて貰ふ事にしました。

李逵が門に立つて案内を乞ふと、中

から、こんな汚い家に似合はぬ、逞ましい立派な支那人が出て來ました。支那人はジロ〳〵二人の樣子を見て、如何にも迷惑さうな顔をして居ましたが、途中で何を思ひ返したか、急ににこ〳〵しだして、丁寧に二人を招じ入れ、家の一番奥の室を寢室に與へました。

二人は夕飯を濟ますと、直ぐ室の隅にアンペラを敷いて、ごろりと横になるが早いか、晝間の疲れでぐう〳〵高鼾をかいてねてしまひました。

眞夜中の事です。李逵は、ふと厠に行きたくなつたので、起き出して戸の外へ出ました。

外は眞晝のやうな月夜でした。家の廻りは一面の西瓜畑で、大きいのや小さいのや、數へ切れぬ程の西瓜が、ごろ〳〵と轉がつて居ました。

李逵少年は頭の中で、明日の燒けつくやうな炎熱と、長い〳〵道程とを思ひ浮べました。そんな時、この西瓜の一切れは、どんなに有難いだらう！と思つたので、そッと一番輕さうな奴をもぎ取つて、青い風呂敷に包みました。それからその風呂敷を提げて家の中へ這入り、土間の隅へ置きました。

ところが、其時、土間には、もう一つの何か西瓜でも包んだやうな、丸い風呂敷包みがあつたのに、李逵は少しも氣が附きませんでした。

二

さて李逵は、土間に西瓜を置いて、少尉の室に引かへして來ましたが、突然、あッと驚いて、其處へ棒立になつてしまひました。

どうでせう。

夜目にも光る銃劍を持つた五名の敵兵が、ぢいッと室の中を窺つてゐるではありませんか。どうして少尉が此處に居るのを知つたのでせう。ことによるとあの支那人が密告したのかも知れません。兎に角、この儘にして置いては少尉の命が危いと思つたので

李逵は、つと外へ走り出て、小石を拾つて來ました。
小さい時は朝鮮で育つたので、石投げには實に妙を得て居ました。少尉の枕元の洋燈を目がけて投げ附けた石は、あやまたず命中して、室内は眞暗闇となりました。
ガチャ〳〵と云ふ銃劍の響きが闇を衝いて響きました。李逵は、すかさず室内に走り込んで、何事かと惑つてゐる少尉の耳もとに叫びました。
『敵兵です。多勢ですから手むかひしたら損です。』
そして踏み止まらうとする少尉の腕を引張つて、遮二無二、裏の黍畑の中に連れ込みました。
『待て、待てと云つたら！　逃げるなんて事があるか。敵兵がなんだ。持てと云つたら。』
『駄目ですよ。貴方が幾ら強くたつて、向ふは五人ですからね。それにまだ他に、どれだけ居るか知れやしません。とにかく、今見つかつたら損です。』
李逵はかう云つて、どん〳〵黍畑の奥深く這入つて行きました。
ところが、ものゝ二分も來た頃、少尉は突然立止つて、
『しまッた。大變な事をした。』と云ひ出しました。
李逵は驚いて、
『どうしたんです。』と云ふと、
『軍刀を忘れて來たんだ。あの室に……』と如何にも困つたやうです。
『なあーんだ、軍刀ぐらゐ。命には代えられませんよ。棄てゝおしまひなさい。』
『馬鹿を云ふな。あれは國を出る時、父親が手づから渡して呉れた先祖傳來のものだぞ。あれを失くしたら、凱旋したつて、どうして父親に會はす顔がある！』と云つて聞き入れません。
李逵は中々度胸のある少年だつたと見え、この時、『ぢやア、私が行つて取つて來ませう。』と云ひ出しました。少尉も自分が行くより、李逵をやつた方が

いゝと思つたので、
『さうか。ぢや濟まないが取つて來て呉れ、もし無事に取りかへせたら、何でもお前の好きな物を褒美にやる。』と、云ひました。
『なに、褒美なんか要りませんよ。ぢや、一寸行つて來ますから。』
と云つて、李逵は家の方へ引歸して行きました。

三

李逵は、例の家の所へ來ると、幸ひ誰も居ないと見え、ひッそりとして居ます。明け放された戸口からは、月光が差入つて、室の中の物を、朧氣ながら見わけさせました。李逵はこつそりと忍び入つて、室の隅に立てかけてあつた軍刀を取り、又、靜かに外へ出ました。
ところが此時李逵はフト、先刻盗んで來た西瓜の事を思ひ出しました。
『さうだ。ついでにあれも持つて行かう。』
と思つたので、土間の隅を探すと、例のまるい風呂敷包みがありました。
李逵は、確かに自分の包みだと思つて、それを提

げて家を出たのでしたが、實は李逵のでは無くて、前から此處にあつた、別の包みだつたのです。
そんな事を李逵は、ちつとも氣が附きませんでした。
『なんだか重いな。』と思ひましたが、別に氣にもかけないで、少尉の所へやつて來ました。
『やア、ありがたう。ありがたう。』少尉は軍刀を受取つて大喜びでした。
二人は、それから首里堡の方へ向つて、無茶苦茶に黍畑の中を進んで行きました。
やがて、次第に東の空が白んで來ました。ところが此時、どうしたものか、李逵の歩みが、ともすれば遲れがちになりました。
『李逵。どうしたんだ。しッかりしろ。……おや、なんだい。その丸い大きな包みは?』少尉は此時、ふと氣が附いて、かう尋ねました。
『これですか。こりや西瓜です。さつきの家で取つて來たんですがね、なんだか馬鹿に重くて、歩くのが厭になつちやつた。』
『なに、西瓜? そりやいゝ物を持つて來た。俺は喉が渴いて困つてゐるんだ。早速、食べようぢやないか。』
少尉はかう云つて、自分で包みの結び目を解ましたが、突然、『あッ』と云つて目を瞠りました。
『どうしたんです。おや、妙な西瓜ですね。』
『馬鹿。こりや西瓜ぢやない。爆裂彈だ。』
少尉は吐出すやうに、かう云ひました。
全く、包みの中は、形こそよく似てゐたが、紛れもない爆裂彈だつたのです。
『李逵。貴樣、これを何處から持つて來た?』
『さつきの家の土間からです。』
少尉の眼は見る〳〵輝やきました。
『あの支那人の奴、やうすが變だと思つたが、こんな物を持つてゐる處を見ると、全く容易ならん奴だぞ。』
少尉は思ひました。

『さうだ、一刻も早く司令部に知らさなくちや、どんな事になるか知れやしない。』
そこで少尉は近くの百姓屋で馬を借りて、一散に朱家堡子の方へ走つて行きました。
全く危い所でした。その日の晝方、李逵少年は、自分の西瓜を包んだ風呂敷包みを、司令部附近の積藁の中で發見しました。その積藁の持主を嚴しく詮議すると、思つた通り、昨晩の怪しい支那人でした彼はまだ、自分の家の床下に、多數の爆藥類を隱匿して居て、それで以て鐵道の爆破を企てゝゐたのでした。
李逵少年は、皆んなから、豪い〳〵と讃められて、こ〳〵して喜びました。司令部からは褒美として馬一頭を下附されました。田中少尉は又、軍刀の御禮として、自分の拳銃を贈りました。
李逵は、銃を腰にさし、馬に跨つて、バカバカと大得意で、自分の家へ歸つて行きました。
（をはり）

童謡

野口雨情選

（子供篇）

夕焼とんぼ（賞）

千葉縣　吉原　平

夕焼とんぼ　すーいすい
夕風小風で　すーいすい
行つたり來たり
　すーいすい
眼がねですまして
　すーいすい
あしたのお天氣
どうであろ。

山の一つ家（賞）

兵庫縣　伊藤　登

山の一つ家
しじかだな
山の一つ家
すゞしいな
すゝきがボーボー
生えてゐよ。

お花畑

秋田縣　岩谷ミヨノ

みつ蜂
ブン〳〵
花
ブン〳〵
お花畑は
お祭だ。

冬の夜

群馬縣　荒川　けい

赤いげたはいて
月夜の晩に
表を走りや
からこん〳〵
げたがなる。

乳草

神奈川縣　中里　政一

お乳の出る草生えてゐる
白いお乳がたんとでる
うさぎの親なし
とんでこい
お乳があきるほど
くれてやろ。

すずめ

千葉縣　澁谷　保德

家の前のかしの木に
三羽のすずめが
ちゆう〳〵〳〵
人がいけば　とぼけて
かくれてしまう。

ふくろふ

東京　千葉　幹一

ほう〳〵
月が出た
暗いやみ夜に
月が出た
森のふくろふの
夜が明けた
ほう〳〵。

汽車

茨城縣　高橋　健兒

ポッポッ〳〵
あの汽車
どこに行く
あの汽車上野
あの汽車
どこに行く
あの汽車日光
ポッ〳〵〳〵
はしるよ〳〵
けむりをはいて
上野さし日光さし
わかれ行く。

波

山口縣　淺原　精次

波が沖から
寄せて來た
頭をゝろへて
寄せて來た
お手々つないで
寄せて來た
風と一つしよに
寄せて來た。

お池のかへる

横濱市　若尾　信子

お池のかへる
死んだのに
又又がをがをなき出した

かはいゝあかちやん

山梨縣　東條　美文

かはいいあかちやん
いつも母さんに
だつこしながら
乳呑んで
遠いお町行きました。

ガタ〳〵自動車

朝鮮　山本　力

ガタ〳〵自動車
ガタ〳〵ゆれる
早くはしれば
よけいにゆれる
御用心
ガラスが
ガチャンと
われそうだ。

マツチ

大分縣　矢田　末吉

マツチは不思議だ
このマツチ
ご飯はたくし
風呂までわかす
ま者のやうな
不思議な力。
何所にかくして
あるのだマツチ。

名鳥奇譚

名曲『嘆きの薔薇』

三井信衛

（最終篇）

名鳥珊瑚の大活躍

一、又もう一人芳雄

この事件に何かの端緒を得るかも知れないと、この小畑の家に來た逸雄ではありましたが、事件の端緒どころか珊瑚の啼聲を聞かうとは、本當に思ひもよらなかつたのでしたが、逸雄の驚きはそればかりではありませんでした。

名曲の最後の一くさりを歌ひ終ると、やがて珊瑚の聲はぴたりと止りましたが、その聲を聽きながら階段の處に立つてゐた逸雄は、ふと振り返つた一刹那。

『おやッ！』

と聲立てゝしまつたのでした。外でもないが、逸雄の直ぐ後からも亦一人の少年が、ぢつと階段の下に耳を澄してゐたからです！

『あッ！』と逸雄は叫びました。

『あッ！』と同じやうにその少年も、二三歩後づさりました。

それは見たこともない十八九の少年！　服裝は何となく汚く、それに今までは何處にゐたのか、髪は茫々と麻のやうに生え、目はギロ〳〵と鋭く光つてをりましたがそこには何となく犯し難い色が漂つてゐるやうです。

『君は誰だい？』逸雄は言ひました。

『いや、君は？』少年は問ひ返しました。

『さういふ君は？』

『それよりも君は？』

そんなことを言ひ爭つてゐたところで仕方がありません。どうせ此の何となく暗い影の漂つた小畑の家です。初めから心の中で警戒に警戒を重ねてゐた逸雄は、そのまゝ着物を着かへようと思つてベットの側に近よると、その側には今までは少しま氣づかなかつたけれど、もう一臺のベットが置かれてありました。では、この見知らぬ少年が、いつの間にか此處へ來て、逸雄の側で眠つてゐたのでせうか？

『君は昨夜、こゝで眠つたの？』

恐る〳〵逸雄は尋ねました。

『あゝ、さうだよ。君は昨夜、切りに寝言を言つてたせ』

『えゝッ？　何と言つてゐた？』

と思はず逸雄は不安な思ひがして大きくハッと目を睜つたのでした。もしや、この少年が惡漢の廻し者であつた場合、いゝや、さうでなくてさへ、あの小畑に逸雄の素情でも知れたら、それこそ取返しのつかない一大事です。

『えゝ？　何んなことを言つてた……？』

『いや、その君の寝言を聞いたので、僕は君が誰かしら？　と不思議に思つてるんだよ』

と少年はかう言ひましたが、突然逸雄に向つて、

『君！　一寸背中を見せて呉れ給へ！』

『えゝ？何だつて？僕の背中…』

と逸雄は、何のことだか譯がわからないので、只默つて不審の目を睜つてゐますと、もう一度少年は言つたのでした。

『君、背中を一寸見せて呉れない

か……』

『僕の背中を見て、一體どうするのだ？』

いつか活動寫眞で見たやうに、知らない間に惡漢のために、その背中の何處かへ惡漢團のマークでも刺青されてなんかゐるのではないかしら？　それともこの少年がそのマークを刺青しようとでも言ふのだらうか？

『何も恐れることはないんだよ。一寸見ればいゝんだ。僕はね、深い事情があつて、今年十三になる少年を見ると、直ぐに背中を見せて貰ふんだ』

『ふう…それは又どういふ譯で』

『いやまア理由は、どうでもいゝが……兎に角一寸すまないが…』

餘り熱心にそう言ふので、逸雄は仕方なくシャツを脱いで、少年の前に背中を見せました……と、肩から二三寸下つたところをぢいつと眺めてゐた少年は、

『おゝッ！』

と思はずさう言つて、よろ〳〵とよろめきました。

『お前は……お前は逸雄……』と言ひかけたが、階下にゐる小畑を恐れるやうに、俄かに聲をひそめたのでした。

『えッ！……』と逸雄も思はずさう叫びましたが、又思はず聲をひそめて『あなたは誰です？　誰です？』

『僕は芳雄だ……芳雄だ……と言つてもお前はもう忘れてゐるだらうが、……僕はお前の兄さんだ』

『えゝ？』

と逸雄は問ひ返しましたが、闇らずも亦、こゝに芳雄と名乘る少年を見て、逸雄の心はすつかり迷はされてしまつたのでした。が、何故かしらこの芳雄と名乘る少年の顏は、さまざまの苦勞艱難を經たらしく、十八九が二十一二にも老けて見えるとは言へ、その眉の邊りその目の邊り、寫眞で眺めた父市田四郎に、何となく似通つてをりました。

『君は逸雄だらう？』

けれども逸雄は、暫くは默つてゐました。もしや又、この第三の芳雄少年が小畑の廻し者で、逸雄の身の上を探るためにそんな間を

かけるのではあるまいか。思案に餘つてゐた時、芳雄は言ひました。

『いや、昨夜僕がこゝへ連れられて寢てゐると、お前は寢言に――それは小さい聲だつたが、珊瑚々々と何遍も繰返してゐたのだ。珊瑚！　あゝそれは、僕のお父さんの名、烏の名だ。そして今、その烏の――僕にとつては十年の以上も聞かなかつたその烏の聲を聞いて思はずハッと立ち上ると、お前が先に階段に立つて、ぢいつと耳を

澄してゐる。……あゝ、これはひよつとしたら、逸雄ぢやあるまいか――僕はその時、強くさう思つたのだよ。今、お前の背中を見たら、やつぱり小さい時にあつたあの黒子が、今もあり〳〵と殘つてゐるよ。……どうだ、お前は逸雄だらう？　逸雄だらう？』

二、小畑と共に銀座劇場へ

さう言はれて見ると、逸雄は肯くより仕方がありませんでした。だが、これが兄さんの芳雄だらうか？　何かしらその語る言葉つきや、その優しい目――それは今までに現れて來た二人の芳雄たちの何れよりも、もつと逸雄には懷しく映りました。が、逸雄は同じやうに、警戒しながら言ひました。

『あなたは今まで何うしてゐたんです？』

『あゝ僕か、僕は……今から十年前に、惡い奴のために捕はれて、たうとう旅の音樂師にされてしまつたのだ。いゝや、そればかりではない、時には曲藝師や、時には旅廻りのオペラ役者や……それはまア色んなことをさせられて、早く歸りたい、どうかして逃げる工夫はないものか、どんなに僕はさう思つたらう！』

語つて行く芳雄の聲はだん〳〵と哀しげになつて來ました。逸雄もいつしかその一條の物語に、ぢいつと耳を傾けたのでした。

『さうして次から次へと惡い奴の手にまるで、奴隷も同樣に賣り渡されて、今度はこの小畑に買はれたのだ……』

『えゝッ、ぢやあ小畑に……』

『さうだよ。ところが小畑の奴、僕が芳雄だといふことは少しも知らないのだ。又僕もこの小畑の家に、お前や珊瑚までが居ようとは思はなかつたよ。……それはそれとして、お前は又どうして、こんな處へ來てゐるのだ？』

今更のやうにかう訊いた芳雄の聲は、弟の身を思ふ兄の切ない情が、あり〳〵と現れてゐたのでした。逸雄は珊瑚の盜まれたこと、お家は既に人手に渡つたこと、音樂會の夜のこと芳雄が二人出て來たことなどを、次から次へ物語りました。

『うむ、さうか！』芳雄は口惜しさうに、しつかりと拳を握りました。何十分かの間、二人がお互ひに考へを廻らしてゐると、

『おい、降りて來い。二人とも降りて來い！』

と呼ぶのは小畑の聲でした。二人はハッと顏を見合せたが、やがてトン〳〵と階段を降りて行きました。

『先生、お早うございます』

『やあお早う。早速だが、愈々お前たちの手を借りなくてはならない時が來たよ。實はこの月の二十五日から三日間、銀座の銀座劇場で音樂會をやることになつたんだ。そこで一つお前たちにも出てもらひたいのだ』

『はい……』と二人は答へました。

『だが今度の音樂會は、よつぽど確りやつて貰はなくつちやならんよ』

と何故か小畑は念を押しましたが、さて、その日から二十四日の夜まで、二人は毎日々々受持の曲の練習をさせられたのでした。二人は折があれば、あの珊瑚の聲をきいてその在處を知りたいものだと、一心にヴァイオリンを彈きました。が、もうあれからはその聲も、ぱつたりと聞えなかつたのでした。

すると、愈々二十五日の夕方が來ました。いつの間に用意したのか、小畑は二人の前に美しい服を出しました。二人はそれを身につけて、小畑と一緒に自動車で銀座劇場へ向つたのでした。銀座劇場はつひ近頃何十萬圓の建築費で建てられた、帝都唯一の宏莊な劇場で、小畑、芳雄、逸雄の三人が自動車でその前に來た時には、早や切符賣場には多勢の人たちが押すな〳〵の盛況でした。と、その時不圖自動車の中から劇場の前を見た時、思はず二人はハッと目を見合せました。おゝ、その前には大きな立札が立てゝあつて、そこには「市田四郎氏遺兒演奏會――市田芳雄、市田逸雄出演」と記してあつたからです！

三、イッヲ！　イッヲ！

『おや？』

と無言のうちに二人は顔を見合せました。が、いつしかそれは何とも言へない微笑に變つて行つたのでした。小畑は、偶然手に入れた芳雄と逸雄の二少年が、音樂の天才であると認めて、市田兄弟などゝ、世間を欺いたつもりでゐるのに違ひありません。それが圖らずも正眞正銘の市田兄弟であらうとは、よもや知る由もありますまい。

が、それは一寸面白いことではあるが、二人が事實市田兄弟であるがために、世間を晦ましさうとした小畑の罪が、結局成功したことになるのです。さう考へて來ると芳雄と逸雄の胸は、圖らずも亦暗い雲に鎖されてしまひました…。

さしもに大きな銀座劇場の中もすつかりと聽衆で滿員でした。三人がそこに着いて二三十分も經つと、やがて先づ弟の逸雄が、片手にヴァイオリンを提げながら舞臺に出ました。どおッと割れるやうな拍手の音は、さういふ場所に初めて立つた逸雄の心を、すつかりと脅かせて、いつしか足許はぶるぶると慄へて來ました。だが、やがて、だん〳〵と落ち着いて來ると、今まではぼつと霞のやうに見えてゐた多くの聽衆が、はつきりと目に映つて來たのでした。……

……と、逸雄は思はず心の中で、『あッ?!』と言つたのです。外でもない、たくさんの聽衆に混つて左側の椅子に腰かけてゐるのは、たしかに河野！　いゝやその又側にチョコナンと腰かけてゐるのは、忘れもしないあの第一の芳雄少年いゝやいゝや、その又後にゐるのは額田探偵だ！　おゝ、その額田探偵の手が、サッと一瞬間光るやうに動いたが、同時にハッと河野と芳雄は振り返りました。さうして額田探偵と一緒に、河野と芳雄とは何處へか立ち去つたのでした——これは時間で言ふならば、ほんの一分間にも足りない出來事です。

『あッ、捕縛されたんだ！』

逸雄は心の中で躍り上りましたが、群衆は今の出來事を何一つ知らぬかのやうに、相變らず拍手を續けてゐるのでした。

咽び泣くやうなその音色！朗らかな伴奏の曲！

さうしてグーノーの一曲は、逸雄の手によつて巧妙に彈かれました。再びごう〳〵と起る拍手の響わあッと上る喚きの聲。逸雄は大成功を修めて舞臺を去つたのでした。

その次は芳雄の番ですやがてショパンの幻想曲は、彼の手で彈き出されました。ぢつと舞臺の影からその演奏を聽いてゐた逸雄、同じやうに大成功を修めてその側に來た芳雄を見ると、

『あゝ、僕すつかり感心

しちやつた！』

と芳雄の手を取つたのでした。

『お前のグーノーも隨分立派だつたよ』

『いゝえ、まだ〳〵僕は駄目です……それはそれとして、さつき聽衆の席で、河野が捕縛されましたよ』

『えッ！』

と芳雄が驚いた時、聽衆の方からは又割れるやうな、拍手が聞えて來たのでした。二人が思はず舞臺を見ると、大手を振つて肩を怒らせながら舞臺の中央に進み出たのは、第二の市田四郎と名乘つてゐる小畑楊吉の姿、今夜こゝで演ずる曲は、言ふまでもなく、名曲『嘆きの薔薇』でした。

二人が息を殺して眺めてゐるとやがて小畑は靜かにヴァイオリンを手に取り上げて、それを一寸彈きかけたが、これは又何といふことでせう！　何處からか、

『イッヲ！　イッヲ！』

と言ふ聲がしました。聽衆は急に喚きました。それはたしかに珊瑚の聲です。『あッ』と小畑は小聲で叫んで、もう一度名曲の初めを彈き出しましたが、それは何といふ下手な、ヴァイオリンでしたらう！　と、又珊瑚の聲がしました

『イッヲ！　イッヲ！』

小畑は躍起となつて床を足でトンと叩きました。

『イッヲ！　イッヲ！　河野は惡い奴！』

その途端、小畑の上服の下からパッと飛び出したものがある。おお、名鳥珊瑚だ！　すうッとその時、急に幕が降りてしまひました。

四、珊瑚小畑を捕へる

『あッ、芳雄兄さん、小畑の奴、今までヴァイオリンを彈く眞似をして、あの珊瑚を種に使つてゐたんだ』

『うむ……それにしても、早く珊瑚を！』

『おゝ、さうだ！』

と二人が思はず、幕の降された薄暗い舞臺に出た時、その上を珊瑚は、バタ〳〵バタと飛んでゐます。さうして小畑は、躍起となつて追つかけ廻してゐます。聽衆の席からは、わあーッ、わあーッと叫び聲……。

芳雄と逸雄は、思はず珊瑚を追ひました。今は小畑も、種に使つてゐた九官鳥を二人に見られたのも忘れ果てゝ、『おい待て！』『こら待て！』と叫びながら、狂人のやうにその後を追つかけてゐます

『おいお前たち、早く捕へろ！　早く！』

『よし、捕へたら逃げてやらう』

咄嗟に二人はさう思つて、大手を擴げて珊瑚に近づきました。『珊瑚や、珊瑚や？』とさう呼べばいゝとは思ひながら、小畑に覺られるのを恐れてそれも出來ません。その内に珊瑚は、舞臺裏に續く小さなドアを、つと拔けて行きました。

小畑、芳雄、逸雄の三人がその後を追つて行くと、珊瑚は廊下から廊下を飛び廻つて、二階へ上つたかと思ふと又下に降り、やがて又三階の衣裳室の入口に來ました。その時です。ほんの細目にその室のドアが開いたが、その中へバッと珊瑚が飛び込んだ。芳雄、逸雄小畑、つゞいてその中へ入ると、そこには圖らずも、手繩をかけられた第一の芳雄とそして河野！　しかも、その側に立つてゐるのは額田探偵！

『わあッ！』

と五人が同時に叫んだ時『御用だッ！』――言ふなり電光石火の早業で、探偵は小畑の手に捕繩をかけてしまひました！

五、何れが本當の芳雄か

呆氣に取られてゐる河野、手を縛られてアッと棒立ちになつてゐる小畑、驚いて眺めてゐる二人の芳雄と逸雄、さうして、ギュッと鋭く見つめてゐる額田探偵。その六人の頭の上をくる〳〵くる〳〵と珊瑚は廻つてゐます。

『珊瑚や！』

その時逸雄がさう言ふと、珊瑚はその手の上につゝと止つたのでした。丁度又その時でした。靜かにドアを叩く音が聞えました。はッと一同がその方を見ると、警官に連れられて入つて來たのは、あの帝國演藝場で音樂會を開いた第二の芳雄でした。

『小畑楊吉！』と額田探偵は鋭い目を小畑に注ぎました。『お前は、亡くなつた市田四郎さんの弟子だと言ふが、それに違ひはないか』

『はい……』と小畑は頭を下げました。

『それならば問ふが、こゝに市田さんの遺形身だといふ三人の芳雄がゐる。お前の連れて來た芳雄は本當の芳雄か？』

『……』小畑はぢつと首垂れてをります。

『よし、ちやア河野！　お前は飽くまでもこの芳雄を、本當の芳雄だと主張するのだな？』と探偵は青白い顔をして佇んでゐる河野に向つて、側にゐる第一の芳雄を指さしながら訊きました。

『左樣です。この芳雄さんこそは亡くなられた旦那樣の、お遺形見に相違ございません』

『さうか……おい君！』と探偵は今度は二番目の芳雄に向つて、『お前もやつぱり、さうだと言ふんだな？』

『さうです』と彼は肯いたのでした。

探偵が河野や小畑に向つて、一通り何事かを査べ終つた時、ぢいつと逸雄の手に抱かれてゐた珊瑚が急にバタ〳〵と羽を動かしました。さうして、『あゝ…あゝ……』と哀しげに啼いたのでした。

その聲に、河野と小畑と第三の芳雄が思はずハッと目を瞬りましたが、『あゝ……あゝ……』――その只つた短いこの二言、一體それは何を語るのでせうか？

『あゝ……あゝ……』又もや珊瑚が啼きました。

『おゝ……』と第三の芳雄は、逸雄に抱かれてゐる珊瑚の方に、思はず近づきました。『お父さんのお聲だ！　お父さんのお聲だ！』

さうです。その珊瑚の『あゝ…あゝ…』と言つたのは、正しく死んだ市田四郎の聲とそつくり同じでした。しかも、他の二人の芳雄たちは、第三の芳雄に續いてさも驚いたやうに『さうだ、お父さんの聲だ』と聲を立てましたが、探偵の面にはサッと光明が現れたのでした。

『あゝ……』と珊瑚はもう一度聲

を高めました。『あゝ……芳雄……芳雄は何處へ行つたのだ……何處へ行つたのだ……？』

河野はハッと目を見開きました。おゝそれこそは、市田四郎が臨終に殘した哀しい一言……。

『……何處へ行つたのだ……』又珊瑚は言ひました。一同はしんとしてゐます。『嘆きの薔薇……嘆きの薔薇……伴奏は芳雄……伴奏の出來るのは芳雄だけ…芳雄だけ』

『おゝ！』と、逸雄は叫びました。『額田探偵さん！　珊瑚は世界に誇る名鳥です』

『ふう……』

『その名鳥の傳へる言葉には、決して〳〵嘘僞りはありません。人間の中の馬鹿者よりはもつと〳〵賢いのです』

河野と小畑は、強く逸雄を睨みました。

『額田さん、今珊瑚の言つた父の言葉をお聞きになりましたか』と逸雄は再び言つたのでした。『珊瑚は、嘆きの薔薇の伴奏は、芳雄兄さんより外に、完全に出來るものはないと言ひました。さうです。もしこの三人の芳雄さんの中の、誰か一人が本當の芳雄兄さんでしたら、その人はきつと、嘆きの薔薇の伴奏を、完全に彈くことが出來るでせう……』

『おゝ、それはよい處へ氣がついた。では皆こちらへ來い！』

探偵は逸雄を始め四人の人々と共に、劇場の舞臺へ出て行きました。劇場の支配人が斷りを言つたのか、もう多勢の聽衆の姿は唯の一人も見えないで、そこは宛で宴會の果てた王城の一室のやうでした。さうして、舞臺に置かれた大きなグランドピアノが、まるで三人の芳雄たちの運命を決する、審判所の門のやうに黑々と光つてをりました。逸雄はぢつと九官鳥を抱いて立つてゐるのです。

『サア、お前たち』と探偵は三人の芳雄に向ひました。『順々に、嘆きの薔薇の伴奏曲を彈いて見給へ――先づお前から』

言はれて第一の芳雄は、ピアノの前に座つて、伴奏曲を彈き出したのでした。その次には又、第二の芳雄が彈きました。その二人と

も、成程多少音樂の素養があると見え、皆相當に彈き終りました。……と、その次には第三の芳雄少年、靜かにピアノの前に腰をかけて、ポン！　とその鍵盤を叩いたのでした。

流れるやうに美しい伴奏曲の一節が、芳雄の手で彈き出された時逸雄の手に抱かれてゐた名鳥珊瑚が、靜かに朗かにその伴奏に合せて唄ひ出した曲こそ、ピッタリと芳雄のピアノに合つた名曲『嘆きの薔薇！』

おゝ、何といふ、美しい曲であらう。

がらんとした劇場に漲つたその曲に、居合す一同は善惡を忘れ果て、罪の人も、罪を裁く人も、一樣にしーんと鳴りを鎭めて聽き入つたのでした。

名曲の伴奏が終り、さうして珊瑚が唄ひ終つた時第三の芳雄の目には涙が溢れてゐました。

『お前はお父さんを憶ひ出したのだらう？』

探偵は言ひました。

芳雄は默つて肯いたが、感極つて尙も溢れ上る涙を、ぢつと腕で制へたのでした。

『よろしい！　逸雄君！　これは兄さんだ！』

『おッ』

と、逸雄は、芳雄に抱きつきました。

『芳雄兄さん！』

『イッヲ！』

と珊瑚は啼きました。

『おゝ、逸雄！』

と芳雄も強く逸雄を抱いたのでした。

その時、又もや珊瑚は、靜かに唄ひ出しました。

僕の可愛い弟は
黑い瞳に赤い唇

『あッ、芳雄さん、兄さん、あなたと同じ聲だ！』

『おゝ、珊瑚！』

芳雄は、强く名鳥を抱いたのでした。

六、遂に事件は解決

『あゝ額田さん、お許し下さい。芳雄さん、逸雄さん、お許し下さい。』

と河野は、その場に、跪きました。

と、その時珊瑚は叫びました。

『河野は惡い奴……』

『その通りでございます……』

河野がさう言つたので、芳雄と逸雄は思はずクスッと笑ひましたが、急に河野が憐れになりました。

『あゝ私は、市田樣の財產を橫取りしようと企んでをりました。この珊瑚を盜ませたのは、私でございます。こゝにをります芳雄といふ子は』

と第一の芳雄を指して、

『秋山といふ小鳥屋の息子です。その親父の秋山といふのは惡い奴で、神戸で阿片窟を持つてをります。それと共謀で、罪を晦ますために芳雄さんの僞物を使つて、巧みに珊瑚を他の九官鳥と取り替へたのです。額田さん、證據品を消すために、あなたのお名を詐つて替玉の九官鳥を持つて行つたのがお察しの如く、この子の父の秋山なのでございます……』

『私はその秋山から、偶然珊瑚を買つたのでございます』

と今は、深く悔悟しながら、小畑楊吉は言つたのでした。

『私は市田さんのお弟子だつたのです。この九官鳥を利用して、一儲けしようと企んだのです。……おゝ、私の家にゐた、二人の少年が、本當に市田先生のお息子さんたちだとは、いかに惡人の私も氣がつきませんでした…』

『芳雄さん、逸雄さん』

と、その時第二の芳雄は言つたのでした。

『私はこの小畑さんのお弟子だつた、白井初雄といふものです。…私は小畑さんの、お家にゐました時、嘆きの薔薇を敎へられて、亞細亞機蓄音會社に市田さんのお息子だと言つて、連れて行かれたの

です。それで惡事の味を覺えました。私は、今度は芳雄さんの行衛不明を利用して、自分で芳雄さんと名乘つて、世間を晦ましさうと思つたのです。……あの亞細亞蓄音機會社の森さんやシュライッさんは、私の吹き込んだ曲を市田四郎さんの名にして、その上それを賣り出したのです……然し、九官鳥を盜んだのはあの人ではありません』

『よし、三人ともよく事實を告白した』

と、探偵は答へました。

『おゝ芳雄君、逸雄君、これで事件は解決した。後は神戸の阿片窟を襲ふことゝ、さうして森やシュライッを取調べることだ。が、それは譯なく出來る。……おゝ、これは何といふ名鳥だらう！』

今更ながら額田探偵は、珊瑚の頭を靜かに撫でたのでした。

『額田さん、いろ〳〵有難う存じました』

二人は篤くお禮を言ひました。逸雄は更に探偵に向つて、

『お願ひがございます。かうしてこの方々はすつかりと悔悟なさつたのですから、どうぞ出來るだけ罪を輕くしてあげて下さいまし』

『うむ……君は實に情深い少年だ！』

やがて探偵は、河野と小畑と二人の少年たちを引きつれて、劇場を去つたのでした。

その翌る夜から引き續いて三日間、銀座劇場で開かれた音樂會には、更めて芳雄逸雄の二少年が出演することゝなりました。割れるやうな拍手喝采に迎へられて、二人は初めて名曲『嘆きの薔薇』を奏したのでした。

二人は間もなく、少年天才音樂家と認められ、今は一旦人手に渡つた神戸山手の廣大なお邸を、再び買ひ戻しました。

さうして、こんもりと繁つた老木の間から、名鳥珊瑚の美しい聲は洩れてゐるのです——

『ヨシヲ！ イッヲ！』と。

（をはり）

化けぎつね（推薦）

和歌山縣　檀上春之助

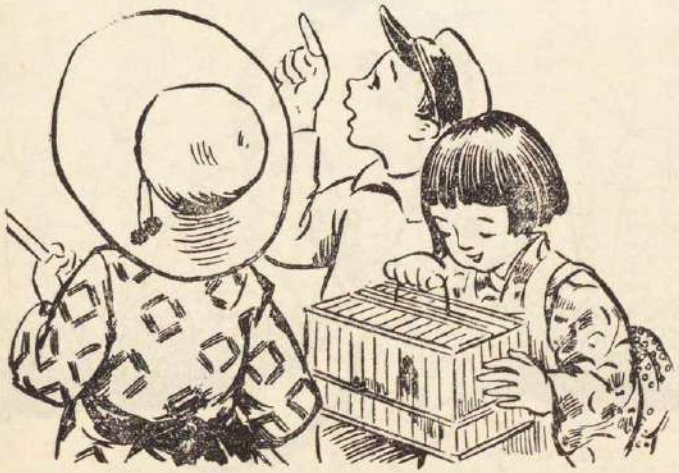
きつねが
田甫の　細道で
こん〳〵子守子に
化けたとさ

こん〳〵子守子に
化けてても
尻尾が下つて
ゐただとさ

蟬とり

若山牧水

せんせん蟬の子
　お煎餅やろ
降りて來　降りて來
　お饅頭やろ
高いところに
　鷹がゐて
やんがてお前を
　食ふであろ



降りて來　降りて來
　お饅頭やろ
せんせん蟬の子
　お煎餅やろ

般若の面

鈴木氏亨

一

徳川の末の頃でした。江戸の三十間堀に、面打の源五郎と云つて、お能の面の名人がありました。

この源五郎の彫つた面は、どんなものでも生々して、まるで實物を見るやうでしたから、その頃源五郎彫りと云ふと、江戸では大した評判になつてゐました。

昔から名人と云ふと、何か癖をもつてゐたものです。源五郎も名人だけに癖がありました。それは氣が向かないと仕事をしないことなのです。それにお酒が好きで、お金のあるうちは朝から晩まで酒を呑んでゐましたから、ちつとも頼まれたものが出來上りません。ですから、家はいつも貧棒でした。

その頃、能には五座と云つて、家元が、觀世、今春、金剛、喜多、寶生の五家に分れてゐました。この家元では能面の彫刻を源五郎に頼みました。わけて觀世太夫は、源五郎が贔屓だつたので、三年前般若の面を作つてくれと云つて、手附まで渡してありましたが、一向出來る樣子もありませんでした。

觀世太夫は、これまで度々催促しましたが、

『もう半月待つて下さい！』

『こんどは屹度拵へます！』

と、云ふ風で、相も變らず酒ばかり呑んでゐて、出來さうもありませんでしたから、

『いくら名人だつて、人を馬鹿にするにも、程がある。』と怒つて了つて、

『腕は惜しいが、信用のおけない男だ。』とあいそをつかし、今では催促もしないやうに、なつてゐました。

二

そのうちに夏が來ました。

今日は盆の十三日だと云ふのに、源五郎は朝から

酒浸りになつてゐます。おかみさんは氣が氣でありません。息子の源之助には新らしい單衣の一枚も着せたいし、お佛壇のかざりもせねばなりません。が源五郎がこの有樣ですから、腹が立つて、腹が立つて見てゐられません。しまひには悲しくなつて泣きたくなつて來ました。

源五郎は杯を手にとつたら最後、どんなことがあつても放さうとはしません。

『おい酒だ！酒だ！』と、いくら呑んでも、ねだります。これを見るとおかみさんは泣きだして了ひました。

『後生ですから、もう廢して下さい！　それに今日はお盆ですのにお金は一文もないんです。仕事だつてたくさん溜つてゐるのですし、觀世樣の面はもう三年にもなるのですから、せめて今日は、その方の仕事でもかたづけて、後金でも貰つてお盆のたしにして下さい。』と涙をながして賴みました。

源五郎はさう云はれると、長いこと仕事を怠けてゐたのに、はじめて氣がつきました。だが、容易に腰を上げやうとはしません。さうだ、

『酒だ！　酒だ！』と酒を呼んでゐます。

『あなた後生ですから、どうか仕事にかゝつて下さい。それにお酒はもうないんです。』

と、たつて云はれるもんですから、源五郎も漸々立つて仕事場に入りました。

源五郎は醉つてゐても、いざ仕事となると一生懸命でしたが、その日は何となく氣がすゝみません。それに思ふやうに鑿も動きませんので、長い間般若の面一つにかゝつてゐました。

しばらくすると源五郎は、恐ろしい形相をした般若の面を持つて、仕事場から出て來ました。見ると顏には淺い疲勞の色さへ現はれてゐます。おかみさんは素ばやくそれを見てとると、

『まあ、出來たんですか、よろしう御座んしたわね。それでは直ぐ源之助に持たしてやつて、後金を貰はせませう。』と、いたはるやうに云つてゐます。

源五郎も思つた程の、出來でもありませんが、一家の生命にはかへられないので、

『あゝ、さうしておくれ。』と、厭や〳〵ながら云つて、面をわたしました。

しかし、さすがに名人の彫つたものだけに、よく出來てないと云つても、一點批難の打ちどころがありません。

軈て、源之助は、般若の面を鬱金木綿に包んで、三十間堀から近い木挽町の、觀世太夫の邸へ出かけて行きました。

三

恰度この時、觀世太夫は弟子を相手に、奧座敷でお酒盛をしてゐました。そこへ、

『只今、面打源五郎の伜源之助なるものが、般若の面を持つて參りました。』と、取次いで參りました。

觀世太夫はそれを聞くと、何かしばらく考へてゐるやうでしたが、

『何！　般若の面とな……苦しうない直ぐ通せ！』

と、申付けました。

源之助は、觀世太夫の前へ通ると、立派におじぎをして、持つて來た面を出しました。

觀世太夫は、面を手にとつて、凝と暫くの間眺めてゐましたが、これと云つて批難すべき點がありません。だが、今日は盆の十三日でそれに急に持つて來たと云ふのは、屹度金がほしいからである。これまで散々人を待たして置いて、自分の勝手な時ばかり、急いで作つてくると云ふのは、隨分虫のいゝ話だと思ひました。でこれまでの腹癒せに、何とかけちをつけて、源五郎を困らしてやらうとしました。それに酒が大分入つてゐましたから、それが手傳つ

たのでせう。

『うむ！　好く出來た。さすがに、源五郎丈ある。だが、どこかにいやしいところのあるのが難である。……これと云ふのは、今日が盆の十三日、金がほしさに急に彫つたものであらう。それでこのやうに、いやしいところが、現はれてゐるのに違ひがない。おゝお前は源五郎の伜であるな。』

『はい。左樣で御座います。』

『では、家へ歸つたなら、源五郎によく申し傳へよ。苟もお抱能師の太夫とあらうものが、かゝるものほしげな面をつけて、御前の能がつとまるものではない。天下の能師を馬鹿にするにも程がある。以後當家の出入をさし止めるからと、さう申せよ！』と、火のやうに怒りだしました。

『いゝえ、お父さんは決して、そんな考へで拵へ

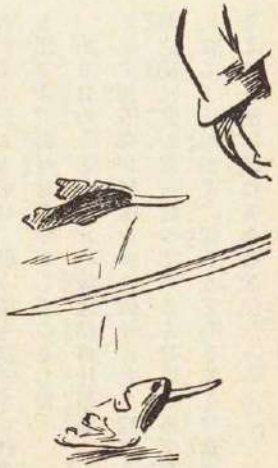
たんではないんです……。』

源之助は一生懸命に辯解しやうとしましたが、どうしてもきゝません。そして、しまひには、

『お前の知つたことではない。よし、強いてさう云ふならば、かうしてくれるぞ。』と側にあつた刀懸けから小刀を取るなり、ぎらりと拔いて面を眞二つにして了ひました。

父が魂をこめて拵へたものが、こんな取扱ひをされたのを見ると、源之助はくやしさで泣きたくなりました。もし、許されるならば源之助はすぐ立上つて行つて、觀世太夫を一思ひに突き刺し、この恨みを晴らしたかもしれません。――しかし、側には屈強弟子が大勢居ります。どうすることも出來ません。源之助は震へる手を固く握りしめながら、心の中では泣いてゐます。

『父の惡いところはお詫びいたします。がそれにしても面をお毀しなさるとは、餘りひどい仕打では御



座いませんか？』

『お前までが、俺に手向ひしようと云ふのか……

誰れでもいゝ、この小僧奴を摑み出して了へ！』

觀世太夫は、憎くにくしげに云ふと、源之助を弟子達に追ひ出させて了ひました。

源之助は、こわされた面と一緒に、犬か猫のやうに門の外に放りだされたのでした。

『殘念だ！　この恨みはいつか晴らしてやる、覺えて居れ。』

源之助は、こわされた面を風呂敷に包むと、きつと觀世太夫の家の門を睨まへて、煮えくり返へるやうな憤りを押へながら、家へ歸つて來ました。

『お父さん、殘念です。』

源之助は、歸つてくるなり、兩親に一伍一什の話をいたしました。源五郎も、妻も、そのことを聞くと、大さう無念に思ひました。一家はもうお盆どころではありません。三人とも悲しい心を抱いて、くれて行く夏の夜を待つばかりでした。

四

それから源之助は、自分も面打となつて、觀世太夫からうけた恨みを、晴さうと決心しました。そして、毎日父の仕事場へ入つて、父の手傳をしながら熱心に見習ひました。

それからと云ふものは一生懸命です。源之助は瞬く間に、腕をめき〳〵としあげました。

そのことがあつてから、父の源五郎は、面白くない日がつゞきました。そして、どう云ふものか、それからと云ふものは、餘り酒も飲まず、仕事にも精を出さず、毎日ぼんやりしてゐました。

ある日のことでした。源之助が仕事場へ入つて行くと、源五郎が體軀をうつ伏せにして寢てゐます。源之助は父がなんだつて、こんなところで寢てゐるのだらうと思つて、起さうとしますと、眞赤な血がそこら一面に流れてゐます。

『あつ血！』源之助は驚いて叫びました。見ると、源五郎はいつも自分が愛用してゐる鑿で、咽喉を突いて自殺してゐるのでした。

源之助は天地が一時に、ひつくり返へつたやうな驚きを感じました。

『お母さん、大變です、大變です、お父さんが……

……』

と、大聲で呼ばはりましたので、お母さんも何事が起つたのかと、入つて來ました。見ると良人無慘の死を遂げてゐます。

『ほんたうにつまらないことをしておくれだ。後に殘つたものは、どうすればいゝのか。』

お母さんも死體にとりすがつて、嘆いてゐます。顏は涙でぬれてゐます。

見ると、源五郎の懷中には遺書があります。二人はわなゝく手で、いそいで開けて見ますと、

私の魂をこめた般若の面を、觀世太夫から辱しめられたのは、いかにも心外に堪えない。今、私はこの恨みを呑んで死んでゆく。この上は是非そち達の手で父の恨みを晴らして貰ひ度い。それから私の自殺した鑿は永年愛用したものだから、捨てないで遺品として大切に保存してくれ。それでは一足先に行くあばよ。

源五郎。

と書いてあります。これを見た源之助と、お母さんとは、悲しみの堰を外したやうに、

『わッ！』と聲を出して泣き出して了ひました。

かうなつて見ると、憎いのは觀世太夫です。源之助は父の死體を前にして、

『お父さま、決して御心配なさいますな。屹度敵はとつて上げます。』と、心の中で、誓はないわけにはいきませんでした。

しかし、悲しんでゐても、はてしがつきませんから、二人は心をとり直して、亡き屍の後始末をし、

形ばかりの葬式を濟ましました。

五

それからの源之助は、どうかしてその恨みを晴らしたいと云ふ一心で、燃えてゐました。

けれども、二人の痩せ腕では、三十間堀の家を支へて行くことが出來ません。源之助母子は、相談の上、根岸のさゝやかな家を借りて、移り住むことにしました。

それから母親は、他人の濯ぎ洗濯をしたり、手傳ひをしたり、また源之助は見樣見眞似で覺えた子供の玩具などを彫つて、町々の商人へ賣り歩いては、暮しを立てゝゐました。

かうして十二年が夢の樣に過ぎました。

源之助は、もう一廉の面打になつてゐました。方方からの注文も追々出て來ました。だが、まだお父さんの源五郎程、有名ではありませんでした。

その頃、四谷大宗寺の閻魔の像が再建されると云ふ噂がありました。ところが、ある日その彫刻を源之助にたのんで來ました。

源之助は、喜んで引きうけました。自分の腕を世の中へ知らす屈强な時が來たと思ひました。源之助は、

『今だ！』と勇んで、寢食を忘れて、一生懸命に彫刻にかゝりました。

やつと、それが出來上つて、大宗寺へ飾りつけると、まるでその閻魔は生きてゐるやうでしたから、それは大した評判になりました。

大宗寺の閻魔の評判が、洪水のやうに江戸中に擴つて行くと、面打源之助の名は、彫刻師ばかりでなく、素人の間にも大した有名なものになつて行きました。

その評判は、自然御能師の家にも入つて、觀世太夫の耳に入りました。

ある日、商賣人とも、侍ともつかぬ人が、源之助の荒屋へ訪ねて來ました。

『私は木挽町の觀世太夫の使ひで御座いますが、主人はこの四月大奥の舞臺開きに、般若の能を舞はれるので、こちらの師匠に般若の面を作つて頂き度いと思つて上りましたが、いかゞで御座いませうか、お引受けて下さるでせうか？　主人から是非お願ひして參れと云はれましたので、參上いたしましたのです。』

源之助はどんな人が訪ねて來たのかと、仕事の手を休めて迎ひ入れると、それが日頃から待つてゐた觀世太夫からの注文でしたから、もう名を聞いた丈で、胸が躍りました。

『よろしう御座います。未熟な私ですがおひきうけ致しませう。』

しかし、源之助は歎びを包んで、素知らぬ態で引うけました。

『では三月一杯に、是非作つていたゞき度う御座ります。期日を切つて御注文申上げるのも如何と思ひますが、早速お引うけ下され、太夫も聞いたらさぞ歡ぶことで、御座いませう。何しろ舞臺開きが四月匆匆で御座いますから、ぶしつけながら、期日はしかと約束いたしますぞ。』と、念を押して使の者は歸つていきました。

源之助は父の仇を打つ日が、やつと來たかと思ふと、うれしくて、うれしくて、凝として居られません。早速母親にも話をして、直ぐその日から、般若の面の彫刻にとりかゝりました。

六

源之助は身を清めて、仕事場に入ると、父が自害した時使つた遺品の鑿を神棚へ祀り、お燈明を上げて一心に祈りました。

祈りが終ると、鑿を神棚から下ろして、般若の面

の彫刻にとりかゝりました。源之助は、一心不亂です。四五日の間と云ふものは仕事場に入つた切りで出て來ませんでしたが、ある日、歡ばしげな面持で出て來ました。見ると面は美事に出來上つてゐました。源之助も自分ながらよく出來たと思ひました。約束の日、源之助は木挽町の觀世太夫の邸へ持つて行きました。

その家は、十二年前源之助が犬ころのやうに、門前へ捨てられた家です。源之助はさま〳〵の感概に耽りながら、玄關へ出て來た取次に案内されて、奥の間に通されました。

『お前が面打の源之助と申すか、よく持つて參つた大儀であつた。』

觀世太夫は、如何にも嬉しさうです。源之助が鬱金の帛紗に包んだ面を、出すのももどかしさうにして受取ると、しばらく見てゐましたが、

『うむ、よく出來た。これは結構な出來だ。』

と、さも感心した樣に、褒めました。

『幸ひ、晴れの舞臺も三日の後に迫つて居れば、今日、これで下稽古をして見やうと思ふ。お前も急ぎでなければ見てくれまいか。』

『私の如きものに、拜見をお許し下され、身に餘る仕合せで御座います。』

太夫は、直ぐさま金襴の鱗形の衣裝を着けまして緋の袴を穿くと、撞木を取つて、般若の面を顔に當てました。そして、地方が謠ひ出す謠と小鼓の音につれ、般若のお能を舞ひはじめました。さすがに名人だけあつてうまいものでした。

源之助はそれを見ると、恍惚として、父の敵などと云ふことを忘れさせられました。

軈て、一さし舞ひ納めると、着附を取りながら、弟子に面を取らせました。するとどうしたのか面がとれません。いくら力を入れても、まるで膠でくつつけたやうにびつたり喰ひ込んで了つて、どうして

もとれないのです。
『あつ！　あつ！』
弟子はたゞ、かう云つて叫ぶばかりです。
『馬鹿！　面がとれぬ。そんな筈があるか、しつかり氣を落付けて取つて見ろ！』
觀世太夫も氣が氣でありません。自分でもとらうとしてみましたが、こんりん際駄目です。太夫が焦れゝば焦れる程とれなくなります。
源之助は、この不思議な出來事を見ると、怖ろしくなりました。が、十二年この方夢にも忘れなかつた恨みが、いま不思議な面の力で晴されてゐるのをまざ〳〵と見ると、痛快で痛快で、堪りませんでした。しかし、面はどうしてもとれません。源之助も些か無氣味になつて來ました。で、
『私がお取りいたしませう。』と立上つて行つて、兩方の手に十分力を入れ、面をぐいと引いて見ましたが一分も動かうとはしません。源之助もあつけにとられて了ひました。
觀世太夫は、益々悶えくるしんでゐます。それを見るのは愉快は愉快ですが、なんだか可哀さうになつて來ました。源之助はいまさらながら、父の遺品の鑿と、不思議な面の力を凄く思はないわけには行きませんでした。
『南無摩里支天さま、お許し下さい！』
源之助はかう口に念じながら、心の中に父の靈を呼び起し、力の限り引きますと、不思議や蛇の皮でも脱ぐやうに、すらりと脱れました。ところがまだ不思議なことには、眞赤な血が顔からたら〳〵としたゝつてゐることです。
一同のものは、この重ね重ねの、不思議な出來事に、茫然として了ひました。
やがて、太夫も顔の血潮を拭ひながら、ほつとして、再び般若の面を手にとつて見ましたが、少しも變つたことがありません。

觀世太夫は、これには何か、深い因緣がなくてはならないと思ひました。

七

『源之助殿、この般若の面にかゝわる屹度深い仔細が御座らう。是非打明けてくれまいか。』
觀世太夫は强つて、聞かうとしてゐます。
そこで源之助は、自分が源五郎の倅であること、十二年前、太夫に辱かしめられたのが原因で、父が自殺したこと、父の遺品の鑿のこと、それからそれと、これまでのことを殘らず話しました。
それを聞いてゐた觀世太夫は、
『自分の酒興から、世の名人を殺したのは、何とも申譯がない。あゝ惡かつた！』と、昔の亂暴な當時を悔んで、大さう詫びました。
『大奥の舞臺開きには、假令、この面が再びくつゝくとも、一世の舞ひ納めにこれで晴れの舞臺を勤めやう。それから、この源之助の孝心と、秀れた技倆を將軍に申上げ、自分同樣取立てゝ貰はう。』と、決心しました。それから源之助には、涙ながらに謝罪して歸しました。
それから二三日過ぎに大奥で行はれた、觀世太夫の般若の能は、大へんな感動を將軍や、見物の大名達に與へました。殊に拜觀の人達は、面の巧な出來榮えを、賞讃せぬものはありませんでした。
觀世太夫も大さう面目を施しましたので、不思議な面のことから、源之助の孝心を、殘らず お役人に話して『どうか、かゝる名人を私同樣お取立て下さるやうに！』と、お願ひしましたので、將軍のお耳に入り將軍も源之助の孝心に感動し、早速お呼び出しになつて、お面の御用をお申付けになりました。
それからの源之助は、二代目源五郎となつて、大した名人になりました。
（をはり）

懸賞募集

各地に傳へられたる歴史童話

日本全國の各地には、いろ〳〵の面白い歴史に關係ある話が傳へられてゐます。ただの傳說でなく、歴史に結びついてゐる興味あるお話を求めます。左の規定に從つて、奮つて御寄稿下さい。

原稿枚數　一篇二十字詰二十行原稿紙十二枚限り。

賞金　一等（一篇）金貳拾圓。貳等（二篇）金拾圓。三等（三篇）金五圓。

選　金の星編輯部選。

締切　六月廿日。

發表　九月號。

綴方

齋藤佐次郎選

お風呂（賞）

東京市小石川區第八中學二年

門田洋一

風呂屋ののれんをくゞつて、中に這入つた。目鏡をかけた、左のほゝにちよいとしたこぶのある人が「いらつしやいまし」と云つた。ガラリと戸をあけると、又其處でもいらつしやいと云つた。着物をぬいでガラス戸をあけた。急にあつくなつた。あまり室中ゆげが立つてゐるので、人々がぼんやりと見える。傍にあつた桶をとつて、それにお湯を入れ、頭の方から、ザブーッとかけた後、あつすぎる湯へ無理に這入つた。傍の小父さんは手でぴちや〳〵湯をかきまぜてゐた。一番はじの奴は水をジャー〳〵出してよろこんでゐた。もうあつくて〳〵しようがない。背中に向つて槍を突く樣にあついお湯が走つて來る。

遂に湯から出た。體中ゆげが出てゐる。頭がボーッとしてしまつた。そしてつめたい水をかぶりたかつた。僕の體をあらふ順は、第一番に頭、その次に手、その次におなか、足と行き、一番しまひに背中を洗ふのである。向ふのはじにゐる奴――さつき水をじやあじやあ出してよろこんでゐた奴――がたつた一人で七つか八つも桶を取つてゐる。實にずるい奴だ。今そいつは盛に頭を洗つてゐる。一ついたづらをしてやらう、と思つたがよした。

もう體も全部洗つたので、又湯に這入つたが今度はさつき程あつくなかつた。さつきの奴は、まだ相變らず洗つてゐる。そして皆なくなつたものだから一ぱい〳〵ていねいに汲んでゐた。

體をふいて、着物をきた。目方をはかつて見たら、十貫三百目あつた。横の方で水兵さん達が洋服を着てゐる。偖はさつき這入つてゐた三人は水兵さんだつたのか。どうれで體格がいゝと思つた。がらりと戸をあけた。「ありがたうございます」と女の人が高い壇の上から云つた。下駄をはくと又さつきの目鏡をかけた、左のほゝにこ

「僕の顔」（賞）東本願寺元町京　中坂石次郎

ぶのある人が「ありがたうございます」と云つた。

夜あけ（賞）

京都市烏丸通丸太町上ル（高二）
川崎良雄

寝床から飛起きて、障子を開けて見ると、まだ暗かつた。空には昨夜から出て居た、爽かな星の光がアチラコチラにと瞬いて居た。道路には露がしつとりと濡れて居る。まだ人影も見えない。家口に立つてゐる街燈の光が薄ぼんやりと默つてゐる。表に植えてある松の小枝に雀が五六羽止つて、たわむれてゐた。北から冷たい風が吹いて來て僕の顔をなぜて南へといつてしまつた。暫らく彼方を見てゐたが、又冷たい北風が吹くので、障子をしめて寝床の中に飛びこんだ。時に机の上にかれてあつた目覺時計がチンチンと五時をうつた。

『まだ早いな』

暫らく寝ようとおもつたが一度起きたので寝られなかつたので、又飛起て障子を開けて空を見たらもう空には星の影もみえなかつた。たゞ薄ぼんやり見える東山から大きな陽が出て來た。美しい景色だなといつて、もう氣鬱してなにもゆうことが出來なかつた。まもなくすると北風が吹くと、ともに工場の汽笛がボーと鳴りはたつた。

火事（賞）

東京府下八王子市仲町十五
設樂ハル（十二）

私はもうこちらの學校へ來てしまひましたが、向ふにゐた時、加藤先生とふざけながら歩いてゐました。加藤先生が「ハル子さん」と言つて私が「何ですか」と言はない中にヂャン、ヂャンとなつて、見たら加藤先生もゐない。夢だつたかしらと思つてゐると、兄さんが

お父さんに「ざうりを持つて來てくれエ」とさけんだ。さあ火事だ。私はもうばつちり目をあいてた。心がそわ〳〵して、齒ががた〳〵ふるえて來ていやに寒けがして來た。お母さんが「ハル、目をあいてゐるの。火事しつてゐる」とおつしやつた。私はどらごえでうなるやうに「ああ」と言つた。

お父さんが二かいから下りて來て「すぐそばだ」とおつしやる。お母さんは「えッ、ハルや着物を着て早くね。足袋もはいて、さく子をつれてにげるのだよ。あのとし坊の方へね」とおつしやつた。私は着物を着たが、足袋がどうしても見つからない。げんくわんの方の暗い中を見つけて、大急ぎではいて、さく子をおぶつた。其所へとし坊の父さんが來て「おい早くとこを、しまつちまへ」と大きな聲でさけんだ。まごまごしてゐるとお母さんが「ハル出て見な」とおつしやる。私が出て見ると南の空が眞赤でした。そうして黑すんだ雲がお月樣のそばを飛ぶやうに走るのでした。南の方かと思つたら北の方から物すごい煙と火の粉が見えた。その所を見てゐたら、今度はひどく火の粉が出る。あゝ又となりへうつたらしい。

屋根には兄さんとお父さんが見てゐる火は中々きえさうでない。

お母さんが通りへ出たので私も出た。通りには大勢の人が、そわ〳〵したやうな口つきで、何やらさわいでた。其の中をしやうぼうの人がとんで行く。

家へ歸つて來ると、風のむきが變つて私の家の方へふりかゝる。其の火の粉は黑いやみをスーッと飛んでゆくのが、まるで流星の樣である。

お母さんが「大丈夫かしら」とおつしやつた。お父さんは屋根の

「弟の顔」（賞）秋田朝日縣校　藤進卓三

「栗林公園」　千葉縣住村　長谷川千春

上から「大丈夫さ」とおつしやつて落ちついてゐる。しんるゐの巡査のをぢさんが來た。お母さんは又「大丈夫でせうか」と又お聞きになつたら、をぢさんは「えゝ大丈夫でせう。今夜は火事の晩には珍しい風のない晩ですからね」とおつしやつて、自轉車を私の家へあづけて出て行つた。

それでもお母さんは心配なので家中のちよきん通帳をふろしきにつゝんで、私に持たせた。

あゝ火事々々、こわい火事、どうか廣くならないやうにと私は心の中でいのつて居ました。

其の中に火もだん〳〵下火になりました。其の時何の氣なしに、ゆうびんきよくの所まで行つて見ました。サク子がもつと見たがつて、せ中でひんひん動いて泣きました。

下火になつてから家で火をおこしておこたにしてあたりました。せ中からサク子を下した時まだふるえてゐたので私が笑ひました。

おこたにあたつてゐるとをぢさんが自轉車をとりに來ました。

明日しけんだからよく眠らうと思つて、又ねどこをしいてつめたいねどこへもぐつてねました。

初雷の夜

茨城縣古河町男子小學校　高橋健兒（十二）

南の方から雷がごろ〳〵鳴りながら、黑雲が一時に押しかけて來た。

その時電氣がパッとついた。風が俄にはげしくふきはじめた。いな光りがきら〳〵とさしたかと思ふと、まもなく大粒な雨がポタ〳〵と地面や屋根に當りはじめた。

町は急にさはがしくなつた。道を走るものもあれば、荷物を取込む、雨戸をしめる音が雷よりそうぞしく響く。その時電氣がきえた。どこの家でもろうそくや、ランプをつけるやらのさはぎ。いな光はもの凄く、家の暗やみの中にさしこむ。雨もはげしくふり出した。

やがて人々のさはぎが、少し靜まると電氣がついた。それからよいあんばいと、友と、友と一しよに先生の家へならいに來た。

やがて倉橋君の父さんが來て、先生とよいおしめりだ等と、いろ〳〵はなしをしはじめた。先生の家から歸る時は雨も風もしづかになつた。其の後はなんとなくしづまつた。その夜のことをむねにふくめて、まんじりともせずねむりに入つた。

暗い夜の使

福井縣大飯郡高濱校（高一女）　藤本カヨ

坪田へ勉强しに行つて來て歸つて來ると父が「藤田さんとこまで一走り行つてきてけんか」といはれたが、夜おそく、また電燈一つついてゐない。其の上、松のぼうの前を、通らなければならない、松のぼうからはよく狐が出て人をだましたり、火の玉が出るといふ傳說があるからめつたに、人の通らない所を行かなければならないから、すぐ「いやあんな暗い所を通らんならんからもうそんな事はご免や」といつてことわつた。父は「そんなもうえいわ」といつておこつたような顏をしてゐられるから、私は「そんなだんない行つて來てあげよ、どないいつてくるのんや」「あのねや、おぢさんに、もう皆な行つてですで早來ておくれとゐてきて」うんと私は返事をして門で飛出したが、杓子屋の所から眞暗なので「きよといな」と思ひぶる〳〵とふるひながら、足音をさせずにあるいてゐると、近江屋のくらのよこでがた〳〵〳〵と音がする。ひよいと横を向いたが何もゐない。「おうきよと」と一もくさんに走つた。又きよとい所へ來た。松のぼうである。私は横を向きながら、目をつぶして通り過ぎた。そして藤田さん所の障子をあけて、父のいつておられたことをいつて又松のぼうの前を通り家へかへつた。少くして藤田のおぢさんがこられた。他の人々もこられて一緒にどこかへ行かれた。

こわかつた夜

東京府玉子小學校（尋六）　田村きよ子

ふと目をさましました。室の中

「秋の山」

尋六　堀内　久三

にも家をもつて行くかと思はるゝ程です。

叔父様がこんな晩○○さんへがうたうがはいつたと、おしやつた事を思ひ出して、こわくなつて來ました。をりしも裏口の方にどつ〳〵といふ音がしました。さあこまつたいよ〳〵はいつて來たと思ふとこわくて、ねてもゐられません。お　る〳〵電燈をつけて、やつとの事で、姉様のねていらつしやる室へいつて、なき顔になつて今の事を話しますと、「なにだいじようぶですから安心なさい、妹が目をさますと、いけないからおやすみなさい」といはれましたが、まだ不安心でしたが、しかたがありませんから、床の中にはいりました。やゝたつと、ちん〳〵と五時をうちましたので、朝だとやう〳〵安心しました。

は眞黑であります。ねかへりをしてみると、お隣りの電燈の爲に窓が薄くわかります。外は大風で今

秋の夜

北海道北見國中湧別校尋六

松原　廣

ふと眼をさますと、家の中は眞暗だ。少したつと「あゝ電氣を消してゐるんだな」と思ひながら窓の方を見ると白いカーテンに櫻の葉がうつてゐる。そして葉がゆらゆらゆれてゐる。そのうちに、カーテンの眞中頃に青白いものを見つけ出した。「なんだらうな。」と獨言のやうにつぶやいた。「カーテンを上げて見やうかな。手を出せば寒いだらう。何くそかまふものか」と考へた。どうじに手はカーテンのそばへ行つた。上げて見ると、青白く光つてゐるものが櫻の葉の間に見えがくれする。

始は何だかわからなくて、たゞ青白いものが光つてゐると思はれた。よく見るとそれは月であつた。

「うえきばち」

神奈川縣酒匂村

岩田泰雄（十三）

すみきつて、黑と青とがまじつたいかにも寒さうな空の中に、青白い光をはなつてゐる。「あゝきれいだ」と思ひながら、ジーッと見つめてゐた。その中に心がさびしくなつて來た。「あゝ今頃は上湧別にゐる姉さんは、どうしてゐるだらう。きつとすやすやと眠つてゐるだらう。」かう考へつゝカーテンを上げてみつめてゐる。僕の心はしせんとねむけにおそはれて來て、いつしか手をはなしてしまつた。そして何だか頭がぼうつとして來た。その時いせいのよい音を立てて柱時計がチーンチーンと幾度かなりひゞいた。

まちくたびれて

秋田市西根小屋町

附屬小學校（十一）

橋爪俊子

「たゞいま」。と硝子戸を明けて入つて來ると、かばんを置くか置かないのに、「お母さん金の星まだ來ないの。」といつもこう聞く。

「まだ來ませんよ。金の星は主婦之友と大てい一つしよに來るでせう。」といつも言はれる。私は本屋から持つて來ると、もう遊ぶ事なんかそつちのけにして本を讀みます。それだから日曜日など午前中に持つて來たりすると、もうすつかり讀んでしまふので、時にはまちきれないでおこり出す事もたびたびあつて、お母さんにしかられます。

「お母さん石川（本屋）は忘れてゐるのでないかしら。」などゝ言ふと、お母さんは「石川なんか一つでも多く賣れゝばいゝのだから、忘れたりなんかしないよ。」とおつしやる。「あゝそう〳〵此の間なんか電氣がついた時でも持つて來たのだ。」と思ひ出す。

通信

自由畫選評

山本鼎

△中坂石次郎君の「僕の顔」(賞首席)――しつかりした良いデッサンです。あいまいな處がなく、然もわりに大づかみに描いてある處がいゝ。耳がだいぶ上へつきすぎて居る。眉毛の處が壓すぎる。鼻が骨つぽすぎる。顔には圓みがあるのに頭は平らだ。其處には少も面の觀察がない。それから顔に比べて着物がはるかにまづい。一寸見ても顔と着物の印象が二つになつて居る。

△遊藤卓藏君の「弟の顔」(賞次席)――軟かい圓味がなか〳〵うまく出て居るが、中坂君の比べると弱い。表現のあいまいな處があちこちにある。

△長谷川千春君の「栗林公園新綠」――新綠の印象がよく出てゐる。たゞ木の蔭や、橋の暗い部分に使つてある紫色が浮薄ないやな色だ。

△堀内久三君の「秋の山」の繪、感じの佳ひ繪だ。空の綠がいけない。雨がふつて居るやうだ

△岩田泰雄君の「うえきばち」の繪はがき大の小品ではあるが、なか〳〵佳い繪だ。毛筆のデッサンに力がある。バックのねずみ色もいい調和となつて居る。

△田村きよ子さんの「はげいと」單純な輪廓描寫ではあるが、それ〴〵の葉の形も出てゐるし、色も美しい。(十四年五月)

幼年詩評

若山牧水

今度は一帶には拙かつたが、中に佳いのが數篇あつた。

河野正三郎君のは他の作もみな面白かつたことに『お月さん』は佳かつた。心持がそつくり言葉になつてゐるので、ともするといやみになりさうなことが歌つてありながら一向にいやみにならない。眞實の心の離有さである。久米百代さんのにも他にいゝのがあつた。どうしたものか、今度は學校組に佳いのがなかつた。

久し振に海遠公子さんのを推薦にした。いつもながらに清らかな美しい歌である。この人も今年はもう尋常三年生のわけだ。

小生は本文の方に評を附けるので此處の選評甚だ短し。

童謠の選後に

野口雨情

福井縣の吉川生君から「子供がきらひな人には童謠は作れませんか」と云ふ質問の通信が來ました。いつかも、これと同じやうな意味の通信が廣島縣の某君からもあつたやうに記憶してゐます。

子供がきらひだから童謠が作れないとか、子供が好きだから童謠が作れるとか、とかく子供中心でなくては、童謠が出來ないものかと考へてゐる人もあるやうに思はれますからちよつとお答へをしておきます。

童謠は童心藝術でありますから、その作品が兒童の心にピッタリ來るのであつて　尤も大人にも童心のある人にはピッタリ來ます〉必ずしも「子供の好ききらひ」に左右されるものではありません。いくら子供が好きであつても童心藝術を解さない人には童謠はわからないのであります。たとへ子供がきらひな人であつても童心藝術を解する人なれば、よき童謠が出來ます。又どんなに子供が好きであつても童心藝術がわからない人には、到底よき童謠は出來ません。童心藝術の境地は純情な藝術の法悦境であつて、往々にして兒童のもつてゐる事物の觀察眼に、一致することがあるのであります。かやうなわけでありますから、童謠を單に子供中心と考へることは、童謠の本質を知らない人々の誤りであることを承知していたゞきます。

童話の選後に

齋藤佐次郎

▽凡ての仕事は、若い人々の力によつて、行詰つた狀態を打破られて、新しい元氣な世界へと導かれて行きます。

▽日本の童話も、今、行きつまらうとしてゐます。もう三四年前の元氣は見られません。どの雜誌に出る童話を見ても、「またかア」といつたやうなのが多くなりました。こんな事では、折角興りはじめた日本の童話運動が駄目になつて了ひます。

▽童話作家と稱せられ　ゐる人々も、今その行きつまりを感じて、切りと努力してなられます。しかし、かういふ狀態を救ふのは、寧ろ、はつらつたる元氣のある若い人々の力でなければならないと思はれます。

▽さういふ意味で『金の星』は新進の人々の作を紹介する事に力をそゝいでなります。前月は推薦を二篇も擧げました。今後も出來得べくば　數くも二篇位は推薦作を掲げたいと思つてゐます。

▽たゞ、惜むらくはさういふい、作を得る事の困難である事だ。

△今月は漸く、長谷川好延氏の一篇を得ました。さして、特長ある作とも思はれませんが、「鳥さし五兵衛の面影」が如何にも鄕土的色彩のある事は、親しみを感じさせます。

▽少年少女の自作童話も是非掲げたいと思ひますが、どうも此の頃のは數は非常に澤山參りますが、い、出來のがありません。もつと〳〵面白いのを送つて下さい。

『金ノ星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今後より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

編輯室より

○青葉の頃となりました。漸く初夏の候が近づいて參りました。もう七月號の編輯を終へたのかと思ふと、今更ながらわれ〳〵雜誌の爲めに働く者に、歲月が早く過ぎる事に驚かされます。

○さて、皆樣！　お元氣でせうな。力に滿ちた初夏です。大に元氣よく暮さうではありませんか。

▽三島霜川先生の「出目助さん道中記」は先生の御病氣の爲めに暫くお休みになつてをりましたが、先生の御病氣もすつかりよくなられましたので、いよ〳〵續篇が出る事になります。併し、暫く休載になつてゐたことでもありますから、今度は頂を改めて、出目助さんが大活躍をします。三島先生の御病氣を心配して、大分に大勢の方々からお見舞が參りましたので、此の次第をお知らせ申し上げます。

▽三井信衛先生の「嘆きの薔薇」もいよ〳〵今月號を以て完結しました。波瀾重疊、結末が如何につくかと、皆樣をさぞ心配させた事と存じます。此の物語の挿畫を七ヶ月にわたつて描いて下さつた、石川寛山伯は、本名を樺島勝一先生とおつしやつて、朝日新聞の「大地は微笑む」その他の挿畫〳〵天下に鳴つてゐる方です。三井先生は次號から再び名筆をふるはれ「四つの圖靈」といふユテキに面白い奇譚を發表になります。是非御愛讀下さい。

自由畫掲載外佳作

田村きよ子（東京）　白澤　一郎（豐橋）
柳田　英二（青森）　上原　嘉治（鳥取）
駒井　三男（北海道）　川崎　良雄（京都）
粗山　吟子（東京）　豊島　泰（山梨）
高國藤米六（香川）　岩谷　貞三（秋田）
白井　永二（愛知）　梅田　正治（岐阜）
伊東　郁子（宮崎）　長谷川眞澄（千葉）
長谷川正道（千葉）　石榑　治子（東京）

幼年詩掲載外佳作

吉原　平（千葉）　小森（長野）
高畑　襄（福島）　齊藤　喜代（千葉）
二見紀代子（東京）　中村　重利（福岡）
露崎平四郎（千葉）　長岡　源助（山形）
古賀　俊次（福岡）　下平なつ子（長野）
根本　繪津（千葉）　星　佳一（宮城）
塚本マツエ（福岡）　平野　慎吾（埼玉）
村越　敬正（神奈川）　菅賀　勇（千葉）
遠藤松次郎（山形）　河野　浩（朝鮮）
市川　實（靜岡）　木下フサ子（福岡）
山川　三江（山形）　右田　榮（福岡）
中村クニエ（福岡）　富山　芳正（東京）
高島進之助（長野）　二神多久美（松山）
越中　勝亥（福島）　進藤よしみ（不明）
坡上春之助（和歌山）　佐久間信一（千葉）
原　達雄（長野）　平野　慎吾（埼玉）
岩谷　笑花（秋田）

中村　克巳（靜岡）　大村　チヨ（靜岡）
中里　政一（神奈川）　中島　泰子（東京）
林　善四郎（山形）　伊藤　たけ（山形）

綴方掲載外佳作

海老名花子（京都）　倉橋　巖（茨城）
海鐘　公子（熊本）　森田　勝夫（埼玉）
東條　美文（山梨）　漫原　精次（山口）
橋爪　俊子（秋田）　堀内甲子雄（長野）
井原　盛柄（島根）　白澤　一郎（豊橋）
中里　政一（神奈川）　小林　秀雄（新潟）
伊藤　登兵（庫）　松原　盛（北海道）
村越　敬正（東京）　藤田　房枝（滋賀）
若林　喜美（不明）　白井　永二（愛知）
芳賀　正見（東京）　奥澤榮次郎（東京）
村上　博（東京）　井上　秀治（茨城）
時岡　マス（滋賀）　野瀬　ツル（福井）
岡本　ミカ（滋賀）　幾舘　米子（滋賀）
川口　ハナ（滋賀）　岡野　房一（京都）
上原　嘉治（鳥取）　今村　榮（千葉）
小澤　一男（長野）　伊藤　康一（東京）

童話掲載外佳作

角田　恒（群馬）　坂本　節子（和歌山）
村形　長壽（東京）　田淵　默鳥（兵庫）
荒井　正巳（茨城）　大塚眞佐交（埼玉）
宍戸　功夫（東京）　小島　和子（東京）
三谷　公臣（京都）　永野　春雄（東京）
松井　奥（東京）　尚井　正勝（兵庫）

新らしく出た本

■世界童話叢書第一編　支那童話集
（小泉一雄編小糸源太郎裝幀挿畫）

童話の本は世間に澤山に出てゐますが、大人にも、少年、少女にも、幼い子供にも、讀んでも、聽かせても、面白くて興味の盡きないのは、この本です、今まで餘り世間に知られてゐない珍らしい話を集めたこの本は、兒童と云はず、どなたにも、好讀物としてお勸めいたします。そして裝幀その他は、有名な小糸源太郎先生の力を入れられた物だけに、他に眞似も出來ない高尚な美しい本です（四六判箱入美本三〇六頁、定價壹圓五拾錢、東京市外上駒込二八、金蘭社發行）

■世界童話叢書第一編　印度童話集
（豊島二郎編、高坂・石橋・繁岡・園田四畫伯裝幀さしゑ）

皆さんは印度の童話をお讀みになつたことがありますか。世界中で最も意味の深遠な童話は實に印度の童話です。この珍らしい本が出たのは、眞に讀書界に取つて喜しいことです。それでこの叢書が、ユーモラスで上品で値段を安くと云ふ理想の下に發行すると云ふ出版者の意も嘉みすべきことです。（四六判箱入美本、三〇八頁、定價壹圓五拾錢、東京市外上駒込二八、金蘭社發行）

青柳　一雄（神奈川）　塚本　生（靜岡）
中島　佐武（奈良）　井戸上達二（奈良）
上田　茂美（東京）　三谷　榮一（不明）
濱武　誠（福岡）　坂本　昇（北海道）
篠原欣次郎（栃木）　都築　要（愛媛）
三澤　太郎（北海道）　大胡　敏郎（東京）
庭　春雄（東京）　白菊（熊本）
木下　龍也（東京）　若林　喜美（東京）
藤原　義文（神戸）　波多江正男（福岡）
河口　俊子（愛知）　仲村巢宰正（沖繩）
飯島　長八（不明）　田原佐多緒（京都）
岸　久子（東京）　宮本　濱彦（神奈川）
山田　一郎（東京）　若佐　新榮（青森）
寺師　政子（東京）　武部　靜枝（鳥取）
吉田　正三（東京）　矢田　元代（山口）
山田　信夫（横濱）　有賀　勝信（長野）
早川　常七（岐阜）　服部　信彦（東京）
小林　德藏（秋田）　工藤　正男（青森）
有賀　恒男（長野）　野中　清治（富山）
川井田十路（秋田）　中里　政一（神奈川）
鈴木　秀三（東京）　片山　絃美（東京）

童謡掲載外佳作

【大人篇】

小林　重義（東京）　松永　武夫（東京）
廣瀬　正（茨城）　山内　敬和（高知）
宍戸　功夫（東京）　鷲野ふくな（大阪）
板野　潤（大阪）　宮崎　輝城（東京）
笠原　信芳（東京）　宮尾　逸（臺灣）
湊　守一（東京）　西東十四春　佐賀
鵝機多味男（靜岡）　池谷　青水（靜岡）
中島あらと（熊本）　谷川　英一（東京）
原　まさる（長崎）　與田　準一（福岡）
野村　詩樓（臺灣）　神保　秀雄（仙臺）
後藤　抱星（愛知）　加藤　正文（松山）
福田銀の星（神奈川）　日高　捷一（臺灣）
鈴木　旁（東京）　西山よしかず（神奈川）
西野　キヌ（岩手）　西野　虹路（岩手）
寺田　蒼兒（大阪）　木村はるみ（熊本）
川井田十路（秋田）　上田しげみ（東京）
石崎　康吉（富山）　白井　義美（愛知）
佐々木　茂（東京）　深野小太郎（東京）
白井　陸（愛知）　福田ハツ（神奈川）

【小人篇】

各務　滿江（岡山）　岩谷　貞三（秋田）
清田　啓一（千葉）　今村　榮（千葉）
石井正三郎（茨城）　高橋　健兒（茨城）
須永　たけ（群馬）　矢田　末吉（大分）
高橋　健兒（福島）　加藤　雪子（山口）
小清水文夫（千葉）　山本　力（朝鮮）
波多江正男（福岡）　吉原　平（千葉）

新誌友名簿

脇山よくな（北海道）　田近千代子（京都）
北野　牧夫（東京）　相良美代子（東京）
高橋みや子（北海道）　山藤　彰（兵庫）
宍戸　功夫（東京）　永田　雅一（長崎）
峰　千代子（京都）
中島邦太郎（埼玉）

（以下次號）

■國語讀本に現はれたる人物史考
（千葉正規著）

教科書の國語讀本にある、古今の英雄、偉人、學者等五十餘名の傳記を明確に叙したもので、小學二學年から、六學年迄を學年別にして、その課目の名を擧げたのも深切な編纂振りです。この書は教育に從ふ人々の無二の參考書となるのみでなく、一般の人にも、趣味と教訓とを兼ね得らるゝ良書として、推奨いたします。（四六判箱入、二三七頁、定價壹圓八拾錢、東京市神田區錦町一ノ一米本書店發行）

■こども舊約聖書物語
（金の星社編）

まア、何と云ふ美しい本でせう。クリーム色の表紙に、くッきりと浮き出たやうな原色版の華やかさ。同じく口繪の場面は、今、アブラハムが、自分の獨り息子を殺して、神に捧げやうとしてゐる所です。アブラハムは、それほど深く、神を信じてゐたのです。本書には、アブラハムの話以下、「鹽の柱になつた女」だの、「嫁えらび」だの「神樣と角力をとつた話」だの、面白くてたまらぬ話や畫が、ぎッしりと詰つてゐます。金の星社自慢の本ですから、是非御覽下さい。（定價九拾錢、本郷勤坂町　金の星社發行）

讀者だより

ございました。あのツル〳〵氣持よく辷る表紙に、幾度頬ずりしたことでせう。あんまり嬉しくてクチヤクチヤに破りたうございました。此の淋しい北國にも、春は訪れて水仙の蕾かく伸びるのが見えるやうであります。叔父さん、金の星の叔父さん、左樣なら（弘前　柳田英二）

▼童謡の盛な内地を遠くから羨しく望んでゐる一人です。童謡は民謡のやうに民衆化せねばならないと思ひます。趣味家のみ専有すべき藝術ではありません。いやしくも子供の親たるべき人は、是非研究して欲しく思ひます。童謡は芳しい藝術であると同時に、教育であるべきであると思つてゐます。終りに五月の童謡號に拙作を二等に當選さして頂いた事を厚くお禮申上げます。（臺灣　日高紅椿）

▼私は今度、愛讀者になりましたどうぞ御指導下さい。それから自由畫は色をぬつてよろしいのですか。お答へ下さい。（福島　合津しづを）

▽クレイヨン、墨、鉛筆、繪具、なんでもかまひませんが、線を濃くおかき下さい。（係）

▼記者先生。お約束の『星の會』主催、童謡童話劇の寫眞を御送り致します。三月二十二日の日曜日。大阪高島屋呉服店横土にて、會を催しました。當日は學校が休みなので、可愛らしい少年少女で會場が一ぱいになりました。（大阪　森昇）

▽美しいエハガキ、ありがたうございました。（記者）

▼待ちに待つて居ました「世界童謡號」何といふ素晴らしさでありましよう。編輯室での御奮發振りが想れます。特に推奨童謡は現今の如何がはしいもの、流行する童謡界に、實に私たち初心者のよりよきお手本とすべきでありませう甚だ申しわけない事には、私のこども――古賀文子、高野ヤエノの住所をおとして居たことです。お詫び申します。（福岡縣八女郡下妻校　與田準一）

▼童謡號はほんとうに面白かつた記者先生に御禮致します。それから記者樣、讀者の童話が出てゐませんが。募集してゐるのでせうか私も童話を投書しても宜しいですか。（埼玉　ひろたか生）

▽どん〳〵投書して下さい。いゝのがあればいくらでも載せます。（係）

▼本月から「金の星」の愛讀者にしてゐたゞきます。拙いものですけれど、みなさまのお導きをまつばかりでございます。どうぞよろしく　加藤京子）

▼金の星の諸先生。僕は加藤先生の「小鳥は空に」がだいすきです。讀者諸君にヨロシク。（赤坂　寺島信夫）

▼私は一月號より愛讀者です。こんど始めて投書しました。御なかさ入りにして下さい。妹の童謡も同封致しました。どうぞよろしく（岩手縣　西野光二）

▼お懷しい「金の星」の皆さま、私も今回岩手の二關君の紹介で「金の星」の誌友になりました。何うかよろ〳〵、奈良市　中島佐武）

▼記者樣。童謡號の發行を喜び、そして先生方の御盡力をお禮申上げます「小鳥は空に」ほだん〳〵面白くなつてまゐりましたれえ、それから「酒と父親」は一息に面白く心を引つけられて讀んでしまいました。ほんとに酒をたくさん飲むお父さんはいやです。ほんとに子供が可愛想ですれエ。（親馬、子馬も大變面白うございました。最後に童謡ですが、皆樣はほんとうにお上手ですれ。あんまりほめるとへつらいと思はれるから先ずはこれで。（東京　鈴木芳）

▼世界童謡號、今着きました。前號とくらべて内容の充實さ！おどろく程大發展しましたね！徳惠姫の御作御上手ですれ。小鳥は空に嘆きのばら。視覺の軍醫、毎月まじめに讀んで居ります。悲しき夜鶯。これもまじめによみました。私は純なる心をもつて、金の星をまじめに愛する者です。誌友山君よ。純なる心をもつて、永久に聖い路を歩んで行きませう。（岩手　二關昌美）

▼僕は毎月「金の星」にでる、作曲してある童謡が欲いたいのです。僕は作曲してあるのを見てもわからないのです　何か無智な者にもわかる樣な作曲についての本はないでしやうか。どうぞおしえてください。出來る事なら作曲もして見たいのです。（神奈川　茶木七郎）

地方文藝雜誌一束

（入社希望の方は直接發行所へ參照會下さい）

聖路　岩手縣一關町八幡街　西野光二

松虫　奈良市西御門町　中島佐武

銀の壺　和歌山縣田邊町福路町　草笛社

白い舟　兵庫縣有馬郡貴志村下井澤　加滋喬雄

宵の星　福島縣石城郡平町字田町五十四　會津靜雄

明詩　埼玉縣越ヶ谷町　明詩社　内中村如水

▽佐賀縣の樋口詩一樣。名所のエハガキ、澤山御送り下さいまして有難うございました。記者

▼金の星紙上で御芳名を拜した、大出きく子さん。私の姓と同じのあなたは、いつも良く佳作欄で逢へます。そのくせ私の方がどうも不出來で、成績の好いあなたの御芳名が誠にうらやましく思ひますそれから、先生。つたない私がこれからまづいながらも眞劍に投書を致します。どうか一度なりともお目通し下さる樣に。（名古屋　つたない者より）

▼大阪の櫻田はるなさん。お別れ申してから四年にもなりますれ。私は今でも金の星の愛讀者です。野口先生の童謡に憧れて、都の人間のひとりになりました。（東京　北野牧夫）

▼世界童謡號、素的素的！　私は思はすたからかにはばしつたのです。一等名方さんの天神さん。大變すきでした。何度も〳〵口づさんでみました。推薦童謡では青柳氏のあそこあの藪。鹿山氏の空の橋、緒方さんの雀のかくれんぼが最も私の目をひいたものです。及ばず乍ら私もしつかりやつて行かうと思ひます。（檀上春之助）

▼金の星讀者の組織せる火星會

私等の組織しました火星會の内容は、孤く簡單であります。それは校友同志生及び近所の四年生以上の生徒の中で、金の星を愛讀する者を正會員として居ります。火星會の規則は左の通りであります

一、毎月第三日曜日例會を開き、金の星内容の雜感を述ぶる事。

一、火星會の會員は、常に金の星を心から愛する人なのみ。

一、本會は六月號より例會を開くこと。

右の事項に依り、去る五月十七日第一例會を開きました。皆の意見は一致いたしましたので、一寸記者樣に御目にかけます。御氣障りも御座居ませうが、どうぞあしからず。

【批評】「おい泥棒さん」は久米先生の作だけあつて、讀んでゐる内に、一人笑へて來ます。又沖野先生「ルオンと涼也」は、あつさりとしたよい讀み物だと思ひます。又「嘆きの薔薇」ありふれた今迄の讀み物と違つて、大へん興味ある お話です。次號の來るのを、大へん待つて居ります。其他ノヴルの不平だとか、い〳〵色の月だのは、皆名作家の執筆だけあつて、いくへんよんでも少しもあきが來ません。今月より又繪物語「ギリシヤ神話」なのせられた事は大へんうれしく思ひます。これだけでも次號が待ち遠いです。

【御願ひ】

一、「金の星」に毎月一題武井武雄先生の童話及童謡がほしい事。

一、「金の星」の六月號には、大へん面白い兒童劇がありましたので、皆大喜びで御座いましたが之からも少くとも一月置位にのせて頂きたい事。

以上。（京都　田原佐多緒）

金の星社 七月號

出版だより

近刊

沖野岩三郎先生著

日本の兒童と其の藝術教育

▽定價金壹圓八拾錢
▽送料 拾貳錢

待ちに待たれたる沖野先生の一大著述であります。童話と兒童教育の研究家として、現代に沖野先生に及ぶ方はありません。その沖野先生が長年の間に研究された處を此の本によつて示されたのですから、その方面の研究書としてこれ程立派なものはありません。童話と兒童藝術の研究家は勿論のこと、すべて兒童の問題にたづさはつてゐる方達に、是非本書の御一讀をおすゝめいたします。四六判三〇〇頁の一大著述であります

いよ〳〵發行

世界少年少女名著大系（18）

ギリシャ英雄物語

▽定價 金九拾錢
▽送料 拾貳錢

ギリシャの英雄たちの傳記は、少年少女の讀物として、恐らく幾度讀んでもつきない興味が湧いて來ます。名著大系の第十八編のこの『ギリシャ英雄物語』は、特に著心研究の結果、有名な世界的文豪キングスレーの英雄傳をもとにして、少年少女の讀物として最も面白いやうに書きました。

ギリシャ英雄たちの一生は、實に奇々怪々、一度讀み出したら、止められない程に興味のある話です。しかし、本社の「ギリシャ英雄物語」は他社からこれまで出されたやうなのとは違つて、文豪キングスレーが自分の愛兒のために特に著した名著を土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることの出來るものです是非御一讀下さい。

忽再版

奴隷トム物語

涙の物語『奴隷トム物語』をお讀みにならない方がありましたら、非常に不幸な方だといはなければなりません。

『奴隷トム物語』を讀んで泣かぬ方はありますまい。その涙は、汚れた心を洗ひ清めてくれる程に尊い涙です。如何なる苦しみにも堪え忍んで、常に神を信じて、正しい生活を送る奴隷のトム！

又、幼い少女でありながら、常に清い魂を持つてゐて、あらゆる不幸な者を愛する少女エバ！しかも、父親に奴隷たちを解放するのなれがつて靜かに死んで行く可憐なるエバ！誰かこの少女の清い魂に涙をそゝがずにゐられましうか。

この少女の絶叫こそ、やがて偉人リンコルンの奴隷解放となつてあらはれました。エバの魂は、即ち此の本の原著者者ストー夫人の魂です。ストー夫人の名は、名著『奴隷トム』と共に全世界に知れわたり、偉い仕事をこの世の中にのこした王様や女王様と同樣に、永く〳〵輝いて殘ることでありませう。

金の星社は本書を發行することに、非常な誇りを感じてゐます。それ程本書は價値ある本です。

（定價金九拾錢 送料拾貳錢）

いよ〳〵發行

沖野岩三郎先生著
童話讀本（2）

金の釣瓶

▽定價金壹圓送料拾貳錢

日本で初めて現れた童話讀本として沖野先生の『赤い猫』は非常な好評を受け重版又重版の盛況を呈しましたが、今度第二編として『金の釣瓶』が發行になりました。この編には沖野先生の最もお得意の作として各地でよく講演される長篇『十人の大將』をはじめ、名篇『金の釣瓶』等、童話讀本として最も理想的な、興味深い話ばかり集つてゐます。近く本社から發行になる沖野先生の『日本の兒童と其の藝術教育』をお讀み下さると、沖野先生が童話を書く上にどんな用意と抱負を持つて居られるかゞ解りますが、この著者でこそ、初めて日本の童話讀本を書く可き人である事を皆さんは御了解になりませう

課外の讀物として、これ程よい本はありませんから、皆さまのお書齋にに勿論のこと、全國の兒童圖書館に是非備へられるべき本であります。

讀後感

『西遊記』のこと（賞）

松本草平

西遊記といへば一體何のくらゐ讀んだらう、全く欠伸の出る程讀んでゐるのであるが、――と言つて私はこれまで讀んでゐて一度も欠伸をしたことはないのです。すつと以前雜誌『童話』誌上に長いこと宇野浩二先生のお書きなつた西遊記をは最初讀んだものだけあつて本當に面白く雜誌の出來るのを待つて居て讀みました。それから、富山房やイデア書院から刊行されてゐる西遊記を夢中になつて讀んだのです。けれど、それらはみな頁數が長く、したがつてその中に出て來る場面に大袈裟な、いかにも作つた同じ樣な事を繰り返してゐる樣に思はれるのがあつて退屈、――と云ふ程でもないが先に興味をひかれてゐる讀者にかへつて折角の興味をあまり遠まはしにしてうすくしてしまふ樣な氣がするのであるが、今度新らしく讀んだ少年少女名著大系の西遊記は最初あまり期待してはゐなかつたのですが、讀み初めると私は一氣に讀んでしまひました。そして、讀み終ると私はこれまでになく好いと思ひました。何故なら、他の頁の多い全譯の西遊記にくらべて、初めから終りまで此の一册の全體に渡つてゆるみのない興味は實に此の名著大系以外に見られないところであります。その上他の高價なのに比して極めて安價なのと、裝幀や寺內先生の澤山の挿繪のあることゝが、新らしく西遊記を讀もうとなさる方にとつて此の上もないよい機會であると思ひます。

（神田表神保町三　大橋方）

『青い眼の人形』を薦む（賞）

枯野けん兒

青い目をしたお人形はアメリカ生れのセルロイド

お、何といふ美はしい歌聲なのでせう！　私が温かい書齋で讀書してゐた時でした。然かもその本が奇蹟的にも野口先生の『青い目の人形』だつたのです。私はほんとうに驚きました。

歌聲が輕く流れてきた時、天から奏でられたものと思つた程――あの紅色の表紙から拔出た樣な可愛い、女の子が、小さなお辨當箱をさげ幼稚園からの歸りか、何か手にもつて無邪氣に歌ひ續けて行くのです。私は幼い女神の發をぢつと見守りました。歌の音が絶えるまで、その時童謡は兒童のもので、作者はあつても一日兒童の手に渡れば、兒童のものとなり、なればなる程、眞、善、美に立つ藝術だといふ事を感じました。實に『青い目の人形』中におさめられたすべての童謡こそ、兒童の生活に一致し、直に兒童と握手の出來る作曲のみです。（三重縣桑名傳馬町）

『ブウ太郎鍛冶屋』をよみて

雨宮恒文

おちい樣におれがひして買つていただいた『ブウ太郎鍛冶屋』……何んと言ふきれいな、そして愚になる面白い本でせう。武井先生どくとくの繪でかざられた表紙、なんとも言はれずきれいな本、まつたく廣告以上ですきれいな本、また今年學げい會に先生が「なにか面白い話を見つけて來てやりなさい」と言はれましたので、家へ歸へつてブウ太郎をひつくりかへして見つけんに指手を受けやりました。たら、さかあの樣な本が頒々發行されん事をれがひします。（山梨縣東八代郡祝村上岩崎）

懸賞創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

【注意】課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何篇出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫になるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は六月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は九月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

【注意】童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づゝ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づゝ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓二拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい
振替口座東京五九五九六番

【送金の注意】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十四年六月九日印刷納本（毎月一回）
大正十四年七月一日發行（一日發行）
編輯兼發行人 齋藤佐次郎 東京市外目黒三百五十一番地
印刷人 小端安之助 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 安藤商堂 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 金の星社 東京市本郷區動坂町三五九 振替口座東京五九五九六番 電話小石川五三八七番

金の星社發行の名著

沖野岩三郎先生著 **森の祈り**（長篇物語）
本篇は紀州の漁村に育つた兄妹の哀れな物語である。父が行方不明になつた後、祖父と母と共に世の荒波にもまれつゝ奮闘努力を續け、遂に父に再會する迄の血涙記である、沖野先生の傑作。
四六判箱入美本 本文二四〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾二錢

小島政二郎先生譯 **狼少年**（長篇物語）
印度の自然の中で狼に育てられて成人した少年を主人公にして熱帶の森林の中で猛獸と共に生活しながら様々の冒險を行ふ一大雄篇であります。原作はキップリングの世界的名作。
四六判箱入美本 本文三二〇頁 定價金壹圓九拾錢 送料金拾貳錢

野口雨情先生著 **青い眼の人形**（童謡集）
野口雨情先生の童謡の中で最も有名な傑作ばかりを網羅した一大童謡集です、先生の童謡集で今發行されてゐるものは本書一冊のみ。裝幀・挿畫は、現代一流の有名作家の作を漂山に掲げました。
四六判箱入美本 本文二二〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢

三宅房子先生譯 **家なき子**（長篇名作）
原作は佛國文豪マーローの作になり、孤兒の生涯を書いたもので、名家の生れであり乍ら不思議な運命にもてあそばれて、遂に旅役者に賣られ、旅から旅へさすらひ歩く哀れな物語です。
四六判箱入美本 本文二七〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢

武井武雄先生著 **ブウ太郎鍛冶屋**（繪入童話集）
武井先生の童話と畫は、實に先生獨特のもので、こんなに面白いものが日本にあらうとは思はれない程です。鍛冶屋のブウ太郎はじめ惡魔ピッピキなどが現れてそれは〳〵面白い話を皆さんにします。
四六判箱入美本 本文三〇〇頁 定價金壹圓六拾錢 送料金拾貳錢

東京市外一五三三 東京市麻布區南部坂町五九 振替口座東京五九五九六番 電話小石川五三八七番
金の星社

ライオン煉齒磨
チューブ入
心地よいライオンねりはみがきで
夜寢る前に齒をみがきますと、
決してむしばになりません。

【定價金四十錢　送料一錢】